

2020年度 文部科学省委託研究事業

特別支援学校高等部卒業等を中心に
対象とした若者の学びを展開するための
学習プログラムの開発事業

最終報告書

一般財団法人福祉教育支援協会

内容

はじめに	3
1. 事業計画	5
1-1 事業の概要	5
1-2 具体的な内容	8
1-3 連携協議会	14
1-4 成果と効果	16
1-5 新型コロナウイルスを受けての修正	19
2. 第一回オープンキャンパス 五輪を知って楽しもう (埼玉県和光市)	21
2-1 開催背景と準備及び広報	21
2-2 カリキュラム内容	22
2-3 開催レポート	27
2-4 参加者集計及び感想	29
2-5 まとめ	34
3. 第二回オープンキャンパス ソーシャルコミュニケーションカレッジ (長野県松本市)	35
3-1 準備及び広報	35
3-2 カリキュラム内容	36
3-3 開催レポート	45
3-4 参加者集計及び感想	46
3-6 まとめ	53
4. 第三回オープンキャンパス チャレンジランキング (浦和大学)	55
4-1 準備及び広報	55
4-2 カリキュラム内容	56
4-3 開催レポート	68
4-4 参加者集計と感想	70
4-5 まとめ	80
5. 第四回オープンキャンパス オープンキャンパス+WEB (山梨県笛吹市)	81
5-1 準備及び広報	81
5-2 カリキュラム内容	81
5-3 開催レポート	86
5-4 参加者集計及び感想	88
5-5 まとめ	91

5-6	参考 オープンキャンパス全体の参加者集計	92
6.	重度障害者の生涯学習を推進するフォーラム（東京都渋谷区）	93
6-1	準備及び広報	93
6-2	フォーラム内容	97
6-3	パンフレットの作成と配布	100
6-4	参加者集計及びアンケート	101
6-5	参加者の感想（アンケート回答）	104
6-6	まとめ	114
7.	訪問講義	115
7-1	概要	115
7-2	詳細	116
7-3	まとめ	157
8.	共生社会コンファレンス	158
8-1	開催プロセス	158
8-2	広報と受付	159
8-3	プログラム構成及び内容	165
8-4	参加者概要とアンケート結果	170
8-5	まとめ	190
9.	連携協議会	191
9-1	第一回開催概要	191
9-2	第一回開催内容	192
9-3	第二回開催概要（最終報告会）	192
9-4	最終報告会及び第二回開催まとめ	193
10.	総括	194
10-1	成果と効果	194
10-2	まとめ	198
10-3	次年度に向けて	198
11.	3か年の総括	200
	参考資料	203

はじめに

本事業は文部科学省・総合教育政策局男女共同参画共生社会学習安全課障害者学習支援推進室主幹の「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実」に向けた政策の一環として行われたもので、取組の趣旨は「学校卒業後の学びや交流の機会整備」「生涯のライフステージを通じた学習活動の充実」である。

平成 26 年に日本が障害者権利条約を批准し、平成 28 年には障害者差別解消法が施行されるなどノーマライゼーション社会の実現に向けての取組が加速する中で、平成 29 年に松野博一文科相（当時）が「特別支援教育の生涯学習化に向けて」としたメッセージが寄せられ、同年度に文科省生涯学習政策局に「障害者学習支援推進室」を新設、同時に省内各部署から横断的にオブザーバー参加する「特別支援総合プロジェクト 特命チーム」が結成されたことから障害者の生涯学習に関する政策が具体的に動き出したことから始まる。

平成 30 年度に文科省は「学校から社会への移行期と、生涯の各ライフステージにおける効果的学習に係るプログラム・実施体制等に関するモデル開発」を目的とした「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業を開始し、3 か年事業の初年度は自治体、大学、社会福祉法人等全国 18 団体に委託し、この中で一般財団法人福祉教育支援協会は地域で市民と障がい者が学びあうオープンキャンパス事業を中心にしたプログラムを展開し、「障がい者と市民が学びあう」スタイルを実践検証した。さらに 2 年目となる令和元年度には、この学びあいの形を他地域でも実践するとともに、初年度の調査で明らかになった重度障害者の学びのニーズを受け止め、実践を通じてのカリキュラム開発も計画し、新しい障害者の学びの世界を確実なプロセスとコンテンツを開発することで多くの受益者につながるようとの考えで、事業を遂行した。

そして最終年度の 3 年目には、2 年で築いてきた学びの手法を地域に広く展開するとともに、重度障がい者向けの学習にも注力する内容を計画したが、新型コロナウイルスの影響により当初計画していた内容の一部変更を余儀なくされ、新型コロナウイルスへの対策に苦慮しながらの事業遂行となった。詳細は本報告書で明らかにしていきたい。

本事業を行う一般財団法人福祉教育支援協会は、平成 27 年にコミュニケーションを重視したプログラムで就労支援を行うことを主眼に就労移行支援事業所シャローム所沢（埼玉県所沢市）開設とともに同市に設立された。平成 28 年には埼玉県和光市に初めてとなる就労移行支援事業所であるシャローム和光、平成 29 年に計画相談事業所シャローム新倉（埼玉県和光市）、令和元年度に就労移行支援事業所シャローム浦和（同さいたま市）を設立した。さらに就労支援に関して企業側の啓蒙活動の活発化に向けて、障がい者雇用推進センター（東京都中央区）、障がい者と企業の良好なマッチングの活性化に向けて職業紹介事業所シャローム日本橋（同）を設立するなど障がい者の就労に関する教育とその具体的な戦略に関する事業を行っている。これら福祉事業を行う際のキャッチフレーズは「つながる、からはじまる」であり、地域のリソースや障害者の「思い」をつなげて、「願い」を実現しながら、よりよいコミュニティを作ることを心掛けてきた。

福祉事業の経験から、とりわけ就労支援の実践から「学び」の必要性を強く実感し、その具体的な対応を先駆者たちとの積極的な交流の中で研究し、シャローム大学校（埼玉県和光市）を開設し、障がい者の学びへのニーズに応える取組を実践している立場である。

この立場から特別支援が必要な18歳以降の方々への教育の確立を目指して、初年度の本事業では広く障がい者に学びの機会を提供するために、「オープンキャンパス」として参加してもらうプログラムを考え、「基礎教育ステージ」、「関わりあいステージ」、「実践教育ステージ」構成で、埼玉県和光市や同さいたま市で「学ぶことは楽しい・面白い」を実感してもらうカリキュラムを実施した。初年度の検討を受けて令和元年度は、本拠地である埼玉県和光市、さいたま市で地域のコミュニティとともに開催するオープンキャンパスとして実施するとともに、オープンキャンパスを全国各地でも開催可能にするモデル化を目指し、静岡県伊東市、長野県佐久市での実施を試みた。さらに、農業活動との連携を見据えてさいたま市のNPO法人とともに「田んぼでの稲刈り」「畑でのフィールドワーク」も行った。

オープンキャンパスとは別に医療ケアの必要な重度障害者に対しての学びのコンテンツを研究開発に向けて東京都内の4人（男性2人、女性2人）に対しても年間15回程度の講義を実施し、その内容の妥当性も検討。さらに東京大学と共催で「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施した。

これらの経験を踏まえ3年目では、各地でオープンキャンパスの実施、重度障がい者への学習の研究、重度障がい者に対する学びの場を拡充するためのフォーラム開催、昨年の共生社会コンファレンスの内容を研究する勉強会の開催と第二回目の共生社会コンファレンスを計画した。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で首都圏を中心に活動していた福祉教育支援協会は移動や集会を制限される状況となり、結果的に一部の計画は実行できなかった。同時に、このような危機の中で、ウェブでつながれることに着目し、本事業の主体的役割を果たしてきた福祉教育支援協会のシャローム大学校は、ウェブでつながる学びの提供に焦点を当てて、みんなの大学校として2020年秋からスタートすることになった。

本報告書では、本年度で実践した事業それぞれの計画、準備、実行、感想を示しながら、障害者の生涯学習に資するカリキュラムやプロセスなどの有効性を提示し、今後全国的に障害者の学びを展開するにあたっての基礎資料としての役割を果たしたいと考えている。

本事業コーディネーター
一般財団法人福祉教育支援協会/みんなの大学校
引地達也

1. 事業計画

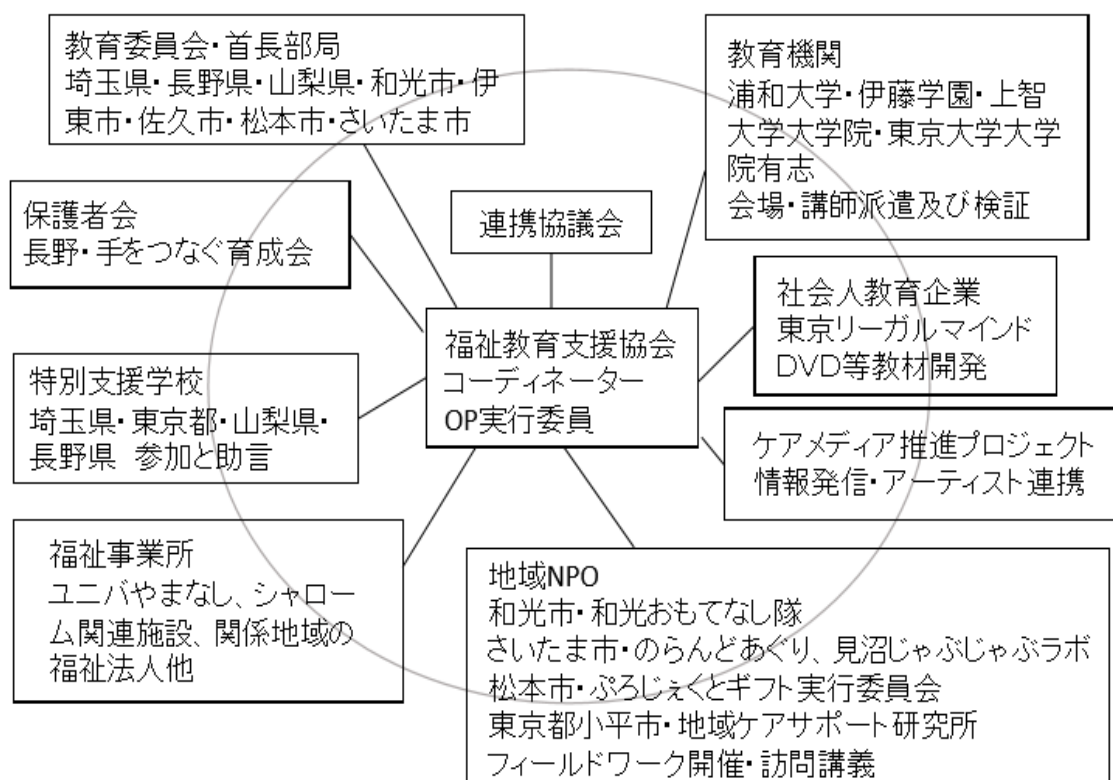
1-1 事業の概要

本事業は以下4つの事業に分かれ展開することになっている。

- ・オープンキャンパス事業
- ・重度障害者向け学びの実践事業
- ・重度障害者向けの学びをネットワーク化するフォーラム事業
- ・共生社会コンファレンス事業

そのうり上記3つの事業を行うにあたっての全体像は以下であり、概要、目標、目指す方向性も以下で示す。

■全体像



■ オープンキャンパス及び報告研究会全体像

開催地	基礎教育ステージ	関わりあいステージ	実践教育ステージ	コンファレンス 報告研究会
和光市		五輪前学習・こみひろいしよう		
松本市	みんなて学ぶコミュニケーション・市民交流			
甲府市	みんなて学ぶコミュニケーション・市民交流			
さいたま市	レクリエーションが結ぶ新しい学びのかたち			
さいたま市		見沼たんぼで稲刈り		
さいたま市		畑で何ができるのか		
佐久市・伊東市				研究会開催

■ 訪問講義全体像

対象	前期(4月～7月)	夏休み期間(8月～9月)	後期(10月～1月)
東京都内A氏	12回講義	外出レクリエーション(1回)	12回講義
東京都内B氏	12回講義	外出レクリエーション(1回)	12回講義
埼玉都内C氏	12回講義	外出レクリエーション(1回)	12回講義
埼玉県内D氏	12回講義	外出レクリエーション(1回)	12回講義
カルガモの家	病院内で招集型講義	希望者と個別協議	病院内で招集型講義

訪問学習に関するフォーラム 全国の取組を連携させる催しを首都圏を会場に開催

[概要]

発達障害・知的障害・精神障害のために「学びにおいて支援が必要な方々」、さらに私立や公立の特別支援学校在校生及び卒業生、現在就労移行支援事業所等の福祉施設に通所する「学びを求める方」等を対象に、これらの方々が生涯の「学び」の確実性を確保するため、また社会での生きがいややりがいを考えられる素地を育成するために、昨年に引き続き「オープンキャンパス」を実施し、それぞれの障害がある方々と支援者、そして一般の方々が、ともに関わりあい、学びの面白さを気付いていただくとともに、社会で活躍できるステージをイメージすることを目的に、その内容の妥当性を広く一般への普及や継続した学びの有効性を観点とし検討・開発していく。同時に「オープンキャンパス」に来られない状態にある医療ケアの必要な方々には「訪問講義」として、講師が訪問して講義を行う事業も加え、18歳以降で医療ケアの必要な方々への学びのニーズやその学びの在り方も引き続き研究し、各地のニーズに応えるための枠組み作りとしてネットワーク化に向けたフォーラムも開催する。

オープンキャンパスの開発プログラムは、学びの基本として、以下3ステージのフローで

展開し、各地域から参加する受講生がともに学び合うなどの交流も交えて学びの面白さを体感することを主眼としている。訪問型に関しても、受講者のニーズを踏まえながら、学びがより生きがいにつながることをイメージして昨年の実績を踏まえ内容を充実させていく。

- ・基礎教育ステージ 学び方やものの成り立ち、生き方や考え方などの基本について考える
- ・関わりあいステージ 地域に関するフィールドワークを通じて、参加者とともに関わりあい、その中から協力し学んでいく面白さや社会参加の楽しさを実感
- ・実践教育ステージ 社会における自己を意識した上で、何をどのように学ぶのが有効かを考えながら、資格取得等の実務に近い学習を行い、仕事と学びの一体感を体験してもらう

2018年度に合計6回、2019年度には地方開催を含め合計7回のオープンキャンパスを実施したことで、授業の伝え方、時間配分、サブティーチャーの役割等の基本的な知見は得ており、この妥当性や有効性をさらに確かめながら、受講者の反応から本プログラムが社会性・協調性の育成など、今後社会で生きていくための力を養えるかを大きなポイントとして、検討する。さらに拠点となる埼玉県和光市は勿論、開催地の自治体や福祉関連領域、教育関係、そして市民など地域との連携の最適化も研究していく。

本年度は2020年2月14日に東京大学を会場に文科省と主催して実施した「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」での議論を各地域に伝え、地域での学びを促進する役割を担うべく、2019年度にオープンキャンパスを実施した長野県佐久市と静岡県伊東市でコンファレンスの「報告研究会」を実施し、地域への啓もう活動も行いながら、2年目となる共生社会コンファレンスの内容を発展させていくために取り組んでいく。

本研究を進めるにあたっては、様々な知見を持つ方々で構成される連携協議会で活発に議論・検討していただくのは勿論、コーディネーターを中心とした研究チームが、当事者の声を反映することが最も大切だと考え、視察等を含むフィールドワーク、面談や調査、ヒアリングも進めていく。さらに現在、一般財団法人福祉教育支援協会が運営する就労移行支援事業所シャローム、シャローム和光、シャローム浦和に通所している特別支援学校卒業生、そしてシャローム大学校に通う学生に関しては、定点的な検証をすることにより研究の精度を高める材料であると考えている。

このすべての過程において、社会における障害者の学びの可能性を広く世の中に伝えるために、「ケアメディア推進プロジェクト」と連携し、季刊「ケアメディア」（発行実績・1号につき20000部～30000部）、オンライン「ケアメディア」及び、精神系ポータルサイト「サイキュレ」、ニュース解説サイト「ニュース屋台村」等のメディアにて本取組を紹介し、1月につき、平均2万人へのアウトリーチを継続する。

また本プログラムは地域において、何らかの理由で通学が困難な状態にある方へも対応するために、オンライン及びDVDによる学習も可能にすることで、多くの「学びたい」気持ちに対応することを念頭に、映像化とその普及も視野に置く。すでに初年度の映像化は公開予定であり、2年目は「より映像化を意識した編集」に向けて取り組む予定である。

これらの研究開発の結果として、他地域でも実行及び展開可能なプログラムを、授業の

内容、コーディネーターの役割、連携の在り方の妥当性を示したうえで提示する。

■目標

2018年度、2019年度事業を受けて本年度では3年目の集大成として、「集合型」「訪問型」がどの地域でも可能であることを示すことをゴールとしたい。特に以下の点においてモデル及びガイドラインを示し、来年度以降で各地域が気軽に「障害者の生涯学習」が出来るような素材を提供する。

提供するモデル及びガイドライン

- ・カリキュラム案（学習内容の中身）

一カリキュラムの内容のほか、講義のプロセス、話法、資料提示のほか、学習場のセッティング、サブティーチャーの役割

- ・連携の在り方と枠組みのプロセス（学習機会の枠組み）

一地元自治体や教育機関、NPO、企業団体等との連携に向けた動き方、今後の展開に向けた広報や活動内容

- ・学習機会創出におけるポジショニングとその役割（学習機会の中身）

一効果的な学びに向けての連携協議会のあり方と関係機関の働き方、講師養成や運営にあたっての必要な人材とのつながり

この視点から本年度のプログラムを検証していき、以下3点※の学びの型も考慮に入れながらより立体的なガイドラインを示したい。

※通学型—決まった場所に受講者が通い学ぶスタイル

招集型—不特定の開催地に開催する際のみ受講者を集めるスタイル

訪問型—自宅や医療機関、入所施設など外出が困難な受講者に訪問するスタイル

■目指す方向性

上記の本年度の目標を経て目指す方向性は全国どこでも自治体や民間団体等が障害者の生涯学習が始められ、障害者と市民が学びあうフィールドが確保されることである。地域におけるインクルーシブな学びは、ダイバーシティ社会にも対応することになり、共生社会での生きやすさと「幸福」を感じるきっかけとなるはずであり、本事業を経たうえで来年度以降は学びを開始する各地域への支援を活発化させていきたい。

1-2 具体的な内容

(1) オープンキャンパスについて

本年度は、和光市で開始・発展してきた市民活動との連携による「五輪を知る・おもてなしの市民清掃」を五輪開催に合わせて、開催前の社会の機運とシンクロする企画からスタートし、市民と障害者が社会のために貢献するイメージの「学び」を展開する。

昨年度の地域開催の成功及び持続可能な形を保証するのは、確実に継続意思のある団体や市民の存在があり、今年度の地域開催は地域で実行可能な団体と連携することとした。松本市では、昨年に長野県佐久市でオープンキャンパスを実施したことから交流が始まった松

本市の障害者の保護者グループ「ぷろじえくとギフト実行委員会」とともに、甲府市では2019年度から始まった福祉型専攻科「ユニバやまなし」が連携先としてオープンキャンパスを作り、引き継いでいく形を整えたい。

オープンキャンパスの開催については、長野県と長野県教育委員会、山梨県と山梨県教育委員会ともに協力することになっており、市民活動や福祉、行政と教育機関が協力する形でのオープンキャンパス事業が期待できる。

さいたま市の開催では、2年の実績から埼玉県教育委員会やさいたま市緑区などの機関が協力する意向であり、これまでのNPO法人をはじめ、これまでは九里秀一郎教授を中心として部分的な連携だった浦和大学も、会場の提供やほかの教授及び学生との交流など積極的な姿勢を示してくれており、さいたま市においては、行政・高等教育機関・福祉関係機関の連携が期待できる。

【講義科目・連携先・内容】

場所	開催月	講義演目	連携先と内容
和光市	6月	五輪を知って・おもてなし(2時間)	和光市・和光市教育委員会・和光おもて隊 梨/五輪に関する講義、駅前の清掃作業
松本市	9月	コミュニケーションでつながる(3時間)	長野県・長野県教育委員会・松本市教育委員会・ぷろじえくとギフト実行委員会/コミュニケーション講座やゲームで障害者と市民が学びあう
甲府市	10月	コミュニケーションでつながる(3時間)	山梨県・山梨県教育委員会・福祉型専攻科ユニバやまなし、伊藤学園/コミュニケーション講座やゲームで障害者と市民が学びあう
さいたま市	11月	稲刈りフィールドワーク(3時間)	埼玉県・埼玉県教育委員会・浦和大学・さいたま市緑区・NPO法人見沼じゃぶじゃぶらぼ、NPO法人のらんどあぐり/田んぼと稲の講座の後に稲刈り体験
さいたま市	11月	レクレーションで交わろう(6時間)	埼玉県・埼玉県教育委員会・浦和大学・さいたま市緑区/浦和大学を会場に様々なレクレーション講座とブースを通じて障害者と市民が学びあう
さいたま市	11月	畑でフィールドワーク(3時間)	埼玉県・埼玉県教育委員会・浦和大学・さいたま市緑区・NPO法人見沼じゃぶじゃぶらぼ、NPO法人のらんどあぐり/畑の仕組みを知った後に焼き芋と歌でレクレーション

【全体プロセス】

連携協議会において内容の確認・承認

↓

講師及びサブティーチャー、コーディネーター、ほかスタッフとの事前打ち合わせ
オープンキャンパス実行委員会

↓

オープンキャンパス実施、DVD収録

↓

DVD編集と記録保存、感想及びレポート等を基本に研究検討委員会で振り返り

↓

適性教育プログラム→次年度以降の展開（他地域展開、映像コンテンツ化、大学カリキュラム化）

【参加者募集方法、参加人数、開催場所】

1 募集方法

- ・開催地の自治体や近隣の社会福祉協議会等、関係機関を通じた福祉施設への呼びかけ
- ・開催地の特別支援学校（在校生・卒業生）への呼びかけ
- ・開催地の自治体からの呼びかけ
- ・和光市においては市内 150 か所の公設掲示板への貼付
- ・インターネット上による告知—当財団 HP、本研究 HP 等
- ・当財団が運営する就労移行支援事業所の利用者
- ・当財団が関係する就労移行支援事業所はじめとする福祉施設の通所者への呼びかけ

(2) 参加者想定人数

場所	会場	想定人数
和光市	和光市中央公民館	受講生（当事者）20人、市民5人、行政2人、支援5人 合計32人
松本市	松本市の公共施設	受講生（当事者）30人、市民10人、行政5人、支援員5人 合計50人
甲府市	伊藤学園関連施設	受講生（当事者）30人、市民10人、行政5人、支援員5人 合計50人
さいたま市	さいたま市緑区領辻・NPO 法人見沼じゃぶじゃぶラボ管 理田圃	受講生（当事者）20人、市民7人、行政2人、支援5人 34人
さいたま市	浦和大学体育館	受講生（当事者）40人、市民10人、学生

	20人、支援5人 75人
さいたま市	さいたま市緑区領辻・NPO 受講生(当事者)20人、市民5人、行政2 法人のらんどあぐり管理畑 人、支援5人 32人

全体の延べ予想参加者 273 人程度 (昨年比 15%増)

(2018 年度-211 人、2019 年度-240 人程度)

【実施スタッフ】

- ・コーディネーター
 - ・講師 (大学教授、高等教育講師経験者)
 - ・サブティーチャー (ボランティア) - 福祉職員、特別支援学校教諭 OB、教職関連の研究者・大学院生・大学生、障害のある方のうち教育・指導に意欲のある方
- サブティーチャーは、生徒 3-4 人に対し最低 1 人

2 医療ケアの必要な方に対する訪問講義及び全国ネットワーク化フォーラムについて

初年度の視察等で「医療ケア」が必要な 18 歳以降の学習ニーズを抽出し、昨年度の本事業では 4 人の講義希望者の学習を実践研究として年間約 20 回の講義を行い、カリキュラムの抽出を行った。

昨年度の学習の結果、実行され整理されたカリキュラムは「英語」「創作」「歴史」「化学」「文学」「インターネット発信」「音楽」「国際」「家庭科」であり、今年度はこのカリキュラムの延長線及び発展した形として、受講者と講師が話し合いながら内容を決めていく。また体調を考慮しながら外出して植物園や動物園などに実際に行き、体感するフィールドワークも行っていきたい。

また「訪問講義」の内容を知ってもらうと同時に多くの当事者やワーカーとも議論をしながら可能性を考えたいことから、医療機関に出向き、その従事者と当事者に向けての公開的な授業の場なども設ける予定であり、本年度は埼玉医大福祉会の医療型障がい児施設「カルガモの家」の 18 歳以降の入所者・通所者を対象にした集合型学習を行う。

さらに各地でボランティア等により対応している医療ケアの必要な方々の学びの実践団体をネットワーク化してカリキュラムの共有等の協力関係を構築する機会としての「フォーラム」を首都圏で実施する。実施にあたっては、開催地の自治体の協力も要請する。

【訪問講義の概要】

前年から個別対応の継続希望受講者 4 人

- ・ A-東京都杉並区の 20 代男性 (自宅)
- ・ B-東京都清瀬市の 40 代女性 (自宅)
- ・ C-東京都江東区の 50 代女性 (東部医療センター)
- ・ D-東京都小平市の 20 代男性 (国立精神・神経研究医療センター)

前期 4-7 月 1 人につき 12 回講座

夏休み期間 レクレーション企画と実行

後期 10-1月 1人につき12回講座

【訪問型の集合学習の概要】

施設でのオープン授業1か所=カルガモの家（埼玉県川越市）

時間：1時間程度

対象者：希望の学生7-10人

講義内容：受講者の希望を聴取した上で決定（音楽コミュニケーションの見通し）

【訪問講座の内容に関する留意点】

基本的に受講者の希望に沿う形で授業科目を決定するが、ヒアリングからニーズを聞き取り、どこから「学問的発展」「学びの面白さ」を深く考え、体系づけられたカリキュラムとして提示することを基本とし、教える側も「学び」の発展についての視点から考えてもらう。昨年度の実績の科目から発展させてよりカリキュラムを充実させていく。

【フォーラムの概要】

実施時期：2020年12月

開催地；東京都内もしくは埼玉県内

開催規模：80-100人程度

（3）共生社会コンファレンス報告研究会

2019年2月14日に東京大学を会場に行われた「共に学ぶ、生きる共生社会コンファレンス in 関東甲信越」ではシンポジウム、ワークショップ、分科会で各種領域から障害者の学びについて障害者発の視点で議論や提起が行われた。この内容を広く、「生で」「直接」伝えるために、地域単位で「報告研究会」を行い、共生社会コンファレンスの報告をベースにして、地域での実践的広がりを促進するための協議を行う。

本年度は昨年度に地域モデル確立のためにオープンキャンパスを実施した長野県佐久市と静岡県伊東市で行う。両地域は昨年のオープンキャンパスにより、行政機関（首長部局、教育委員会）、議会、保護者団体、特別支援学校、福祉事業所とのつながりは確保されており、「オープンキャンパス」という実践を初年度で実施したことから、実際の「学び」の体験にコンファレンスでの議論を示すことで、来年度以降の地域モデルの確立への足掛かりとしたい。

■共生社会コンファレンス報告研究会の実施内容

開催地	参加予想者	内容
伊東市（公民館等）	伊東市、伊東市教育委員会、社会福祉法人、障害者に関連するNPO法人、街づくりに関するNPO関係者、障害者の保護者団体、特別支援学校関係者	共生社会コンファレンスの議論を紹介し、地域での展開の可能性
佐久市（公民館等）	佐久市、佐久市教育委員会、社会福祉	について協議す

	法人、障害者に関連する NPO 法人、 街づくりに関する NPO 関係者、障害 者の保護者団体、特別支援学校関係者	る
--	---	---

概要

参加人数 20-30 人程度

ファシリテーター・報告者：引地達也

全体時間 2 時間程度

- 1 共生社会コンファレンスについて説明（ビデオ） 5 分
- 2 各議論の説明（シンポジウム、ワークショップ、分科会） 30 分
- 3 質疑応答 10 分

休憩 10 分

- 4 テーマ議論「地域ではじめる第一歩」 全体 60 分（議題提供 20 分）
コンファレンスを受けて地域で始められる可能性について話し合う
コーディネーター：引地達也 地域議題提示者：2 人程度（各地域から）
- 5 クロージング 5 分

4 視察や交流について

本事業の初年度から 2 年の視察や調査、実践研究を通じて全国各地での障がい者の生涯学習の「現場」は静かに広がっており、本年度もその最前線を視察や交流等を通じて確認しつつ、新しい可能性を模索し学びの最適化に向けて取り組んでいきたい。

視察場所については、本件の「オープンキャンパス」「訪問講義」「コンファレンス研究報告」に加え、コンファレンス開催に関わる箇所での現状把握を踏まえて直接本年度の事業に、結び付くものになる。

オープンキャンパスでは新しい学びの動きを見せそうな関東地域や、訪問講義では新しい枠組みを模索している箇所。コンファレンスに関しては、昨年度の各分科会での議論で抽出した課題解決に向けてヒントとなる箇所、さらには新しい取組への提示として「企業内の学び」にも着目し、好事例とされる企業の取組を粒さに検証していきたい。日本 LD 学会、全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会へも出席し、各地の知見を取り入れていきたい。

以上 4 項目を実施したうえで研究・調査・分析の結果を以下発信する。

- ・成果報告会の開催（2 月）
開催場所 和光市、想定参加者 30 人
- ・ガイドライン作成・発表
- ・日本 LD 学会、全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会発表を模索
- ・成果報告のまとめを冊子もしくは出版化（埼玉県及び東京都下の関係機関に配布）
- ・各講座に関しては検討委員会の検討を経て、報告書を HP 及び関連媒体で公開

- ・紙媒体である季刊「ケアメディア」（20000～30000部発行のフリーペーパー）において取組を紹介及び報告
- ・インターネットコラムサイトである「まぐまぐ」「精神系ポータルサイト『サイキュレ』」「ニュース屋台村」等に取り組みを報告
- ・コーディネーター関連のラジオ番組で取組を紹介

1-3 連携協議会

連携協議会の構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
九里秀一郎	浦和大学総合福祉学部教授	
小林節子	特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表	
唐沢隆弘	東京リーガルマインド執行役員	
高橋基成	元東京都・埼玉県特別支援学校教諭	
田中瑛	東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程	
佐光紀子	翻訳家	

連携協議会事務局構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
引地達也	一般財団法人福祉教育支援協会上席研究員・シャローム大学校学長	
渡辺昌志	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	
杉本頼久	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	
加藤のぞみ	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	

過去2年の連携協議会ではオープンキャンパスでかかわる関係者を中心に構成され、2年の間には確実に各委員が役割を果たし、実際に動く連携協議会になった反面で、会議である「協議会」には日程調整が難しいことになり、開催日が決まらないことがあったため、3年目は重要なポイントで連携協議会を実行しながら、個別やテーマ毎でウェブ会議システムを利用して活発な協議を行っていく。

これまでの各委員が果たしてきた役割は以下であり、それぞれの役割を果たししていただくことを中心に、本事業の成果物の質を上げていく。

氏名	これまでの役割
九里秀一郎	オープンキャンパス講師、教材プログラムの開発、高等教育機関、さいたま地域の福祉と市民活動との連携活動
小林節子	オープンキャンパス講師、ボランティアへの指導、さいたま地域の福祉と市民活動との連携活動

唐沢隆弘	開発カリキュラムのDVD化と汎用的な教材開発
高橋基成	特別支援学校との連携、デイサービスやグループホーム等の福祉事業所との連携、プログラム開発に関する助言・指導
田中瑛	カリキュラム開発・制作・指導、ボランティア指導、オープンキャンパス講師、全般的な助言・指導
佐光紀子	カリキュラム開発・制作・指導、ボランティア指導、福祉と市民活動連携活動、全般的な助言・指導

【メンバー構成】

連携協議会は、本事業の構成要素である関係機関の関係者らで構成され、それぞれの立場から検討。討議しより良い運営を助言しリードしていく。初年度と同様に委員は実際に行われ事業においても何らかの役割を持っており、現場で経験したことを協議会でも共有しながら議論を深めることにしている。

このメンバー構成により、多角的より深くカリキュラムの妥当性を考えることが可能となっている。

【基本的な連携協議会の流れ】

開催のお知らせ・協議内容の事前告知

↓

開催、協議

記録・報告、協議内容は事後活動に反映

↓

開催内容・開発プログラムの向上

↓

成果物に反映

【連携協議会の役割】

本事業のより高い成果に向けて、教育プログラムの内容だけではなく、地域連携の在り方や講師・スタッフ・サブティーチャー、ボランティアなどの動き方、連携の在り方をそれぞれの領域の立場と知見から検討し、他地域でも展開可能とし、なおかつ教育的内容の優れた効果的なプログラム開発を確実にする役割を担う。

連携協議会の委員は連携が必要と思われる自治体や団体、研究や教育に関する関係機関・企業の有識者で構成され、教育的観点からの意見をはじめ、受講者の立場、プログラムの展開のしやすさ、発展形のイメージなど、多角的な視点でプログラムを精緻化していく。連携協議会は協議材料として、プログラム内容をすべて提示するが、授業参加も促す。

また本件は映像化も視野にしていることから、撮影したオープンキャンパスを見て検証することとしており、授業と協議会、及び開発・成果物の抽出に向けて一体化した取り組みを目指す。

【議論を事業に反映させるための取組】

連携協議会が事業実施に積極的に関わり、議論の内容を事業推進に生かすサイクルを確実にするために、議論の見える化、課題の抽出、フィードバックの報告を「業務フロー」としてフォーマット化していく。

・連携協議会の議論の反映に向けたフロー

1 連携協議会→議事録作成及び問題や課題の抽出を全委員に開示（連携協議会の中で課題を口頭で確認する）

2 開示された課題に対しての行動→課題に対しての行動を明確にテキスト化し報告（フィードバック報告）

3 連携協議会でフィードバック報告を口頭で行う

【欠席フォロー】

初年度にも続き、連携協議会に欠席した場合にも、必ず近日中に直接コーディネーターが出向き個別に内容を説明することにする。情報ギャップを防ぎ、一体となって成果を考えていく協議会として機能を確実にしたい。

【監修等】

授業のプログラム・開発の検討をする知見の下支えを保証するために、他の有識者の意見を聴聞する機会やコーディネーターがヒアリングしその結果を伝えることで専門家の見地を反映できる体制とする。監修をお願いする有識者は以下である。

- ・田中良三・愛知県立大学名誉教授
- ・山本登志哉・発達支援研究所所長
- ・片山昭義・浦和大学教授

【成果報告書に盛り込む内容】

連携協議の3年間の議論の中で浮かび上がった問題点を抽出し、その課題解決の道筋や生涯学習を遂行する上で必要リソースについての詳細を明示したい。

1-4 成果と効果

本年度終了後は継続して「障がい者の学び」の実践を通じて持続可能な取組として継続する予定であるが、以下の点を大枠として重点的に取り組んでいきアウトカム目標を設定したい。

まずは本事業の実施から考える展開である。

本事業	アウトカム目標
オープンキャンパス事業	地域と高等教育機関とが連携し各地での開催

	→全国各地の公民館等で定期的に実施 ガイドライン作成、カリキュラム提供、ファシリテーター育成
訪問講義事業	全国の動きをネットワーク化 →全国どこでも受けられるサービスに ガイドライン作成、カリキュラム提供、支援者育成
共生社会コンファレンス	継続開催・各地域での小規模な研究会開催 →担い手の育成・実践・研究

さらに学習内容などの細部については、以下の項目で開発

【学習プログラム講義】

<招集型学習>

これまでの知見をもとに、「1日バージョン」「短時間バージョン」でそれぞれの授業項目と内容 内容設定と伝え方、言語の選択や作図の適性化などの授業の進め方について検証し、さらなる最適化を開発

時間配分 50分授業を基本に、講話は15分以内におさえてのアクティブラーニングを心掛ける効用を再確認

サブティーチャーの役割 想定人数4～5に1人という割合のうえで、障害特性に応じた対応とすることとし、講義毎の障害特性への対応の蓄積を記録し、アクティブラーニングを通じてどのような「介入」「指導」の方法が有効かを検証したうえで、「サブティーチャー養成」も開発

<訪問型学習>

1タームで毎週1回50分の講義を連続的に行うことを考えての学習内容についての検討を経て、これまで整理した「英語」「歴史」「創作」等の学習内容と、今後の学習内容の決め方、受講者ニーズの汲み取り方、学習内容への反映の仕方などのフォーマット提示

【受け手側の反応】

招集型・訪問型のどちらにおいても受講者の学習意欲 レポートやアンケートをもとに「何が学びに必要なか」を検証し成果物に反映させる。以下2点の観点で検討し成果を示す

人格形成への有効化

連携協議会での検討やサブティーチャーの感想、支援者の声などから受講者の心の変化などをくみ取りながら、何が授業で有効であったかを提示しケーススタディとして蓄積し公開する

社会性を身に着けるための有効化

授業をすることによって、協調性や協働性の変化があったのかを検証し、そのポイントを

検出しケーススタディとして公開する

【コンテンツの可能性】

訪問型・招集型ともに、どのような学習コンテンツが有効かを検証しながら、そのラインアップを増やしていくことで多様な学習内容を示したい。

招集型—1日学習のプロセスと科目、狙いと評価

簡易バージョンで90分以内での学習プロセスと科目、狙いと評価

訪問型—50分×12回の学習プロセスと科目、狙いと評価

レクレーション学習のプロセス、狙いと評価

7年目を見据えたアウトカム目標は以下である。

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	7年目
オープンキャンパス事業	和光市及びさいたま市で開催/地域市民団体・NPO・福祉団体と連携=A	A及び伊東市、佐久市し地域モデル構築=B	埼玉県内で浦和大学・県教育委員会で開催、Bモデルで甲府市、松本市で開催	高等教育+自治体モデル=Cで継続開催（長野、山梨、埼玉基点に5か所程度）	「障害者とともに学ぶ」ABCモデル発信し10か所で開催（後方支援含む）	「障害者とともに学ぶ」ABCモデル全国で開催、研究会発足、全国大会も
訪問講義事業	調査研究	実践研究4人カリキュラム開発検討	実践研究及びネットワーク化向け全国会合	ネットワーク化の運用・地域での活動活性化コンテンツ提供	ネットワーク化拡充で全国広くで学習可能とする基礎づくり	全国で訪問学習が可能に
共生社会コンファレンス		コンファレンス実施（関東甲信越）	コンファレンス実施+佐久市と伊東市で報告会・研究会	コンファレンスと各地で研究会（エリア5か所）	コンファレンスと各地で定期研究会（エリア7か所）	コンファレンスと各地の研究会が融合し議論の質向上
ガイドライン作成	調査研究	ガイドラインの基礎検討	ガイドライン作成（初版）	ガイドライン普及（研究会）	ガイドライン普及と実践	ガイドライン改定（研究会）

本事業で得られた成果は、以下である

- ・ノウハウのガイドライン
- ・テキスト系コンテンツ
- ・映像系コンテンツ
- ・訪問講義ガイドライン（カリキュラム含む）

のほか、コンファレンスやフォーラムに関しては

- ・コンファレンス継続開催フロー（全体会と報告研究会）
- ・訪問講義フォーラムのフロー

である。

- ・ノウハウのガイドライン

オープンキャンパス・訪問講義の実践にガイドラインによる指導を通じて、各地の実践を後押しする

- ・テキスト系・映像系コンテンツ

オープンキャンパスや具体的な教科カリキュラム等をテキストや映像コンテンツで提供し、学びのバリエーションを広げる

- ・訪問講義のガイドライン

医療ケアの必要な方々が18歳以降も学び続けることを可能とするために、各地域で対応可能な行政・団体をつなげ協働し全国どこでも学びを受けられる体制を構築する

- ・コンファレンス継続開催フロー（全体会と報告研究会）

全国規模のコンファレンスと地域レベルの報告研究会を連動させ、共生社会の学びを展開し、全国各地での学びの実践を充実させていく

- ・訪問講義フォーラムのフロー

訪問講義のネットワークで医療ケアの必要な人への教育の可能性を広げ、質を向上させる

成果物の活用図

	オープンキャンパス開催(2時間・5時間バージョン/フィールドワーク)			訪問講義		
成果物	企画運営フロー全般	人・スタッフ行動	コンテンツ		フローと仕組み	全体像
	運営関係ノウハウのガイドライン等		テキスト系	映像系	実施ガイドライン	最終報告書
周知方法及び対象	最終報告会・関係福祉・教育関連施設への配布(周辺自治体等)、全国の都道府県関係部署への配布、HP・ポータルサイト等					
	学会・全国専攻科等に実施呼びかけ(全国)	HPポータルで告知・実施呼びかけ	東京リーガルマインドにて告知普及、全国視点で閲覧可能に	実施の拡充	必要に応じ説明	
普及フェーズ	オープンキャンパスの直接実施 オープンキャンパスの実施支援 オープンキャンパスの共同実施		実施に向けて提供・共同改善	コンテンツの充実化と講師養成	全国で実施呼びかけ	
維持継続	オープンキャンパスの普及モデルの確立		全国閲覧	各地に普及	実施・改善・提供	

1-5 新型コロナウイルスを受けての修正

上記1-1から1-4の事業計画は2020年2月時点のものであり、新型コロナウイルスが社会活動を大幅に制限する前に立案されたものであったため、実際に運用する時期には首都圏に緊急事態宣言が出されるなどで、対応を余儀なくされた。

特に福祉事業所等とのコミュニケーションなども自由に行える環境になく、結果的に状況を見ながらの本事業の遂行は縮小や断念しなければいけないものも出てきた、以下が概要である。

開催地	基礎教育ステージ	関わりあいステージ	実践教育ステージ	コンファレンス 報告研究会
和光市	縮小	五輪前学習・こみひろいしよう		
松本市	縮小	みんなで学ぶコミュニケーション・市民交流		
甲府市	縮小	みんなで学ぶコミュニケーション・市民交流		
さいたま市	縮小	レクレーションが結ぶ新しい学びのかたち		
さいたま市	断念	見沼田んぼで稲刈り		
さいたま市	断念	畑で何ができるのか		
佐久市・伊東市				断念 研究会開催

対象	前期(4月～7月)	夏休み期間(8月～9月)	後期(10月～1月)
東京都内A氏	12回講義	外出レクレーション(1回)	12回講義
東京都内B氏	12回講義	外出レクレーション(1回)	12回講義
埼玉都内C氏	12回講義	外出レクレーション(1回)	12回講義
埼玉県内D氏	12回講義	外出レクレーション(1回)	12回講義
カルガモの家	病院内で招集型講義	希望者と個別協議	病院内で招集型講義

訪問学習に関するフォーラム 全国の取組を連携させる催しを首都圏を会場に開催

埼玉県川越市の自宅で実施

2. 第一回オープンキャンパス 五輪を知って楽しもう（埼玉県和光市）

2-1 開催背景と準備及び広報

埼玉県和光市は本事業が始まった時からの、本事業の本部として機能してきた。初年度の市民と障害者が学び合うフィールドワークをきっかけに市民グループとの交流が始まり、当初、行政の窓口が障害福祉を担当する社会援護課だったところから、教育委員会の生涯学習担当に広がっていった。

2年目は東京五輪開催を前に和光市も射撃競技の会場になることから「五輪を知ろう」のイベントとしてオープンキャンパスを開催。いよいよオリンピックイヤーの3年目に開催前に盛大に行う予定が、新型コロナウイルスの影響により、当初の開催時期は五輪開催前の6月であったが、そこから様子見を繰り返しながら結局10月17日に来年に向けて開催することになった。規模も当初は80人規模の会場で予定していたが、和光市中央公民館側からの要請や感染症対策により20人程度の参加者に抑える等、縮小することになった。

広報に関しても市内の限定した中で展開した。使用したチラシは以下である。

2-2 カリキュラム内容

オープンキャンパスは2020年10月17日午後2時から午後4時まで、和光市中央公民館で行われ、オリエンテーションで全体説明と初対面も多い受講生どうしの関係性構築を目的にしながら、五輪を体感するプログラムを中心に行った。

以下がタイムフローである。

時間	項目	内容
1230	スタッフ集合・準備開始	4人ー1グループ（受講生とサブティーチャー）・看板・案内・パソコンセッティング・WB・音声・マイク、会場に万国旗の設置
1345	受付開始	氏名と連絡先、名札
1400	開会あいさつ 引地達也	以下、説明資料、パワーポイント オリエンテーション ※資料参照
	講師紹介 和光おもてなし隊会長 井上明次	五輪に向けての和光の取組を紹介
1420	オリンピックとパラリンピックの話とマーク作り 井上会長とおもてなし隊メンバー	五輪・パラマークの意味について 五輪・パラマーク作り：各チーム5色、3色を10色のモールから選び出す。五輪の5色、パラの3色を正しく選んでマーク作りに挑戦する。
1430	五輪輪投げ ファシリテーション：井上おもてなし隊会長	的にセットした5色のコーンに5色の輪を投げ入れていく。五輪のマークが出来上がる回数を競う。チームの対抗戦とする。
1500	レクチャー「折り鶴と平和、五輪について」引地達也みんなの 大学校学長	折り鶴のルーツ なぜ折り鶴は平和のシンボルとなったか サダコと折り鶴 ※レクチャー内容は資料参照
1510	折り鶴について感じたこと	話を聞いた感想を全体で共有する
1515	折り鶴に挑戦	各グループに五輪にちなんだ5色の色紙を配布。完成した五輪折り鶴を各グループに見本としてお渡しする。各グループに、和光おもてなし隊のメンバーが付添ながら五輪折り鶴の作製に挑戦

1545	花プランターの話	小野寺氏・和光おもてなし隊 五輪の前に駅前市内各所で設置するプランター事業の協力を呼び掛ける
1555	最後のあいさつ	井上おもてなし隊会長 引地学長
1600	終了	

14 時の開始とともにコーディネーターの引地達也があいさつをし、本事業の取組の概要と全体像、そして講義を受けるにあたっての注意事項と、心構えを話した。ここまでは全講義共通であり、以下がオリエンテーションの資料である（基本的に全オープンキャンパスを通じて共通である。ポイントは以下4つを伝えることで、学びへの導入を意識してもらうと同時に柔らかい雰囲気を作ることも目的としている。

- ・ 出会いを喜ぼう
- ・ オーバーアクション
- ・ よく笑おう
- ・ 新しいものを感じよう

この4項目は本事業のオープンキャンパスの冒頭部分はほぼ同じオリエンテーションを行う中で、必ず提示するものであり、本報告書でのオープンキャンパスの2回目以降は省略する。

この後、今回の開催パートナーである和光市で活動する「和光おもてなし隊」の紹介を行い、井上明次会長を紹介し、和光おもてなし隊の活動を紹介していただいた後に、早速五輪に関するレクチャーとワークショップを開始した。

前半は、五輪のマークについての話と、マークを作るワークショップ、さらに輪投げで五輪の色を組み合わせていくゲームである。

後半は折り鶴を5色で作り上げることを目指して、折り鶴に関するレクチャーを行い、実際に五色の折り鶴を作ることに挑戦した。

- ・ 第一回のプロジェクター上映・配布資料

障がい者と市民が学ぶ
オープンキャンパス

五輪を知ろう

2020年10月17日
和光市中央公民館

文部科学省
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業

和光おもてなし隊
一般財団法人福祉教育支援協会



本日のスケジュール

1400-1415 オリエンテーション
1410-1420 五輪のマークの話
1420-1430 五輪のマーク作り
1430-1455 五輪輪投げ
1455-1500 休憩
1500-1505 五輪と折り鶴の経
1505-1510 折り鶴の思い出
1510-1535 折り鶴に挑戦・まとめ
1535-1545 プランターの話
1545-1600 ふりかえり、レポート作成・提出

出会いを喜ぼう



ソーシャル
ディスタンス



新しい様式の時代にー
出会いを喜ぼう
みんなで驚こう
みんなで笑おう
「新しい」ことを感じよう

みんなで驚こう
オーバーアクション！

声はひかえめに



みんなで笑おう

笑顔で
コミュニケーション！



NEW!

「新しい」ことを
感じよう



チーム名決定

五輪になんだ言葉を使う

スタート！

井上明次さん
和光おもてなし隊会長

五輪を
知る



オリンピック・パラリンピックのマーク



五輪と折り鶴



マークづくり

五輪輪投げ



折り鶴と願い

折り紙 日本で平安時代に「文を折ること」
→折り紙付き

西洋では開国とともに伝わり「Origami」

折り鶴 江戸時代から登場

折り鶴と願い

千羽鶴一病気治療、
願掛け、平和の願い
鶴は縁起が良い
「鶴は千年、亀は万年」



折り鶴と願い

千羽鶴一病気治療、願掛け、平和の願い
鶴は縁起が良い「鶴は千年、亀は万年」

お見舞い



折り鶴と願い

千羽鶴一病気治療、願掛け、平和の願い
鶴は縁起が良い「鶴は千年、亀は万年」

高校野球の
鶴わたし



折り鶴と願い

千羽鶴一病気治療、願掛け、平和の願い
鶴は縁起が良い「鶴は千年、亀は万年」

広島
の非核の願い



Sadakoストーリー

1943(昭和18)年がけてまもない1月7日の真夜中、広島の佐々木理髪店に佐々木禎子さんがうまれました。

原爆はその2年後、
広島に投下され禎子は
被爆しながらも
奇蹟的に助かりました。



禎子さんの体の調子がおかしくなったのは、運動会のリレーで優勝してまもなくでした。かぜをひいたとき首のまわりでできたシヨリが消えなくなったのです。1955(昭和30)年がけたころには、とうとう、腫がはれて見えるようになってしまいました。

検査の結果、医師がお父さんに「サダコさんは白血病で、長くて1年の命でしょう」と告げました。禎子さんは広島赤十字病院に入院することになりました。同じ組の友だちは、交代でお見舞いに行くことになりました。



禎子さんは小学校6年生まで元気に育ち、リレーの選手になるなど活発な女の子でした。



入院して5か月たったころ、同じ病院に入院していた5さいの女の子が白血病で亡くなりました。「わたしもあのように死ぬのだろうか」—禎子さんはポツリと口にしました。

8月、名古屋の高校生たちが入院患者にお見舞いの千羽鶴を送ってきました。色とりどりのセロファン紙で作られた折りづるは、部屋にも届けられました。



禊子さんは、「いたい」とか「つらい」と口にはしてありませんでした。ただ、いのりをこめて、ツルを折りました。しかし病気は進んで、熱が上がり、頭がいたくて寝ねむれない日が続きます。それでも、禊子さんは必死で折りつづけました。



そして、10月25日の朝、禊子さんは12年の命を終えました。

最後に大好きなお茶漬を食べ、
「お父さん、お母さんありがとう」と言って目を閉じたそうです。



折り鶴に挑戦

花プランターの話

アンケート作成・提出

2-3 開催レポート

(本レポートは開催後に一般社団法人みんなの大学校のホームページに掲載されたレポートをベースに以下掲載する＝以下同じ)

埼玉県和光市の和光市中央公民館で10月17日、東京五輪にちなんで五輪を知るオープンキャンパスが行われました。文部科学省の委託研究事業の一環で和光市の市民グループ「和光おもてなし隊」とみんなの大学校の協力のもとに、五輪マークを完成させるゲームや輪投げ、五輪折り鶴などのプログラムを楽しみました。参加者は同市内の就労移行支援事業所に通所する方や都内の医療的ケアの必要な重度障がい者の方で、公民館側の入場制限などを受け、参加者は15人程度として、スタッフと市民、関係者合わせて30人以内での開催を心掛けました。

また最初から最後まで松本・和光市長も参加しました。



重度障がい者とともにパラリンピックのマークを作るプログラムに挑戦



五輪にちなんで、5色の色の輪はそれぞれの色のコーンへ入れるゲームです



5色の折り紙を使った五輪鶴を折りました



松本・和光市長も参加しました

2-4 参加者集計及び感想

	質問1 ◎とても楽しかった ○まあ楽しかった △あまり楽しくなかった ×全然楽しくなかった	質問2 ◎とても勉強になった ○まあ勉強になった △あまり勉強にならなかった ×全然勉強にならなかった	質問3	質問4	質問5	年齢	性別
1	○ 折りづるの話とか五輪のマークの話とか色々聞けて楽しかった。	○ 五輪のマークの由来とか、パラのマークの話は初めて聞いたので楽しかった。	五まいの紙で折りづるをつくった事	まあ勉強したと思った		19	女性
2	○ ・ゲームを交え、楽しめました。	◎ ・さまざまな人が集い勉強になりました。	・オリンピックがどうなるか不安の中前向な方々がいる	まあ勉強したと思った	・自分を見つめ直し前に歩むため	44	男性

					ことをあらためて知った。		の学びをしたい。		
3	○	知識を教わるだけでなく楽しみながら学べた。	◎	なぜお見舞に鶴を送るかを知れた。	折り紙は少々難しかったので図解などがあるとよかった。		体験を通した学び、学校を出てからは体験できないような学び	34	男性
4	○		○		みなさんと話をしたこと。	まあ勉強したいと思った		34	男性
5	◎	いろいろためになった	◎	いろいろなことがわかった	こっきのはなしがおもしろかった	とても勉強したいと思った		46	女性
6	○	参考になった。	○	五輪のマークの並びに国旗の成り立ちなどが興味深かった。	折り紙で折り鶴を折る	とても勉強したいと思った	語学や、経済学 etc に関して学べるプログラム。	41	男性
7	○	輪投げや折り紙があって良かった	○	知らない事が沢山知れて良かった	貞子のお話です。	まあ勉強したいと思った		28	男性

8	×		○		途中で肩さわられて嫌でした。	あまり思わなかった		23	女性
9	◎	バラエティにとんだメニューで時間がたつのが早かったです。	◎	引地学長の国旗の話があったら詳しく聞きたい	サダ子の話	とても勉強したいと思った	グローバル、また身近な話題。	67	男性
10	◎	初めて会った方達と、すぐ1つのチームとなり、色々なゲームをしたり学んだりできて良かったと思います。	◎	・引地学長の話は、とても聞きやすく、勉強になりました。 ・オリ・パラの事の理解が強まりました。	皆で、同じプログラムを行えた事	とても勉強したいと思った	・オリンピック競技に関する事。 ・和光市に関する事。	48	男性
11	◎		◎			とても勉強したいと思った		45	男性
12	◎	ワークが楽しかった。障がいのある方との○○に学べたのが良かった。	◎	五色折鶴が作れてよかったです	折鶴	まあ勉強したいと思った		75	女性
13	◎		○						
14	◎	心をこめた折り鶴をはじめ、どんな方も学べ	◎	学長さんのお話しステキでした！井上さんの	学長さんのお話新鮮さを感じました。	とても勉強したいと思った			

		るとい ことは本 本当に 素晴ら しいと 思いま す		お話し ステ キで した！					
15	◎	和光お もて なし 隊以 上 に シャ ロー ムの 引地 さん の特 に 国 旗の 話は 良 か っ た で す。	◎	1つ1 つの プロ グラ ムに 対し 、 プ ロ グラ ムの 説明 があ り、 非 常 に 勉 強 に な り ま し た あ り が と う ご ざ い ま し た。					
16	◎	一つ 一つ の 作 業 が オ リ ン ピ ッ ク に つ な が り 来 年 に つ づ き ま す よ う に	◎	折り づ る か ら 世 界 平 和 へ					
17	◎	チ ー ム で 競 争 し た 、 輪 投 げ が 盛 り 上 が っ て 良 か っ た。 国 旗 の 話 (と く に 台 湾 ・ 香 港) や 赤 と 緑 の 色 の 地 域 に つ い て が 勉 強 に な っ た。	◎	身 体 を 使 っ た り 頭 と 手 を 使 っ た プ ロ グラ ム で あ っ と い う 間 の 2 時 間 だ っ た。 引 地 学 長 の お 話 も 印 象 に 残 る と 思 う 為 に な っ た。					

18	○	参加できて良かったです。	○	おりづるのおりかたが学べて勉強になりました。					
19	△	折鶴が苦手	○	緑色はイスラム					
20	◎	やはり皆で集まるのはいいですね！	◎	国旗の話が興味深かったです。	久しぶりに折り紙ができたこと。	とても勉強したいと思った		51	男性

集計

質問 1		質問 2		質問 4		年齢・性別	
とても楽しかった	11	とても勉強になった	12	とても勉強したいと思った	7	年齢回答者数	13
まあ楽しかった	7	まあ勉強になった	8	まあ勉強したいと思った	5	平均年齢	43
それほど楽しくなかった	1	それほど勉強にならなかった	0	あまり思わなかった	1	男	9
全然楽しくなかった	1	全然勉強にならなかった	0	全然思わなかった	0	女	4
その他	0	その他	0	その他	7	未回答	7

2-5 まとめ

東京五輪を前に自治体と地域が一体となって盛り上がり、世界からの選手を迎えれる機運を高めていこうというプロセスの中に、昨年から障がいのある人も一緒という姿勢で取り組んできたものの、新型コロナウイルスにより先行き不透明の中で、会場も制限がある中で、何とか思いをつなぎたいとの中での開催であった。

参加者は就労移行支援事業所に通所する通所者や障害者雇用で働く当事者、日ごろは週に2回の学習をしている重度障害者が参加し、講義やホスト役は和光市の市民グループである「和光おもてなし隊」のメンバーが対応した。また松本・和光市長も最初から最後までプログラムと一緒に参加していただいた。

この和光おもてなし隊との取組は、2018年度に主要メンバーに対し、障がい者とともに学ぶことについての話し合いから始まり、周辺の方々や市役所の職員がボランティアに声かけした方々が、オープンキャンパスに参加した障害者に和光市内を案内し、町の魅力を壁新聞にして発表、広報するプログラムから始まった。2019年度には講義のほかに駅前の清掃や駅前の花壇の栽培などの交流につながり、継続して市内における活動の協力体制の中で共生の形が出来ているのは大きな収穫である。

縮小傾向になったオープンキャンパスではあるが、つながろうという市民と障がい者の意志を形にし、来年度に向けて市内清掃などで交わりを継続していく予定である。

3. 第二回オープンキャンパス ソーシャルコミュニケーションカレッジ(長野県松本市)

3-1 準備及び広報

昨年度に開催した長野県佐久市でのオープンキャンパスでつながった長野県松本市の障がい者の学びを考える市民のグループである「ぷろじえくとぎふと実行委員会」とともにオープンキャンパスの準備を始めたのは2019年秋からであった。松本市での「学び」を広く市民に知ってもらうきっかけ作りや特別支援学校の卒業生の新しい学びの選択を提供するべく、地元自治体も巻き込んでの大々的な開催を目指して準備を進めた。

しかしながら、新型コロナウイルスの影響により開催そのものが不安視される中で規模も縮小して行く雰囲気となりながらも、自治体との連携を強めていく意思は維持し続け、長野県教育委員会、松本市、松本市教育委員会、塩尻市、塩尻市教育委員会には直接協力を呼びかけ、それぞれから後援をいただくことになった。特に地元の松本市では臥雲・松本市長と直接面談し、事業の意義を強調し、市長からも協力する旨の約束をいただいた。

実行委員会とは話し合いを重ね、当日の会場での参加者を絞ると同時にZoom会議システムを使っての参加も呼びかけた。

さらに信濃毎日新聞も事前協議から取材をし、オープンキャンパス開催の案内の記事を準備していただいたが、度重なる新型コロナ関連のニュースにより、結局事前に報道されることはなかった。以下は事前周知のために制作したチラシである。

ソーシャルコミュニケーションカレッジ 開設イベント

「生きる」ってなんだろう。
あなたの「生きる」をみんなで見よう。

13i

～オープンキャンパス～
2020年10月25日(日曜日)

開催!
一般社団法人ぷろじえくとぎふ

○一般社団法人ぷろじえくとぎふ

- ・2012年5月8日 LOM ILOMI どんこむ設立。毎年1回の自主イベント開催。
- ・2016年 高校卒業後に「専門的なスキルを学べる学校」の必要性を感じ始めソーシャルコミュニケーションカレッジ実行委員会「ぷろじえくとぎふ」を設立。
- ・2018年 学校設立の告知イベントを企画・運営を行う。
- ・2019年 やまびこホールにてソーシャルコミュニケーションカレッジ設立告知音楽イベント開催。
※ゲストはサイレンジャーの徳力将人さん、ダクン音楽道場の家原研二さん。
- ・2019年 シャローム大学 学長の引地達也氏と出逢う。
※文部科学省障害者の学習支援活動を総合的に支援する為の政策研究(政策的事業)の協力を得る。
- ・2019年 ぷろじえくとぎふ実行委員会を法人化し、一般社団法人ぷろじえくとぎふとなる。

○一般社団法人ぷろじえくとぎふ<団体コンセプト>

- ①『生きるってなんだろう。あなたの生きるをみんなで見よう。』をコンセプトに、共生社会作りを目指します。
- ②ダイバシティマネジメントの一環として、市民全員が関われる『ソーシャルコミュニケーションカレッジ』の設立を行います。

○ソーシャルコミュニケーションカレッジぷろじえくとぎふ<オープンキャンパス>

障害者権利条約の批准を受けて文部科学省が推進する障害者の生涯学習について、地域と市民、当事者らが一体になって「学び」を楽しみ、実感する『オープンキャンパス』を開催。

【開催日時】 2020年10月25日(日曜日) 午前10時～午後3時(※)

【開催場所】 長野県松本市中央1丁目1番1号 中央公民館(MJウイング)

【開催内容】 10:00～10:15 ①オープンキャンパス開催挨拶
※一般社団法人ぷろじえくとぎふ 代表理事 志賀裕子

10:20～10:50 ②みんなで身体を動かそう『リトミック体験』
※リハビリの先生 中村くん

11:00～11:50 ③メディアコミュニケーションクイズ
※お昼休憩

12:50～13:50 ④みんなでやろう♪⑤サイニング☆『世界に一つだけの花』
※サイニングボーカルグループ じゅんぽろいさん
※リモートとなる場合があります。

14:00～14:20 ⑥オープンキャンパスに伴うAssessment
※障がいという事に無関係な人、関係する人、全ての方へのapproach

14:20～14:30 ⑦閉会挨拶
※一般社団法人みんなの大学校 代表理事 引地達也

※開催内容は予告なく変更される場合があります。
※感染予防のため、入場人数の制限などの規制を行う場合があります。

【主催】 一般社団法人ぷろじえくとぎふ、一般財団法人福祉教育支援協会
【後援】 信濃毎日新聞、長野Tribe、ファーストガンダム愛蔵部、ヘアハウスQuasar
【協賛】 長野県、長野県教育委員会、松本市(後援)、松本市教育委員会(後援)、塩尻市(後援)、塩尻市教育委員会(後援)、信濃毎日新聞社(後援)、市民タイムス(後援)
【協力】 一般社団法人みんなの大学校

<お問合せ先>
連絡：神口
携帯電話：090-3585-9742/E-mail：culioden1983246810@yahoo.co.jp

※本事業は2019年度文部科学省政策研究事業「特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」の一環です。

13i 一般社団法人ぷろじえくとぎふ

3-2 カリキュラム内容

オープンキャンパスは午前 10 時から午後 14 時 30 分まで、長野県松本市の松本市中央公民館（M ウイング）にて行った。

以下がタイムフローである。

時間	項目	内容
900	スタッフ集合・準備開始	グループワークができるように机と椅子を設置、ソーシャルディスタンスを意識した配置で 1 グループ 4 人程度(受講生とサブティーチャー) 看板・案内・パソコンセッティング・WB・音声・マイク ウェブ参加者のパソコンでの承認 手話通訳者のポジショニング決定
930	受付開始	受付で必要なテキストを配布
1000 1020	司会 引地達也 開会あいさつ 古畑裕子 ろじえくとぎふと実行委員会代表 オリエンテーション 引地 自己紹介、チームの名前決め	以下、説明資料、パワーポイント
1020	リトミック体操	松本市立病院リハビリテーション科 ・レクチャー ・寸劇 ・体操
1100	休憩	
1105	講義 引地達也 メディアコミュニケーションクイズ	気持ちのよいコミュニケーションをテーマに「よい音」のあいさつを考える テレビの歴史を振り返ることをテーマにして、クイズ形式で以下の内容で講義を展開 ・テレビアニメの歴史 ・コメディ番組の歴史 ・歌のパフォーマンスの歴史
1155	昼休憩	
1250	みんなでやろうサインシ ング	出演：強力翔 手話を使っての歌のパフォーマンス、参加者に

		手話を教えて一緒に「世界にひとつだけの花」を歌唱
1350	休憩	
1400	オープンキャンパスのアセスメントと説明	ぷろじえくとぎふとから今後の展開などを説明
1420	アンケート記入	
1430	終了	

・第二回目のプロジェクター上映・配布資料

<午前部>



ソーシャルコミュニケーションカレッジ

障がい者と市民が学ぶ
オープンキャンパス

2020年10月25日
松本市中央公民館Mウイング

あいさつ

古畑裕子 ふるはたゆうこ

ぷろじえくとぎふト実行委員会代表理事



本日のスケジュール

1000-1020 オリエンテーション
1020-1100 リトミック体操
1100-1150 メディアコミュニケーションクイズ
1150-1250 おひるやすみ
1250-1350 みんなでやろうサインシング
1350-1400 休憩
1400-1420 オープンキャンパスのアセスメント
1420-1430 レポート作成・提出
1430 閉会

新しい様式の時代にー

出会いを喜ぼう
みんなで驚こう
みんなで笑おう
「新しい」ことを感じよう

出合いを喜ぼう



みんなで驚こう
オーバーアクション!

声はひかえめに



みんなで笑おう

笑顔で
コミュニケーション!



NEW!

「新しい」ことを
感じよう

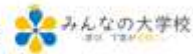


リトミック体操

松本市立病院
リハビリテーション科
中村先生

メディアコミュニケーション 講義とクイズ!

引地達也
みんなの大学校学長



※リトミック体操のPPTは別に提示

自己紹介



みんなの大学校
2019.1.16

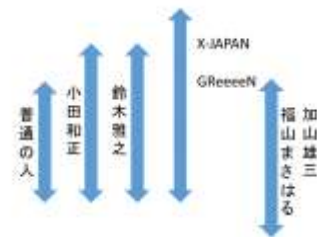
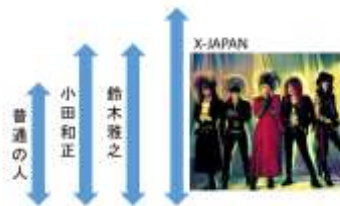
引地達也 ひきちたつや
みんなの大学校学長

好きなもの
5色のだんご
ブルー
ジャンボーグA



伝えるー
あいさつは気持ちよく、心地よく

音域



元気なあいさつ
「おはようございます」



同情の気持ち
「大変でしたね」



元気なあいさつの音は？



協力し合って学び合うー
サルから学ぶ「たすけあい」



クイズ de コミュニケーション



松本市のゆるキャラ アルプちゃん



ハイぶりっこちゃん



佐久の鯉太郎ミニ



つぎのうち
長野県のキャラクターでは
ないのは
どれでしょうか？





日本最北端の村
北海道猿仏村
さるつぶ



見る
アニメは世代を超えて

ディズニーの第一作のアニメ
ニューマン劇場のお笑い漫画(1921年)



第1問

ディズニーの第2作目は初めての童話作品でした。
その童話はなんでしょうか？

- 1赤ずきんちゃん 2ジャックと豆の木 3ブレーメンの音楽隊



第1問

ディズニーの第2作目で初めての童話作品は何か？

- 1赤ずきんちゃん 2ジャックと豆の木 3ブレーメンの音楽隊



第1問

ディズニーの第2作目で初めての童話作品は何か？

- 1赤ずきんちゃん 2ジャックと豆の木 3ブレーメンの音楽隊



1922年7月

1922年8月

1922年10月

日本で最初のアニメ

モグラのアバンチュール

ドラえもんクイズ
一のび太が実は得意なことは？

- ① けん玉
② オセロ
③ なわとび
④ あやとり



④あやとり



50年以上前のお笑い



次のうち、
最も売れたシングル
(レコード・CD)は
どれでしょうか？

1 およげたいやきくん！



2 だんご三兄弟



3 TSUNAMI



4 世界で一つだけの花



1 およげたいやきくん！

458
万枚



2 だんご三兄弟

292
万枚



3 TSUNAMI

294
万枚



4 世界で一つだけの花

258
万枚



おひるやすみ

<午後の部>

みんなでやろうサインシング

強力翔さん

おはなし

アンケート作成・提出

お疲れ様でした。

リトミック体操の案内

**みんなで
身体を動かそう**

松本市立病院 リハビリテーション科

本日の内容

1. 身体を動かすことの大切さについて
2. おすすめの体操をやってみよう
3. 音楽に合わせて身体を動かしてみよう

**なぜ“身体を動かすこと”
が大切なんだろう？**

運動をしているみさわちゃん
運動をしていないカトゴリくん . . .

運動をしているか・していないかで、
どこか普段の様子が少し違います。

どんなところが違うでしょうか？

身体をいっぱい動かすと

- ▶ 姿勢が良くなる
- ▶ 肩こりや腰痛が減る
- ▶ 脳が活性化される
- ▶ 体力がアップする

他にも . . .

- ▶ 食欲が出る
- ▶ ぐっすり眠れる
- ▶ 心地よい排便

肩を回す



背すじを伸ばして
肩を後ろに回します

姿勢が良くなり
肩こりにも有効です

かかと上げ



ふくらはぎを鍛えます

バランスが良くなります

スクワット



太ももとお尻を鍛えます

歩くのが楽になります

手を天井に伸ばす



背すじを伸ばして
手を天井に伸ばします

姿勢が良くなり
肩こりにも有効です

身体を横に倒す



片手を伸ばしたまま
身体を横に倒します

姿勢が良くなり
腰痛にも有効です

身体を回す



両手を横に伸ばしたまま
身体を回します

姿勢が良くなり
腰痛にも有効です

音楽に合わせてからだを動かしてみよう



これからも楽しく
からだを動かしていきましょう



「みんなで身体を動かそう」タイムテーブル

松本市立病院 リハビリテーション科

時間	内容	必要物品
10:20	<p>「身体を動かすことの大切さについて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイントと寸劇を用いて説明する。 ・ パワーポイントの操作は中村博士が行う。 ・ MC：中村博士、運動している役：三澤ちゃん、運動していない役：カトゴリくん 	<p>PC 机 2、椅子 2</p>
10:27	<p>「オススメの体操をやってみよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単に6つほど体操を行う。 ・ カトゴリ先生が立って、三澤ちゃんが座って行う。 	<p>PC 椅子 1</p>
10:40	<p>「音楽に合わせて身体を動かしてみよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 嵐の「Love so sweet」に合わせて体操を行う。 ・ カトゴリ先生が説明しながら行う。 ・ カトゴリ先生が立って、三澤ちゃんが座って行う。 ・ 中村博士が周りをみながらお手伝う。 	<p>PC 椅子 1</p>

3-3 開催レポート

2020年10月25日（土）、長野県松本市の松本市中央公民館Mウイングにおいて、市民と障がい者が学び合うオープンキャンパスが開催されました。

2020年10月25日、長野県松本市のMウイングで文部科学省の委託研究である障害者の生涯学習の開発の一環として、同地の一般社団法人ぷろじえくとギフト実行委員会とともにオープンキャンパスを開催しました。午前中は松本市民病院のリハビリテーション科の先生による体操とみんなの大学校の引地達也学長によるメディアコミュニケーションに関するお話とクイズ、午後は手話とともに歌唱するサインシンガーの強力翔さんのパフォーマンスを見ていただきました。ソーシャルディスタンスを保ちながら体を動かし楽しんでいました。またズームでの参加も10名以上いらっしゃいました。

みんなの大学校のメンバーも前日から松本入りし松本城を観光し、いざ名物料理を食べようと繰り出しましたが、どこにもぎわいの中に入れるお店がなく結局は沖縄料理の店に行きました。

演者のみなさま、ご登壇された方々、スタッフのみなさま、参加者のみなさま、ありがとうございました！

参加者：参加者：一般・当事者の受講者 23名、Zoom参加 4名（一般2名・当事者2

名)、講師・ボランティア・スタッフ 19名

後援：長野県教育委員会、松本市、松本市教育委員会、塩尻市、塩尻市教育委員会



3-4 参加者集計及び感想

	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	年齢	性別
1	○	○ 短い時間の参加でしたが、楽しく見させていただきました。					
2	○	○		○		77	男性
3	◎ こどもと一緒に参加させていただきました。とても喜んでました。今後の活動を期待しております	◎ 知らなかった世界をみせていただきました					
4	◎ いろいろなことが知れたり、体験できたりできたので。	◎ 楽しい体験は年齢をとわないんですね。	手話で歌えたこと	◎	とうげい	46	女性

5	◎	・午後の部から参加しました。 ・強力さんと一緒に手話をしながら歌えたので楽しかったです。	◎	まだ手話を勉強中ですが、知らない手話を覚えられたので良かったです。		◎		41	女性
6	◎	午後の部からの参加でしたが、とても楽しかったです。	◎	前から手話に興味があり、少し勉強していました。 歌にあわせて手話をすることでとても覚えやすかったです。		◎		17	女性
7	◎	サインシンガー 剛力さんのパフォーマンスがよかったです。	◎		強力さんのパフォーマンスがよかったです。	◎	障がいのあるかたや引きこもりの方にもものを教える仕事をしたいと思っています。 今回新聞でこの講座を知り自分の目標が具体的なものになればと思います 受講させていただきました。	28	女性

							またこのよ うな機会が あれば参加 したいです。 手話を勉強 中なので、手 話に関わる 講演があれ ばいいなど 思います。		
8	◎	参加している 方々の笑顔が とても良かった。	◎	出逢いの輪 がもっとも っと広がる と良いと感 じました。 ひとつの事 に打ち込む パワーを感 じるイベン トでした。	どのプログ ラムも心に 残りました。	◎		55	女 性
9	◎	強力翔さんの 手話パフォー マンスが最高 でした。もっと ももっとも …見て聴いて いたかったです。 手話の魅力 を大勢の人た ちに広げてい ただきたいと 心から思いま した。 カトゴリ君の 体操も良かった です。	◎	・楽しみな がら学べた 一日でした。 ありがとう ございました。	強力さんの パフォーマンス を見つ める子供の キラキラと した目が大 変印象的で した。	◎		50	女 性

10	◎	強力翔さんのパフォーマンス、最高でした。カトゴリさんのキャラ、楽しかったです。	◎	知らなかったことを知れて、学びの1日になりました。	◎	強力さんのパフォーマンス中、強力さんに憧れている彼のキラッキラした表情が印象的でした。人を笑顔にできる力、人に生きる力を与えられる力、見ている私も楽しくなり、「生きる」を与えてもらいました。	◎		42	女性
11	◎		◎	今後の授業のくみたてに	◎		◎		37	男性
12	◎	全てのプログラムがとても良かったです。参加できたことが良かったです。	◎	興味を引く話が多かった。	◎	少しだけ手話で歌えた。	◎		53	女性
13	◎	身体を動かしたり、クイズで頭を使ったり…普段なかなか教わることのない手話も覚えたり…。	◎	リトミック、体動かせてよかったです。運動不足解消できそうです。	◎	一生けん命皆で手話を学んでいる姿	◎	学べれば何でも！	29	女性

		もりだくさん でした。							
14	◎	頭も、体も、心 まで動かしま した。	◎	様々な事柄、 色々な人と の出逢いが あったから。	参加者の 1 人が、子守 歌を完全コ ピーして来 てくれた 事。	◎	この様な企 画は、もっと 行政も取り 入れて頂き たい。	49	男 性
15	◎	体操、クイズ、 手話といろい ろやれて楽し かったです。	◎	とても勉強 になりました。 手話はほと んどやれな いし、体操は なかなか体 を動かす事 がないです。	強力さんの 手話はゆっ くりでわか りやすかつ たです。 がんばって おぼえよう と思いま す。	◎	絵の書き方 とかもいい かも…。		女 性
16	◎	難しい話しが なく、とても気 楽に過ごせま した。	◎	いろんな活 動をされて いる方を知 る事が出来 ました。	手話	◎	今日の様な プログラム		女 性
17	◎		◎	障がいの仕 事について いるので声 のトーンと か大切だと 思いました。 ・大 学 校 知 れて良かつ たです。	・学校説明 ・古畑さん のさいごの おはなし!! ・翔さんの 手話コミュ ニケーショ ン!!	◎	もっともっ と知らせて/ 知れて、楽し いみんなの 為の活動に したい!!	53	女 性
18	◎	体操、勉強、音 楽といろい ろなツールをつ かってみんな	◎	コミュニケ ーションは 言葉だけで はなく、体の	強力さんの 手話ソング はとても感 動しまし	◎	手話ソング は続けてい ただきたい です。	35	男 性

		でつながることができて楽しかったです。		すべてを使って伝えることが大切と感じました	た。 皆でつながることがとてもすばらしいことだと改めて感じ、このプロジェクトの存在が広まればと感じました。				
19	◎	強力さんの手話を交えた歌がとても感動しました。気持ちのこもった歌で手話を一緒に行うのはとても気持ち良かったです。	◎	手話を歌を通して学ぶことで理解しやすくて興味もとても持つことができました。	強力さんの歌やエピソードを含めた手話の深みがとても心に残りました。	◎	・手話をぜひよろしくお願い致します。 ・当事者の話をまた聞かせて頂き、少しでもお役に立てることが出来ればと思います。 良い機会を頂き本当に勉強になりました。ありがとうございました。	43	男性
20	◎	会場、また本日の会場に来られなかった皆さんも含め、どのプログラムでも会場が1つとなり”つなが	◎	参加型のプログラムで、人とのつながりや想いを分かち合えるすてきな時間を過	どのプログラムも心にひびき、”つながり”ある時間を過ごさせて頂きました。	◎	本日、このような機会を頂けたことに感謝しています。今日だけでなく、これを機に	26	女性

		り”を強く感じることができました。		ごさせて顶きました。教える立場としても経験させて頂き、自分の成長にもつなげられたと思います。			皆様とのつながりを大切にし、もっともっと広げていけたらいいなと思いました。		
21	◎	体操で体を動かして、クイズで頭を使って歌で楽しんで色々なプログラムがあっておもしろかった。	◎	色々な人あって、手話や体操を学んでおもしろい。	かとりさんの声がおおきかった。	◎		19	女性
22	◎	・一体感があつた。	◎	・皆でコミュニケーションをとれた気がします。	笑顔になることができました。	◎		44	男性
23	○		○		体操				男性
24	◎	ごうりきさんの手話と歌がとても楽しかったしクイズとかもわからなかったこともしれてよかったです。	○	わからない手話をおぼえられた。	手話をみんなできて楽しかった	△	さんかしたいけど手話もやりたい	10	女性
25	○	たいくつなときもあったけど、楽しいときもあった。	○	ほんの少しだけ、意味が分かる手話ができる。	手話と歌のごうりきさんのパフォーマンス	×	楽しい	11	女性

集計

質問 1		質問 2		質問 4		年齢・性別	
とても楽しかった	20	とても勉強になった	18	とても勉強したと思った	17	年齢回答者数	20
まあ楽しかった	5	まあ勉強になった	7	まあ勉強したいと思った	3	平均年齢	38
それほど楽しくなかった	0	それほど勉強にならなかった	0	あまり思わなかった	1	男	7
全然楽しくなかった	0	全然勉強にならなかった	0	全然思わなかった	1	女	16
その他	0	その他	0	その他	3	未回答	2

3-6 まとめ

本年度、初めての地方開催となったオープンキャンパスは、昨年にオープンキャンパスを長野県佐久市で行ったことがきっかけとして、地域で「障害者の学び」の場を作ろうとする市民グループであった「ぷろじえくとぎふと実行委員会」と知り合い、コーディネーターの引地に委員会が今後の展開などの指南を要請されるなどの関係を築きながら、市民への啓もうも重要なポイントとして、オープンキャンパスは長野県並びに松本市での学びの展開を推進する絶好の機会として計画を始めた。

ぷろじえくとギフトは松本市の特別支援学校の生徒の保護者らが中心メンバーとなり、専門学校関係者、公民館関係者、市民活動を推進する方とともに、18歳以降の学びの場を作ろうという考えをイベント開催でつなぎながら、実際の場所を作ることを目指しているグループである。この過程では長野県教育委員会の特別支援教育課への協力も要請しており、さらに準備中には松本市長選挙が行われ、前回落選した市民派の候補者が当選したことから、落選時からプロジェクトぎふととかかわっている方に市長就任で事業もやりやすい形となった。

しかしながら、新型コロナウイルスの影響で、当初全面的に協力していただける予定の長野県教育委員会当局もおそらくは新型コロナウイルスへの対応に追われる中で、大変難しい時期に開催することになり、大々的な集客も難しい状況下で、「広げる」ことよりも、身近な範囲の中でも「しっかりつながる」イメージで今回はオープンキャンパスを開催することになった。

準備の段階では、引地と古畑代表が、長野県教育委員会、松本市の臥雲市長、松本市教育委員会、塩尻市、塩尻市教育委員会に出向いて趣旨を説明しながら、後援を依頼し全体

としては、好意的に受け取っていただき、今後の素地を作ったのではないかと考えている。

プログラム内容も地元の意向をふまえ、松本市民病院のリハビリチームと連携し、ぷろじえくとギフトとおつきあいのあるサインシンガーの強力翔さんが手話を教えながら障害のある親子と交流しパフォーマンスを行うなど、地域の実情と要望に応える形で構成し、結果的に当事者の学びの充実につながったのだと考えている。今後も地域で継続して活動する「ぷろじえくとぎふと実行委員会」と連携をしながら、障害者の学びにおける松本モデルを模索し、協力を続けていきたい。

4. 第三回オープンキャンパス チャレンジランキング (浦和大学)

4-1 準備及び広報

第三回のオープンキャンパスは2018年の本事業開催から連携協議会委員であり、実際にオープンキャンパスでは講師を務めていただいた浦和大学の九里秀一郎教授の協力のもと、浦和大学の体育館を会場にして、多くの方々が来ていただくことを想定した地域と学生とともに障害者が「混ざり合い」「学び合う」プログラムを企画した。本企画は浦和大学及び地元のさいたま市教育委員会にも歓迎していただき、障害者のレクレーションが専門の片山昭義教授を中心にして準備が進められた。

しかしながら新型コロナウイルスで大学での活動が制限される中で、多くの方を集める形のプログラムを断念し、遠隔でウェブのコミュニケーションツールを使って、チーム単位で競い合う「チャレンジランキング」に企画を変更し、ウェブで結んだチーム同士でゲームを通じて交流する企画とし、急遽参加チームを募集した。呼びかけた先にはさいたま市の教育委員会や特別支援学校等もあり、当初の反応では参加の意向を示していたが、結局、それぞれのコロナ対策や土曜日における対応など公的機関での対応に課題があることから参加する状況には至らなかった。応募は開催の10日前に締め切れ、ゲームで使用する道具はすべて本部から郵送する形をとり、使用する用具の企画を統一することとした。

結果的に参加したチームは以下4チームとなった。

- ・浦和大学4年生チーム
- ・みんなの大学校チーム
- ・就労移行支援事業所シャローム和光チーム
- ・新潟青陵大学・海老田大五朗ゼミチーム

事前に案内したチラシは以下である。

遠隔で結ぶウェブ上でのゲーム大会 チャレンジランキング出場チーム募集

2020年11月7日(土) 午前10時～午後2時半

メイン会場：浦和大学(さいたま市) + ウェブ参加
参加チームは約10チームを予定しています。参加チーム多数の場合、申込の順で締め切らせていただきますのでご了承ください。詳細は申込後、お伝えいたします。

身近な道具で誰でも参加できる10のゲームで競い合います
講師・ファシリテーター：
片山昭義・浦和大学教授/引地達也・みんなの大学校

スケジュール
午前10時 オリエンテーション
午前10時15分 ゲーム開始1～6 コップつみ、足踏み日本一、割りばしダーツ、ピンポンカップ等
午前12時 昼休憩
午後1時 ゲーム7～10 ニチレクボール、紙ちぎりのばし等(状況によりゲーム種目は変わります)
午後1時45分 結果発表・表彰式

参加申し込み
メール：info@minnano-college-of-liberalarts.net
電話：070-3166-1616

2020年度文部科学省「障害者の生涯学習に関する委託研究事業」



参加チーム
大募集！
事業所・チーム
単位で是非
ご参加ください

4-2 カリキュラム内容

本オープンキャンパスは片山教授がゲームの説明、引地学長が進行役となり、ズーム会議システムを使って、行われた。運営には浦和大学の学生に協力してもらい、新潟青陵大学チーム以外には3人の大学生がルールの補足説明や競技のジャッジ、連絡役として各チームの場所におもむいて対応していただいた。

チャレンジランキングとは、誰でも簡単にできるゲームで順位を競う合うもので、身近な道具であまり体を動かさずにやるのが特徴。説明後、すぐに誰でもできることを念頭にゲームを選定した。ゲームは合計10個で、片山教授と引地の話し合いに加え、みんなの大学校の学生に実際やってもらい、ゲームの難易度を確認した。またゲームの公平性を確保するために、道具はすべて本部で用意し、各チームに郵送で送られた。

チームは4チームに分かれ、各会場は別々でズームで各会場をつなげる形とし、ゲームについては片山教授がまずは事前に各チームに配布したルール教本を見てもらいながら、ルール説明し、各チームが準備が終わったのを確認し、いっせいにゲーム開始とした。

ゲームの結果はそれぞれに配置された学生が集計をして発表した。新潟青陵大学の場合は自らで集計し発表してもらった。それを引地が取りまとめ、浦和大学のサポートメンバーにまとめてもらい、本部のある教室に掲示し、常に得点分かる状態にし、進行した。

以下が当日のプログラム進行表である。

遠隔で結ぶウェブ上でのゲーム大会

チャレンジランキング

プログラム進行表

= 最終版 =


【午前の部：10:15～11:45】


- ① 3人制サイコロ同じ目出し
- ② 豆30粒つまみ
- ③ コップ積み
- ④ 紙ちぎりのばし
- ⑤ ピンポンカップ
- ⑥ カウンターチャレンジ


【午後の部：12:45～13:45】


- ⑦ 足踏み日本一
- ⑧ サイコロ「1」出し
- ⑨ 片足立ち
- ⑩ ターゲットボール


10:15~10:30				
①3人制サイコロ同じ目出し				
【概要】 3人で振ったサイコロの目により得点が与えられます。				
【人数】 3人				
【準備物】 ・サイコロ 3個 ・ストップウォッチ				
【競技方法】 (1)スタートの合図で3人同時にサイコロを振る (2)出た目が同じ数字ならば得点になる *2つが同じ目だったら<2×出た目> *3つが同じ目だったら<3×出た目> (3)1分間に出した得点の合計を競い合います				
【注意点】 ・3人で同時にサイコロを投げなければいけません *「セーノ」と掛け声をかけると良いでしょう ・審判がサイコロの目を確認するまで、サイコロに触れてはいけません	【ランキングの得点方法】 1位 10点 2位 6点 3位 4点 4位 2点			
【次の競技】 豆30粒つまみ				
【備考】 ※チャレンジ風景を中継				


10:30~10:45	
②豆30粒つまみ	
【概要】 30粒の豆をいかに早く移し替えるかを競います。	
【人数】 1人 *3人チャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする	
【準備物】 ・豆 30粒 ・ストップウォッチ ・割りばし ・紙皿 2枚	
【競技方法】 (1)片方の紙皿に、豆を30粒入れておく (2)スタートの合図で、割りばしで豆をつまみ、隣の紙皿に移す * 豆を落としてしまった場合には、手で拾い、元の紙皿に戻し続行する。この時間も記録に含まれる。 (3)30粒すべてを移し替える時間を記録する (4)3人チャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする。	
【注意点】 ・3人のチャレンジは、一度に挑戦しても良いし、順番に挑戦しても良い ・スタートとストップや、豆を落とした時の指示など、審判の指示に従うこと。	【得点方法】 1位 10点 2位 6点 3位 4点 4位 2点
【次の競技】 コップ積み	
【備考】 ※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る ※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところ を中継 ※最後に記録だけ中継で報告	


10:45~11:00		
③コップ積み		
【概要】 紙コップを決まった方法で積み重ね、何個積み上げることができたかを競います。		
【人数】 1人 *3人チャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする		
【準備物】 ・紙コップ たくさん	【競技方法】 (1)スタートの合図で、紙コップをさかさまに置く (2)その上に、底のふちに合わせて紙コップを積み重ねる (3)さらに飲み口を合わせて紙コップを積み重ねる (4)このように規則的に紙コップを積み上げ、倒れるまで積み重ねたコップの数を記録する	
【注意点】 ・3人のチャレンジは、一度に挑戦しても良いし、順番に挑戦しても良い ・空調などの影響を受けないように注意する ・審判は確実に積み重ねた紙コップの数を記録する	【得点方法】 1位 10点 2位 6点 3位 4点 4位 2点	
【次の競技】 紙ちぎりのばし		
【備考】 <p style="text-align: center;">※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る</p> <p style="text-align: center;">※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところを中継</p> <p style="text-align: center;">※最後に記録だけ中継で報告</p>		


11:00~11:15		
④ 紙ちぎりのばし		
【概要】 1 枚の紙を、どのような方法でも良いので、なるべく長く伸ばせるようにちぎり、その長さを競う。		
【人数】 3 人		
【準備物】 ・A4 のコピー用紙 ・ストップウォッチ ・巻き尺(5M 程度)		
【競技方法】 (1)3 人であらかじめ、どのようにちぎるかを相談する。 (2)スタートの合図で一人がちぎり始める。 (3)30 秒で次の人に交代する。以降 30 秒ごとに交代しながら紙をちぎる *途中でちぎれても、残った部分で続けることができる。 *ただし、つなげることはできない。 (4)3分(2周)でストップの合図をし、一番長くちぎることができた紙の長さを記録する。		
【注意点】 ・紙に折り目などをつけても良いが、制限時間内に行うこと。 ・紙を重ねてちぎることはできない。	【得点方法】 1 位 10 点 2 位 6 点 3 位 4 点 4 位 2 点	
【次の競技】 ピンポンカップ		
【備考】 <p style="color: red;">※練習はせず、作戦タイムを事前に取り</p> <p style="color: red;">※画面上は、各会場のチャレンジしている風景を中継</p> <p style="color: red;">※最後に記録だけ中継で報告</p>		


11:15~11:30		
⑤ピンポンカップ		
【概要】 ボウリングのピンのように並べた紙コップに向けて、ピンポン玉をワンバウンドで10個投げ、入った得点の合計を競う。		
【人数】 10人以内		
【準備物】 ・ピンポン玉(卓球の玉) 10個 ・紙コップ(大きめ) 6個 ・紙コップの位置を指定する用紙 ・会議用の長机	【競技方法】 (1) 長机から1m離れた位置に紙コップを指定する用紙を貼り紙コップを並べる。 (2) 紙コップを狙って、ピンポン玉を1個ずつ投げる。ただし、ピンポン玉は必ずワンバウンドで紙コップに入れなければならない。 *ワンバウンドさせる位置はどこでも良い (3) 紙コップにはそれぞれ得点があり、ピンポン玉が入った位置の得点を合計する。	
【注意点】 ・ノーバウンドまたはツーバウンド以上で入ったピンポン玉は、無効とする。 ・複数のピンポン玉を同時に投げてはいけない。 ・紙コップに入ったピンポン玉は抜かずに、そのまま競技を進める。 ・一度入ったピンポン玉がはじかれて外に出たとしても、得点にはならない。	【得点方法】 紙コップに入ったピンポン玉を、そのままチームの得点として記録する。 1列目:20点 2列目:15点 3列目:10点 ※カップに入ったピンポン玉がそのまま得点につながるので、大量得点のチャンス!	
【次の競技】 カウンターチャレンジ		
【備考】 ※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る ※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところ を中継。最後に記録だけ中継で報告		

11:30~11:45		
⑥カウンターチャレンジ		
【概要】 一人で両手にカウンターを持ち、15秒間でカウントすることができた合計の数を競う。		
【人数】 1人		
【準備物】 ・カウンター 2個 ・ストップウォッチ		
【競技方法】 (1) 競技者は両手にカウンターを持ち、準備する。 (2) スタートの合図で両手のカウンターを押しはじめ、15秒間押し続ける。 (3) 15秒後ストップの合図をし、両方のカウンターの数を合計し、その数をチームの記録とする。		
【注意点】 ・カウンターは必ず指で押すこと。 * 身体に押し付けてはいけない ・うまくカウンターを押せるよう、事前に練習することを勧める	【得点方法】 両方のカウンターの合計数をチームの得点として記録する。 ※カウンターの数がそのまま得点となり、大量得点のチャンス	
【次の競技】 昼休憩		
【備考】 ※少し練習時間を取り、チームの中で一番うまくできる人を代表でチャレンジしてもらう ※各会場のチャレンジ風景を中継する		

12:45~13:00		
⑦ 足踏み日本一		
【概要】 腰に万歩計をつけ、30 秒間足踏みをし、その記録を競う。		
【人数】 1 人 *3 人チャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする		
【準備物】 ・万歩計 3 個 ・ストップウォッチ		
【競技方法】 (1) 競技者は腰にカウンターをつけて、準備する。 (2) スタートの合図でその場足踏みをはじめ、30 秒間続ける。 (3) 30 秒後ストップの合図をし、万歩計の数を記録する。 (4) 3 人同時にチャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする。		
【注意点】 ・万歩計は腰に装着すること。 ・うまく万歩計がカウントするよう、事前に練習することを勧める	【得点方法】 1 位 10 点 2 位 6 点 3 位 4 点 4 位 2 点	
【次の競技】 サイコロ「1」出し		
【備考】 <p style="color: red; text-align: center;">※少し練習時間を取る</p> <p style="color: red; text-align: center;">※各会場のチャレンジ風景を中継する</p>		

13:00～13:15	
⑧サイコロ「1」出し	
【概要】 サイコロを振り、1分間で「1」が出た回数を競う。	
【人数】 5人以内	
【準備物】 ・サイコロ ・ストップウォッチ	
【競技方法】 (1) サイコロを床から10cm以上離れた高さから落とす。 (2) 1回ごとに出了たサイコロの目を記録する。 * 記録はサイコロが完全に止まってから行う * 1回ごとにサイコロを振る競技者は交代しても良い (3) 1分間続け、その中で「1」が出た回数を記録とする。	
【注意点】	【得点方法】 1位 10点 2位 6点 3位 4点 4位 2点
【次の競技】 閉眼片足立ち	
【備考】 ※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る ※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところ を中継 ※最後に記録だけ中継で報告	

13:15~13:30		
⑨ 閉眼片足立ち		
【概要】 目を閉じて片足で何秒じっと立つことができるか競い合う。		
【人数】 1人 *3人チャレンジし、一番良い記録をチームの記録とする		
【準備物】 ・ストップウォッチ	【競技方法】 (1) 両手を腰にあてて、目を閉じながら片足で立つ (2) 次のような場合にチャレンジ終了となる ・両手が腰から離れる ・目を開ける ・上げている足が床につく ・立っている足が動く(ずれる、ピョンピョン跳ぶ 等) (3) 2分で強制終了とする (4) 3人一斉にチャレンジをはじめ、一番良い記録をチームの記録とする。	
【注意点】 ・目を閉じている間にバランスを崩して転ばないように、補助をつける。	【得点方法】 1位 10点 2位 6点 3位 4点 4位 2点	
【次の競技】 ターゲットボール		
【備考】 <p style="text-align: center;">※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る</p> <p style="text-align: center;">※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところ</p> <p style="text-align: center;">を中継</p> <p style="text-align: center;">※最後に記録だけ中継で報告</p>		

13:30~13:45		
⑩ターゲットボール		
【概要】 砂の入ったボールを転がし、前方のフラフープに何個入れることができたかを競う。		
【人数】 12人以内		
【準備物】 ・ニチレクボール(砂の入ったボール) 12個 ・フラフープ		
【競技方法】 (1) スタートラインから5m離れたところにフラフープを設置する。 (2) 競技者は砂の入ったボールをもって構える。 (3) フラフープに向けてボールを投げる(転がしても投げても良い)。 (4) 何個ボールがフラフープに入るかを記録する。		
【注意点】 ・フラフープが壁に近い場合、跳ね返ったボールは無効とする。 ・フラフープはテープで固定する。	【得点方法】 1位 20点 2位 12点 3位 8点 4位 4点 ※最後の種目なので得点が倍	
【備考】 ※各会場で少し練習時間を取り、各会場で記録を計る ※画面上は、各会場の練習風景などを楽しんでいるところ を中継 ※最後に記録だけ中継で報告		

4-3 開催レポート

2019年11月7日（土）、さいたま市緑区の浦和大学をメイン会場として「オープンキャンパス」のチャレンジランキングが開催されました。

【開催概要】

開催チーム

- ・新潟青陵大学海老田大五朗ゼミチーム（新潟青陵大学から参加）
- ・浦和大学片山昭義ゼミ 3-4年生チーム（浦和大学内から参加）
- ・就労移行支援事業所シャローム和光チーム（同事業所から参加）
- ・みんなの大学校チーム（浦和大学内から参加）

サポートチーム

浦和大学片山昭義ゼミ 1-2年生

【開催レポート】

文部科学省の委託研究事業の「市民と障がい者が共に学ぶオープンキャンパス」は11月7日に浦和大学をメイン会場にして、遠隔で4チームをつないでのチャレンジランキング大会が行われました。参加チームは、浦和大学チーム、就労移行支援事業所シャローム和光チーム、みんなの大学校チーム、新潟青陵大学チームで、片山昭義・浦和大学教授が案内役となり、みんなの大学校の引地達也学長が司会を務めました。

9つのゲーム種目で争うチーム戦に参加者は大変盛り上がりました。優勝は浦和大学チームでした。チャレンジランキングのゲームは誰でも出来るゲームですので、今後も福祉事業所や学校などをつないでやっていければと思います。希望の事業所あれば、みんなの大学校にお声掛けください。





チャレンジラッシュゲーム大会

	①3人制 4101	② 豆30粒 0.53	③ コア糖分計 5.2	④ 小豆 26	⑤ 結核 10	⑥ ロボコン 15	⑦ ロボット 172	⑧ ロボット 22	⑨ ロボット 6	⑩ ロボット 10	⑪ ロボット 20	⑫ ロボット 20	⑬ ロボット 12	⑭ ロボット 21	⑮ ロボット 3	
A: 新潟 青陵大学	10	0.53	6	10	26	10	15	172	22	6	10	20	20	12	21	3
B: シャロム 和光	2	1.1383	4	6	12	6	25	151	24	10	2	8	20	60	24	2
C: みんなの 大学校	4	0.50	10	10	24	4	35	173	24	4	4	12	8	24	280	4
D: 浦和大学	6	1.23	2	10	18	2	55	177	24	4	6	4	8	24	34	1

4-4 参加者集計と感想

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	年齢	性別
1	○ ミニゲームが多少面白かった。	△ 知識が増えるわけではないため。	サイコロ○が意外と強かった。運があるのかも	△	法律や経済など社会の仕組みを学びたい。	41	男性

					い。				
2	◎	いろいろな ことができた	◎	いろいろな ゲームがで きた	チームワー クがたいせ つだとおも った。	◎		41	女 性
3	◎	いろんな大 学と200 Mで勝負が できて結果 負けちゃっ たけど楽し かったです	○	みんなでチ ームで楽し む勉強にな りました。	ボールみた いなので輪 の所になげ てはいった のでうれし かったです	◎		19	男 性
4	◎	逆転できた ので嬉しか ったです。 たくさんゲ ームしてリ フレッシュ できました。	◎	交流する機 会はなかな かないと思 うのでそう いう場での 自分のこと を知れて良 かったです。	2位になれ たことです。	◎	またゲー ムがした いです。	23	女 性
5	◎	種類がたく さんあった から。	○	みんなで力 を合わせた り協力する ところ。	日を改めて またチャレ ンジしたい。	○	ゲームな らなんで も。		女 性
6	◎	みんなで協 力して優勝 を目指して 頑張れた事 が楽しかつ たです。	○	普段ゲーム をしないの でどのゲー ムも新鮮で 楽しく参加 できました。	豆うつしで は代表に選 ばれたので とても緊張 しました。	○		37	女 性

7	◎	紙コップ重ねや肩足立ちタイムなどいろいろな種類のゲームがあって楽しかったです。正直このまま4位で終わるとショックでした。でも最後のサイコロゲームで倍返しで2位になりました。	◎	色々なゲームでチームでそろうことで、チームワークが高められたと感じました。	紙コップを重ねるゲームが楽しかったです。	○		20	女性
8	○	みんなでワイワイやれたので	△	そこそこコミュニケーションがとれた	最下位から逆転2位。	△		28	男性
9	◎	初めてやるゲームばかりだった。	×	勉強という観点があまり感じられなかった。	逆転勝利	△		29	男性
10	○	体を使い動きがあったことが良かった。全員参加で協力しながら進める方法は参加者にとって意思を持ってやっている感が	◎	授業といった一方的なカリキュラムより自らが参加し、結果を出す方が、達成感のある方が、本人の為になると感じる	・頭と体の両方を使って参加するというカリキュラムが良かった ・それぞれの場所(遠方で)行ったゲーム大会でネットワーク	△		64	男性

		あり、楽しい雰囲気になったと思う			で結ぶという試みは非常に価値があると感じた。				
11	○	学生さんがもりあげて下さったから。みんな楽しそうだったから。	○	遠かくのイベントの参考になったから。	ふんいき作りが大切だと感じたこと。	◎	遠かくのプログラム。	41	男性
12	◎	参加型のゲームが多く、盛り上がる事が出来た。	◎	単純なゲームでも、組み立て方によって楽しいイベントにすることも出来る。競争や勝負にするとやはり盛り上がる。	普段、コミュニケーションが苦手、上手に他利用者と話せない人でも楽しく参加することが出来ていた。	◎	遠隔でのプログラムの取り方や、進行の難しさがとても勉強になりました。	31	男性
13	◎	色々なゲームを短時間であそべたので、あっという間の時間でした。	○	チームワークで取り組む楽しさや難しさがあった。競争心もでてくるけれど、他校との交流があまりなかったのが気になった。	参加者、スタッフの笑顔と笑い声。大学スタッフがもりあげてくれて、大活やくでした。	◎	他校や外部との交流は、福祉サービスとしてもよい機会だと感じました。	42	女性

14	◎	・一つのことをみんなで楽しむことができた	◎	・タイムラグや運営上の課題は受ける側として見ることができた。他事業所との一体感は難しいとは思った。 ・機械に対する慣れ。 ・リハーサル的重要性。	・徐々に深まる一体感	◎	障害の有無に関係なく交流しながら楽しめるイベントだと思った。年齢やかよっている場所の枠にとらわれずに広がっていくと面白いと感じました。	46	男性
15	○	楽しかったです。がちょっとつきました。もう少し休憩の時間がゲームずつに欲しい気がします。	○	各ゲームで色々な挑戦ができておもしろかったです。	小林さんのカウンターの速度。 水越さんがボールを輪に入れるのが上手でした。	○	ゲームは楽しかったのでまた参加したいです。	19	女性
16	○	盛り上がった。体力がきつかった。	×	体力を消耗しただけでした。	最下位	×	体力勝負でない場合	41	男性
17	◎	・多様なゲームを楽しめました。	○	ネットでつながっての競技も成り立つことが	・単純と思えるゲームでも、つながることによっ	◎	学習やコミュニケーションを通して	44	男性

				面白いですが、もう少し他会場からの様子を知りたかったです。	てコミュニケーションをある程度は取れた事。		生きる力をつけられるもの		
18	◎	大学やサークル間の活発な交流が生まれて賑わい、とても楽しかったです。	◎	zoom オンラインを利用して互いに意見を伝えあえる良さがああり、カメラのON/OFFやマイクの音量を調整できるメリットを実感できました。	・全員が一体になれた事。種目は「ターゲットボール」です。	◎	・ストレッチや体力トレーニングの実践交流	20	男性
19	◎	リモートでの参加だったが各会場での運営やスタッフの方々の対応がとてもよくて参加する側としてとても楽しくできました。次は集まって一緒に参加できる日が来てほしいと思いま	◎	一人で行うのではなく、「協力」というチームワークが必要なプログラムが多くみんなで一緒に楽しく安全にできるようなプログラム構成になっていたのも勉強になった。	サイコロゲーム 3人で投げた数字があれば得点になるゲームはとても楽しかったです。	◎	今日がとても楽しかったので今後もあれば参加してみたいです。	21	男性

		した。							
20	◎	リモートという環境ではあったが、内容が多く非常に取り組みやすかった。	◎	良い環境で友達との競争があったから。				21	男性
21	○	皆とゲームを通して協力し、盛り上がったから。	○	これから個人でレクもやるときなどあるかもしれないその時に役立てそう	コップをつみあげるやつ	○	団体でもできるレク。	20	女性
22	◎	みんなで共同・両立し合って楽しむことができました上に優勝することができたからです。	◎	みんなで共同・両立し合うことができましたからです。	全て	◎	レクリエーションにまつわるもの	20	男性
23	◎	一年生と交流しながら、チャレンジゲームをして楽しかったです。	◎	一年生の交流やチャレンジゲームなどやってみて、楽しかったし、色んなことが知れて良かったので、勉強になりました。	全て楽しくできたのと、一年生との会話を通して一番心に残ったことです。	◎		21	女性

24	◎	みんなでワイワイやれてとてももりあがった。	◎	誰でも気楽にでき障がいを持った方でも簡単にルールを把握できる構成であった。	◎	カップをつみあげるプログラム 思った以上に難しく楽しかった	◎	多くの人 が参加で きるプロ グラム	20	男性
25	○	スムーズにゲームが進んだので安心しました。	◎	なかなかない体験ができました。	○	ターゲットボールが上手く出来、盛り上がったこと。	○		18	男性
26	◎	同じチームの人と協力してできたのでとても良かったです。	◎	チームでの協力の大事さが改めて感じる事ができたから。	◎	チームで1位をとれたこと	◎		19	男性
27	○	・色々なゲームができたので楽しかった。 ・もう少し、テンプを上げたり、もっとゲームができればいいなと思いました。	◎	・初対面の人との話し方を学ぶことができた。 ・ゲームを通して交流し仕方を学ぶことができた。 ・ゲームの進め方を学ぶことができた。	○	・2つのサイコロのゲームが楽しかった。 サイコロのゲームはべからずかでもりあがることのできたので心に残っている	○		18	男性
28	◎	とても盛り上がったから楽しかった	◎	初めての体験だったのでとても勉強	◎	一位になったこと。	◎	皆で盛り上がるようなプロ	18	男性

		た。		強になった。			グラムであれば参加したいと思った。		
29	◎	どのように進めていけばいいのか不安だったが3年生と楽しく行うことができた。	◎	今年はここまで人と関わることがなかったのコミュニケーションだったり、このようにしてみんなで楽しむことができるんだなと勉強になった。	最後のサイコロ1だしで3回連続1が出たことです。	◎	このように色々な人とコミュニケーションがとれて楽しめる行事に参加したい。	19	男性
30	○	協力してプログラムを進めて無事を終了することができたので	○	協力して進めたのとプログラムを無事に達成させること	1位になったことです。プログラムを無事におえたこと。	○	・方の人と対戦するのではなく全員と協力して遊べるものもいいです。	19	男性
31	◎	今回のプログラムでみんなと盛り上がることができ、とても良かったと思います。	◎	初めて、オンラインでのイベントを行い、最初は成功するかなと思いましたが、とても良いプログ	どれも印象に残りましたが、全員で行うプログラムが印象に残りました。	◎	より、多くの人達が参加できもっと大学でも盛り上げるプログラムに参加し、盛	20	男性

				ラムになり、こういったプログラムがもっとできるといいなと思っています。			り上げたいです。		
32	◎	1人1人が楽しんでいて、それが伝わり一緒に楽しんでいたから	◎	障がいを持っていてもいなくても関係ないことを学んだから	・ターゲットボール	◎	皆と楽しくスポーツが出来るもの	18	男性
33	◎	・みんなと協力して話し合いながら準備やゲームをやれてよかったです。	◎	・レクリエーション実技の科目としてやってみんなと協力しながら仲を深めることが出来たから。	・大接戦の末浦和大学が優勝できたので良かったし嬉しかったです。	◎	・対面でやりたい。	19	女性
34	◎	画面越しであったが、各会場の盛り上がり伝わってきた。	◎	レクリエーションと実技を履修しているのでレクリエーションの進め方やルールなど勉強になることがたくさんあった。	成功した時や結果がでたときの達成感や同じチームの人と楽しめたことが一番心に残った。ターゲットボールが楽しかった。	◎	同じ会場で皆さんと集まってやりたい。	19	女性

35	○	進行がうまくいった 楽しそうな 雰囲気を感じられた	◎	ウェブでつながることにより、距離を超えて人と人がつながれる	最下位のチームが逆転の種目を選ぶ際、みんなで意見を合わせてサイコロ「1」出しをまよわず選んだ	◎	みんなで楽しく交流できる 気持ち良い汗が流せる	54	男性
----	---	---------------------------------	---	-------------------------------	--	---	----------------------------	----	----

4-5 まとめ

浦和大学で行われたチャレンジランキングはレクレーションの専門家である片山教授の指導のもと、4チームが競い合う中で、それぞれの施設の特色から支援者らがサポートすることでスムーズな運営と「楽しめる」内容として盛り上がったプログラムとなった。

今回の取組はチーム戦をオンラインで行うというハイブリット型ともなる形態となったが、これはコロナ禍ではなくても、遠隔でもチームがつながって、交流ができる形を提示することになり、未来にもつながるプログラムであることが確認できた。

ただし、「チャレンジランキング」は競争でもあり、ルールを厳密に運用しなければ参加者のストレスになってしまうので、道具の厳正化に向けて本部から一括して道具を送付すること、審査員を浦和大学の学生に統一するなどに対応した。その結果、厳正なジャッジの中でゲームが行われるようになり、参加者が真剣になったという効果も生んだ。

5 第四回オープンキャンパス オープンキャンパス+WEB（山梨県笛吹市）

5-1 準備及び広報

山梨県でのオープンキャンパスの開催は、山梨の地で障害者の生涯学習の可能性を広げるために企画され、2019年度から山梨県の生涯学習課や同地の特別支援学校とも話をし、2019年度から山梨県甲府市で開設された福祉事業型専攻科の「ユニバやまなし」の全面的な協力を得て準備を開始した。また会場としても引地と福祉従事者へのキャリアアップに向けたカリキュラム開発で協力関係にある甲府市の伊藤学園の会場提供を前提に話を進めた。しかしながらコロナ禍対応により伊藤学園の会場提供は難しくなり、会場を甲府市から笛吹市に移転した「ユニバやまなし」とし計画を変更。後援は山梨県、山梨県教育委員会、笛吹市、笛吹市教育委員会。関係者に配布したチラシは以下である。



5-2 カリキュラム内容

オープンキャンパスは当初、東京都国分寺市のみんなの大学の学生やスタッフが山梨に出向き交流をしながらの開催を考えていたが、開催直前に新型コロナウイルスの影響で首都圏の患者数増加を受けて移動の自粛を考えざるを得なくなり、結果的に山梨に移動したのは福祉教育支援協会の引地と河辺だけとなった。

オープンキャンパスは2020年11月28日午前10時から午後2時まで、山梨県笛吹市の福祉事業型専攻科「ユニバやまなし」で行われ、同事業所はもともと料亭があった建物で宴会場の舞台が今もなおあり、その舞台を会場にしお請われた。

以下がタイムフローである。

時間	内容	備考
900	みんなの大学校メンバー会場到着・会場設営	
930	音声等のチェック	
945	ズームオープン	
1000	開会：司会者 引地達也 あいさつ：森澤先生 オリエンテーション：引地達也	PPT
1020	「クイズ&ゲームプログラム」 来場キャンパスと+WEBキャンパスを繋げ、クイズとゲーム を利用したアイスブレイクとコミュニケーションクイズ ファシリテーター 引地達也みんなの大学校学長	
1050	「チャレンジド・ヨガ」ファシリテーター 加藤香織・スモー ジーとヨガ教室カラフル主宰	ステージ転換
1200	昼休憩 午後に向けての会場設営	スタッフ昼食 音声リハーサル
1250	「声を出してメディアコミュニケーション」 ピアノとコーラスで、声を出すこととコミュニケーションの 大切さを学ぶ ファシリテーター ピアノコーラスグループ、PSALM（サー ム）ハマ、ケンゴ 河辺朋久・就労移行支援事業所シャローム和光施設長	
1350	休憩	ステージ転換
1400	クロージング：引地達也&出演者 アンケート記入	
1420	閉会あいさつ：引地達也	
1430	閉会、会場片付け	
1500	終了	

カリキュラム内容

市民と障がい者の学びの場
オープンキャンパス
+WEB IN やまなし2020

2020年11月28日
ユニバやまなし

あいさつ

オリエンテーション



文部科学省
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業

一般財団法人福祉教育支援協会
青年期の学びを考える会
みんなの大学校

後援 山梨県 山梨県教育委員会 笛吹市
笛吹市教育委員会



本日のスケジュール

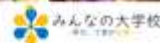
- 1000-1020 オリエンテーション
- 1020-1100 クイズ&ゲームプログラム
- 1100-1200 しなやかな心と体を育むヨガ
- 1200-1300 昼休憩
- 1300-1400 歌でつながるコミュニケーション
- 1350-1400 休憩
- 1410-1430 閉会・レポート作成

自己紹介



引地達也 ひきちたつや
みんなの大学校学長

好きなもの
5色のだんご
ブルー
ジャンボークA



新しい様式の時代にー

出会いを喜ぼう
みんなで驚こう
みんなで笑おう
「新しい」を感じよう

出会いを喜ぼう



みんなで驚こう オーバーアクション!

声はひかえめに



みんなで笑おう

笑顔で
コミュニケーション!



NEW!

「新しい」ことを
感じよう



クイズ&ゲームプログラム

みんなの大学校
引地達也



ゆるキャラ

やまなしのゆるキャラと言えばー

山梨県の観光キャラクター

武田菱丸
たけだひしまる



問題

次のうち山梨県のゆるキャラではないのは
どれでしょうか?

1



2



3



4



ニーラ

富山市
市制55周年記念
絵本の主人公
東京ディズニーランドのプロデューサー
堀貞一郎さん、デザインは
山梨県出身の絵本作家、仁科幸子さん



オエムシくん

南アルプス市商工会
「ヌイグル王国から来た
ヌイグル民族(タヌキ)」
「オエムシ」はペンネーム
本名は
「狸小路三六(たぬきこうじさぶろく)」
本業は、イラストレーター



キョツシー

山梨市の巨峰の丘マラソンの公式キャラクター
山梨市の観光大使に任命
日本一の生産量を誇る
特産のぶどうの巨峰



君はだれ？



うどん脳
香川県



ベスト・ワード・クラブ

「こ」から
始まる

楽しい
ことば

「う」から
始まる

かっこいい
ことば

「ふ」から
始まる

やさしい
ことば

ストーリー・キューブ

しなやかな心と体を育むヨガ

加藤香織先生

歌でつながるコミュニケーション

サーム(Psalm)
河辺朋久

アンケート作成・提出

5-3 開催レポート

2020年11月28日(土)、山梨県笛吹市の福祉事業型専攻科「ユニバやまなし」を会場として「オープンキャンパス2020」が開催されました。

【開催概要】

日時：11月28日(土) 午前10時～14時

テーマ：市民と障がい者が学び合う

担当講師：引地達也・河辺朋久・サーム

主催：一般財団法人福祉教育支援協会／みんなの大学校

共催：青年期の学びを考える会、山梨県、山梨県教育委員会、笛吹市、笛吹市教育委員会

【開催レポート】

2020年11月28日に山梨県笛吹市の「ユニバやまなし」を会場に、ユニバやまなしの学生らとみんなの大学校の学生を中心にして、オープンキャンパスを行った。コロナ禍拡大で急遽、みんなの大学校の学生と講師で山梨訪問予定だったピアノコーラスグループ、サームはリモートでも参加になったが、山梨の学生らは初めてのリモート授業を体験することになり、楽しく「学び」の1日を過ごした模様だった。



ヨガの授業では参加学生もリラックス



リモートで参加し歌と演奏を披露するピアノコーラスグループ、サーム

5-4 参加者集計及び感想

	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	年齢	性別
1	◎ ・中々できないこと (オンラインで勉強)ができてよかった。	◎ 音楽で一つになるのがよかった。	一番始めにやったプログラム。	◎	特になし。	19	男性
2	◎ なかなかあじわえないからまたできたらしてもらいたいです。 うたのほうもとてもたのしかったりして、かんどうしたり、かなしくなったりしました。	◎ みみで2つのうたをきいて、ちがいがわかった。シュミレーションのパズルは、たくさんあったけどいろいろなことにみえたりした。かんがえるのがすこしいへんだった。	おんがくでかなしいところとげんきでうたうところがここにのこった。	◎	おなじのがあればさんかしたいです。 オープンキャンパスでこうりゅうができるようなのに参加したい。	20	男性
3	◎ 自分でも始めてだったけど始めてやったのは少しずつなれてきたと思いました	◎ 始めてだったのでみりよくと興味を持ち始めました。	やっぱり自分のやっぱりヨガだと思った。それは自分の中ではヨガは始めてだったけど、始めてな経験を持つ事も大事だと思いました。	◎	自分たちの得意のきょうみをもっと知りたくて、(たとえば鉄道、きめつのやいば(キャラクター	18	男性

							と曲)を自分えのきょうみを高めようと思いました。		
4	◎	オンラインだったが一日たのしくさんかできた。コロナ時代にあったプログラムだった。	◎	ふだん自分たちがやっていることを他の人たちにしてもらうことはいいことだとおもった。	・おんがくりズムやヨガがたのしかった			20	男性
5	◎	様々なバックグラウンドを持つ人たちが集まってともに学ぶ力の大きさを感じました。どのプログラムでも、全員が同じ方向を向くことで生み出される雰囲気を楽しむことができました。	◎	特に後半のプログラムは、「いろいろな感じ方がある（自分の感じ方がすべてではない）」ことを体験的に学べる内容で、今後の授業の参考にしたいと思いました。	学生も講師も保護者も関係なくクイズ、ヨガに参加していたこと。	◎		29	女性
6	◎	ストーリーキューブ…想像力イメージがふ	◎	簡潔な「言語」言葉よりも、ハッキリとした					

		くらみ、おもしろかったです!!		目に見えない、一見曖昧な「聴覚」音の方が、脳へ大きく影響していることが、改めて知り実感出来てよかったです。				
7	◎	身心を刺激する内容で、充実しました。ヨガのリラックス→音楽の構成がとてもよかったです。	◎	聴覚、視覚からの情報の感じ方が新しい発見でした。	PMの音楽と共に学ぶ時間は自分も参考にしたいです。	◎	・五感を使ったプログラム ・ゲームなど楽しみながら学べるもの。	女性
8	△	自宅からオンラインでの参加でしたので、盛り上がる会場との温度差を感じました。ゲームの回答を数人で考えることのできる会場と、1人の私との盛り上がり	△	初めて体験するゲームは、個々の発想が全く違って面白かったです。	コロナの影響で会場に行けず、Zoomでの参加になったことです。会場の雰囲気はわからず、蚊帳の外でした。	△		41 男性

		差がありました。							
--	--	----------	--	--	--	--	--	--	--

5-5 まとめ

2019年から始まったユニバやまなしも地域で18歳以降の学びの場を保証するために福祉事業型専攻科として機能するとともにシンポジウムの開催などで市民への啓もう活動にも取り組んできた。今回も専門学校の伊藤学園とともに、支援者や当事者、家族らに学びの機会を伝える機会にするために、山梨県や山梨県教育委員会、笛吹市や笛吹市教育委員会に呼びかけ、後援にもなってもらい、良い機会ととらえるべく準備を進めてきたものの、やはり開催直前になってコロナウイルス対策により活動が制限されることになり、当初予定よりも少ない人数での開催となった。

それでも学生らは初めてリモート授業が出来たことを喜ぶなど、非常にポジティブな反応であり、少人数ながらも楽しく笑いながら、一人ひとりの顔が見える形で学びが出来たのは大きな喜びであったが、その反面ウェブでの参加者には、その笑いが伝わらず、「遠くについてつまらない」という反応もあり、ウェブ上でも臨場感をどう伝えるかは大きな課題になりそうだ。

5-6 参考 オープンキャンパス全体の参加者集計

【参考：参加者実績】

(A) 参加者の属性について

		合計(人)	男性(人)	女性(人)
属性別参加者数		131	80	51
(内訳)				
行政関係者	教育委員会	0	0	0
	首長部局	1	1	0
学校教育関係者	大学関係者を除く	0	0	0
大学関係者		5	4	1
公民館等社会教育施設関係者		0	0	0
社会福祉法人関係者		15	6	9
NPO法人関係者		0	0	0
企業関係者	商工会等含む	7	7	0
保護者団体関係者	親の会・ 手をつなぐ育成会等含む	2	2	0
その他一般参加者		94	56	38
運営事務局関係者		7	4	3

6. 重度障害者の生涯学習を推進するフォーラム（東京都渋谷区）

6-1 準備及び広報

本フォーラムは昨年から本事業で取り組んでいる医療的ケアが必要な障害者への生涯学習の実践と、共生社会コンファレンスにおいての焦点の1つとして問題提起し分科会を開催した経緯から、各地で実践している重度障害者への学習や学びの支援について、ネットワーク化し、社会に対して重度障害者の学びを啓蒙していくとともに、実践できる素地を作っていこうと、独立した形でフォーラムを開催するものである。

本事業では当初から、NPO 法人地域ケアさぼーと研究所（飯野順子理事長）の協力で行われ、プログラムの内容は日本で最も重度障害者への学習に取り組んでいる先駆的な事例を総集することになり、この取組を文科省の政策と合致させるためにも、あいさつには小林美保・文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室長に立ってもらい政策の現状を説明してもらった。また本事業は全国で22件が採択されているが、そのうち重度障害者への学習支援に関連している愛媛大学と北海道の稲生会にもリモートで参加いただいた。さらにこれまで重度障害者向けの学習支援を行ってきた先駆的な団体も登壇し、総括として、文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」座長を務める宮崎英憲・全国特別支援教育推進連盟理事長、東洋大学名誉教授に登壇いただいた。

これらの内容をチラシに掲載し、関係機関などへの直接的なアプローチとメールによる広報を行った。事前に案内した資料は以下であった。

「第1回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」開催案内

「いつでも、どこでも、だれにでも、学ぶ喜びを！」を合言葉に、医療的ケアの必要な方々の学校卒業後の学びを支えてきました。学ぶ喜びが、可能性の芽を育て、生命を強めています。その笑顔やまなざしが、人を動かしています。学び続けたいという願いを叶える機会と場を「ひろめる・深める」ことが私たちの使命です。本フォーラムでは、これまでの活動を紹介し、参加者が「つながる」ことを目指しています。ご参加のほどよろしくお祈いします。

1 日時 令和2年11月13日（金） 11時～15時15分

2 場所 国立オリンピック記念青少年総合センター

センター棟101室

(〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1)

最寄駅 小田急線参宮橋駅下車 徒歩7分

東京メトロ代々木公園4番出口 徒歩10分

3 主催 一般財団法人福祉教育支援協会

重度障害者・生涯学習ネットワーク

4 後援 東京都

5 対象

都道府県生涯学習関係部・課 区市町村生涯学習部・課

医療的ケア児者の関係者（本人・保護者、特別支援学校・福祉施設等）

その他

6 目的

(1) 国の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。

(2) 学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。

(3) 学校卒業後の訪問型生涯学習の制度化に向けた発信を行う。

※本事業は文部科学省の「令和2年度度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」における「特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」の一環です。

7 参加費 無料



8 実施方法・定員

(1) 会場への参加 定員80名(会場定員200名の50%以下)

「参加申し込み」の参加方法の「会場参加」の○にチェックを入れてください。

※会場に参加される場合、「10 参加に当たっての注意事項」をお読みください。

(2) オンラインでの参加 定員100名

「参加申し込み」の参加方法の「オンライン参加」に○にチェックをつけてください。

※Zoom ミーティングで参加いただきます。「10 参加に当たっての注意事項」をお読みください。

9 内容

司会 引地達也(一般財団法人福祉教育支援協会・みんなの大学校)

1 1時00分～ 主催者挨拶

飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク)

小林美保(文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全障害者学習支援推進室長)

1 1時20分～ 「訪問型の医療的ケア児者の生涯学習の実践と課題」

①「訪問大学おおきなき」 相澤純一(NPO 法人訪問大学おおきなき理事長)

②「訪問カレッジ Enjoy かながわ」 成田裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会理事長)

③「みらいつくり大学校」 土畠智幸(医療法人稲生会理事長)

④「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」 荻田知則(愛媛大学教育学部特別支援教育講座教授)

⑤「ひまわり Home College」 藤原千里(NPO 法人ひまわり Project Team 理事長)

1 2時30分 昼食休憩

1 3時30分～ シンポジウム

『訪問型の医療的ケア児者の生涯学習』の持続可能な仕組みにむけて」

(1) 話題提供 「東京都日野市の『日野市障害者訪問学級』」 1 3時30分～

①日野市教育委員会生涯学習課 白川和彦さん

②日野市障害者訪問学級学生の保護者 石坂有香さん

(2) シンポジウム

1 4時～

司会 飯野順子(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所理事長)

シンポジスト

成田裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会理事長)

下川和洋(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所理事)

引地達也(一般社団法人みんなの大学校代表理事)

荻田知則(愛媛大学教育学部特別支援教育講座教授)

(3) 講評 宮崎英憲(全国特別支援教育推進連盟理事長、東洋大学名誉教授、文部科学

省「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」座長)

15時～ 閉会挨拶

引地達也 (一般財団法人福祉教育支援協会)

10 参加に当たっての注意事項

(1) 会場参加の場合

会場の国立オリンピック記念青少年総合センターから以下のように連絡があります。ご確認の上、当日ご参加ください。

センター入所時にサーモグラフィ等による体温測定を行いますので、守衛の指示に従い必ず検温にご協力ください。なお、体温が37.5度以上の方、体調が優れない方、検温を拒否する方の入所はお断りいたします。

◎検温に時間を要する場合がありますので、時間に余裕をもってお越しください。

施設内でのマスク着用

更衣室・浴室脱衣所・食堂等への移動や順番待ちの間もマスクを着用してください。マスクを着用していない方のご利用をお断りする場合があります。

何らかの事情で当日会場に来られなくなり、オンライン参加へ切り替えることも可能です。参加申し込みの際、全ての方に Zoom ミーティングの URL、ミーティング ID とパスワードをお知らせしますので、「(2) オンライン参加の場合」をご参照の上、参加して下さい。

(2) オンライン参加の場合

事前に下記の URL からオンラインで使用する端末 (PC やタブレット等) に応じた Zoom ミーティングのアプリをダウンロードしてインストールしておいてください。

<https://zoom.us/download>

申し込み受付後、登録したメールアドレスに Zoom ミーティングの URL、ミーティング ID とパスワードをお知らせします。当日参加される際、ご自身の映像は「ビデオ停止」、音声は「ミュート」にチェックを入れてください。なお、届いた Zoom ミーティングの URL 等を参加申し込みされていない方へコピーして広めたりはしないでください。

11 参加申し込み

(1) QRコードから参加フォームへアクセス

右のQRコードから参加フォームにアクセスしていただき、ご記入ください。なお、登録いただいた情報は、このフォーラム開催のみに使用し、その後は破棄しますのでご了解願います。



(2) 右図を「Ctrl+クリック」で参加フォームへアクセス



(3) 以下の URL をインターネットブラウザにコピーアンドペーストで参加フォームへアクセス

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSePcDx47GgMyX4RPUkdBgm8G3gOvNWqv-jQm8-Icbk79vd5Q/viewform?fbzx=-2009245611705709167>

12 お問い合わせ メール kazu.shimokawa@gmail.com にご連絡ください。

6-2 フォーラム内容

フォーラムは午前 11 時から午後 3 時 15 分まで、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターセンター棟 101 室で行われた。

以下がタイムフローと当日の様子である。

午前 11 時 冒頭案内 引地達也 (一般財団法人福祉教育支援協会・みんなの大学校)



主催者挨拶 飯野順子 (重度障害者・生涯学習ネットワーク)



主催者挨拶 小林美保（文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課
障害者学習支援推進室長）



11 時 20 分 「訪問型の医療的ケア児者の生涯学習の実践と課題」
「訪問大学おおきなき」 相澤純一（NPO 法人訪問大学おおきなき理事長）



「訪問カレッジ Enjoy かながわ」 成田裕子（NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体
不自由児協会理事長）



「みらいつくり大学校」 土島智幸（医療法人稲生会理事長）



「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」 荻田知則（愛媛大学教育学部特別支援教育講座教授）



「ひまわり Home College」 藤原千里（NPO 法人ひまわり Project Team 理事長）



12時30分 昼食休憩

13時30分～ シンポジウム

『訪問型の医療的ケア児者の生涯学習』の持続可能な仕組みにむけて」

話題提供 「東京都日野市の『日野市障害者訪問学級』

日野市教育委員会生涯学習課 白川和彦さん

日野市障害者訪問学級学生の保護者 石坂有香さん

14時 シンポジウム

司会 飯野順子（NPO 法人地域ケアさぼーと研究所理事長）

シンポジスト

成田裕子（NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会理事長）

下川和洋（NPO 法人地域ケアさぼーと研究所理事）

引地達也（一般社団法人みんなの大学校代表理事）

荻田知則（愛媛大学教育学部特別支援教育講座教授）

講評 宮崎英憲（全国特別支援教育推進連盟理事長、東洋大学名誉教授、文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」座長）

15時 閉会挨拶 引地達也

6-3 パンフレットの作成と配布

このフォーラムに合わせて取り組んでいる各団体の様子が分かる「」を作成した。フォーラムでも案内し各地域で配布することでこの分野での啓蒙活動を行っていくこととした。（パンフレットは別紙参照）

以下はパンフレットに掲載した団体の一覧である。

■ 重度障害者に対する訪問型生涯学習に取り組む団体一覧（令和2年9月9日現在）

	事業名	事業者名	法人等の 代表者名	事業代表 ・連絡先	事務局所在地
①	訪問カレッジ@希林館	NPO法人地域ケアさぼ ーと研究所	飯野 順子	下川 和洋	東京都 ・小平市
②	訪問大学おおきなき	NPO法人訪問大学 おおきなき	相澤 純一		東京都 ・大田区
③	ひまわりHome College	NPO法人ひまわりProject Team	藤原 千里	寺崎有仁子	東京都 ・新宿区
④	訪問事業 i.porte(あいぼると)	NPO法人あいけあ	岡安 玲		神奈川県 ・川崎市
⑤	訪問療育いるか	NPO法人かすみ草	早野 節子	栗山 弘子	東京都 ・杉並区
⑥	訪問カレッジ Enjoyかながわ	NPO法人フュージョンコ ムかながわ・県肢体不自 由児協会	成田 裕子		神奈川県 ・横浜市
⑦	訪問カレッジ静岡	静岡県障害者就労研究会	瀬戸脇 正勝		静岡県 ・静岡市
⑧	日野市障害者訪問学級	日野市障害者問題を 考える会	名取 潮子	大石 恒子	東京都 ・日野市
⑨	在宅訪問学習支援事業 「SHJ学びサポート」	認定NPO法人スマイリン グホスピタルジャパン	松本 恵里	松本 健太郎	東京都 ・杉並区
⑩	みんなの大学校	一般社団法人 みんなの大学校	引地 達也		東京都 ・国分寺市
⑪	訪問カレッジ・オーブ ンカレッジ@愛媛大学	愛媛大学	蒔田 知則	村上 沙耶佳	愛媛県 ・松山市

■ スタッフ募集（講師・学習支援員）



これまでの福祉や教育現場で培ったスキルを、重い障害のある
方々の学びの支援に活かしてみませんか！
ご関心ある方は、各団体へお問い合わせください。



6-4 参加者集計及びアンケート

参加者 会場 50 人、ズーム参加 185 人

アンケート回答者 25 人

アンケートの質問は以下であった。

質問1 午前の部「訪問型の医療的ケア児者の生涯学習の実践と課題」について内容はいかがでしたか？（1つ選んでください）

大変よかった まあよかった どちらでもない あまりよくなかった よくなかった

質問2 上記の回答の理由やご意見を自由にお書きください。

質問3 午後の部「『訪問型の医療的ケア児者の生涯学習』の持続可能な仕組みにむけて」について内容はいかがでしたか？（1つ選んでください）

大変よかった まあよかった どちらでもない あまりよくなかった よくなかった

質問4 上記の回答の理由やご意見を自由にお書きください。

質問5 そのほか、ご意見などご記入ください。

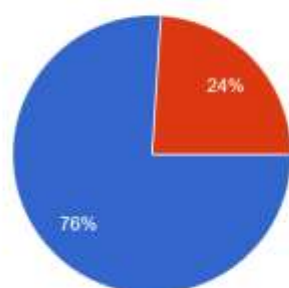
以下がアンケート集計である

回答の概要

質問1		質問2		年齢	
大変よかった	20	大変よかった	19	年齢回答者数	19
まあよかった	4	まあよかった	5	平均年齢	50
どちらでもない	0	どちらでもない	0	性別	
あまりよくなかった	0	あまりよくなかった	0	男	5
よくなかった	0	よくなかった	0	女	13
未回答	1	未回答	1	未回答	7

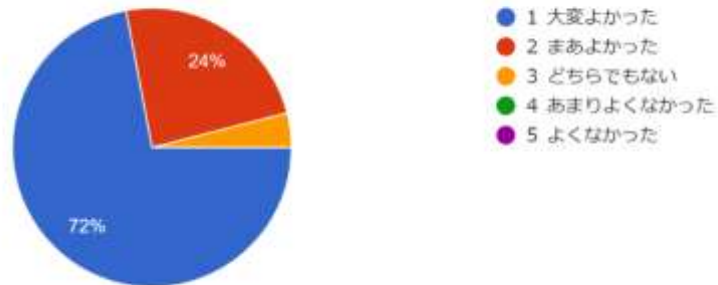
質問1 午前の部「訪問型の医療的ケア児者の生涯...内容はいかがでしたか？（1つ選んでください）

25件の回答



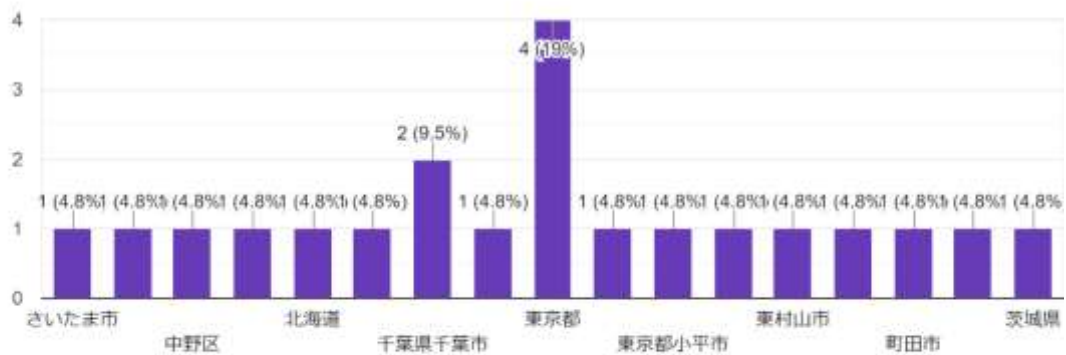
- 1 大変よかった
- 2 まあよかった
- 3 どちらでもない
- 4 あまりよくなかった
- 5 よくなかった

質問3 午後の部「『訪問型の医療的ケア児者の生...内容はいかがでしたか？（1つ選んでください）
25件の回答



(任意記入欄) 居住の自治体

21件の回答



(任意記入欄) 職業

21件の回答



6-5 参加者の感想（アンケート回答）

質問2の回答

【会場参加者】

・全国で実施されている生涯学習のご紹介、勉強になりました。親の立場であります子どもたちの生きる喜び、可能性に期待がふくらみます。ただ課題が多くあることにこの活動の難しさを感じました。

・自分の立場での啓発活動につとめていきたい。なによりも自分の子どもの幸せのためまわりの他人にもその幸せが伝わることも今まで子どもとくらしで来た中でわかっているだけに、できることに取りくんでいきたいと思っています。

・各とりくみを具体的にうかがえて良かったです。特に土畑先生の着眼点がすばらしく「社会教育の実践」という視点こそ「持続」につながると思いました。私も参加したいです。

・幼稚園・小学校・中学校・高等学校では学びの保証がされていた。

・医療的ケアが必要な重度障害児の子どもたちが、卒業とともに、社会とつながりもなくなり、学びが途切れている現状を知り愕然としました。しかし、そのような現状の中でも生涯に渡り学びを続けていくことができるよう、子供達のために、訪問学習や通学による学習、そしてWebを通しての学習を支えている方たちがいらっしゃる事に、感銘を受けました。

・高等部を卒業すると、それまで受けられていたサービスや学びが小さくなることへの生徒や保護者の不安は大変大きなものであることはひしひしと感じています。特に生命を維持する事への支援はあっても、生きるモチベーションへの支援は小さい。皆さんの努力に頭が下がる思いです。

・各団体の事例を通じて、生涯学習の効果・意義について、理解することができた。

・重度の障害を持つ方への教育の必要性を関係する〇へ理解してもらうこと、運営を維持する人材、資源の確保と大変なご苦勞をされていると思います。それでも、熱い思いをもって「自己実現」を引き出す多くの具体的な試み実施例を拝見して、とても勇気を頂きました。勤務する障害者施設(生活介護)の是非、参考にさせて頂きたいです。(とくにICTの活用について。)

・とても勉強になりました。ありがとうございます。

・特別支援学校・小学部で教員をしています。「学び続けること」が卒後に継続されにくいこと、その重要性を痛感しました。小学部で日々を過ごす「学び続けること」は日常であり、はずかしながら卒後の学びについて考えることは少なかつたと思います。児童・生徒の「学びたい」という意欲をしっかりとかなえていけるように様々なことが整っていくことを願ってやみません。誰でも持っている同じ思いを実現することが難しいという問題は、とても切ないです…。自分にも何ができるか考えていく良い機会となりました。

- ・色々な立場の方が取り組まれていることや専門学校や大学生など若い方の協力も得ていることなど知ることができよかった。皆さんの頑張りが私の励みにもなりました。
- ・都立の(肢)特別支援学校でコーディネーターの仕事をしています。卒業後の生活へつなげる視点をもって、日々の業務にむかっています。高等部の教員としては「学生ラストの夏休みだあー!」とか話していましたが、その先にもまだまだ学びの場があることにおどろきました。
- ・福祉と教育のすき間をうめる、コーディネーターとしてかかわって仕事をしていきたいです。
- ・高校卒業後の道路の問題は以前から気になっていたテーマであり、私自身は今現在重身の子どもたちと関わる機会はないが、このような取り組みがなされていることを知ることができとても勉強になった。病院勤務をしていた頃は忙しさから子どもの内面に深く触れることがなかなかできなかったが、保育園で働くようになり子どもの僅かさや学ぶことの重要さを体感するようになり、重身の子どもたちの経験の機会がもっと保証されなければならないと考えており、今回のお話でそれは障害に渡っていえることなんだと感じた。看護学生の頃にこうした活動をされていることを学ぶ機会があれば、より視野が広がるように思うので、教育課程の中にこうした学びの機会が組み込まれてほしいと思う。
- ・それぞれの発表を伺い、共通するものもありながら、少しずつ違っていることを興味深く伺いました。卒後も学びたいと思っている人がたくさんいること、その個々のニーズに答えていること大変勉強になりました。同時に現職の教員をしている身として、在学中の子どもたちの学びの意欲に答えているのか、あるいは、ずっと学び続けたいと思う意欲も育てられているのか、改めて考えさせられました。
- ・各々の取り組みを伺うことができ良かったです。オンラインで遠く方のお話も聞けて良かったです。
- ・活動内容、課題、大変分りやすかった。日頃からの苦勞、喜び、工夫など伝わりました。
- ・現状がよくわかった、活動費の調達に苦勞している団体への援助はどのような方法があるのか探っていきたい。発表団体を絞り一つの団体の発表時間を長くしてもよかったと思いました。
- ・生涯学習ということについて、基本的なことを考えさせられました。障害が重くても、自分で感じる、考える、表現する力を持っていること、その人たちの持っている力を引き出す。生きる力、喜びにつながっていく、そのために、力を注いで活動されている皆様に感動しました。
- ・長期入院や卒後の進路先の枯渇により、社会参加が途絶えてしまうケア児者にとって、大きな希望となる取組みと感じました。
- ・制度化の早期実現、運営の安定を願います。”

・午前の発表！①「院内大学おおきなき」において、スライドはあったが、資料化されていない部分があり（”課題3”という発表部分）惜しいと思いました。特に”課題”ということなので、きっちりきいてみたかった。シンポジウム：こちら資料が揃っていなかったよう。追加されたのか？いずれにしてもそろったものを手元にするのができなかったのが残念。

・小林室長から、最新の情報をうかがう社会に恵まれたことに感謝します。

・各法人、団体の活動状況を知ることができ、学生の皆さまの生き生きとした笑顔あふれる姿にこの学びの活動が安定した財政のもとに継続して実施されていくことが切に望まれます。オンラインによって北海道と愛媛からの報告もありハイブリッドならではでした。

・支援員の人材育成の課題も各法人団体から報告され、生涯学習支援をする方々が、職業として成り立っていく世の中になっていけたらと思いました。

・「学ぶ」、私たちの暮らしにとって、とても大事なことだと思います。その年代々（ライフステージ）で”学びたいことを学ぶ””何を学びたいのかを考えるために学ぶ”など、私たち自身の心の成長になっていると思います。この報告での皆さんの表情が輝いているのを見、皆さんからの思いが伝わってきました。重症児者、医療的ケア児者の体調面を考えると仲間と一緒に学ぶ（通所）も大事ですが、訪問型は必要だと思います。組み合わせが多様にできるといいです。暮らしの中で「学ぶ」「好きなことをする」と。生涯学習が生涯発達につながっていること、一日一日と今を大切に、続けていくことが大事であることを改めて実感しました。

・様々なタイプの生涯学習を知ることができ良かったです。

・特に大きな木の先生のお話し、学生さん達のご様子には感動してしまいました。

・各地でこんなにも訪問大学、学習支援があることを知りましたが、どちらも資金面での課題があることから、この会の意義を実感しました。

・学校卒業後の自己実現・意思を汲みとってもらえる、発信の実現・学習し続ける機会を全ての人が受けられる形ができることを願います。（質問4の回答と合わせて）

・保護者で立ち上げた生涯学習の場が何か所か紹介されたが、受講学生と同年代の大学生と交流の機会となっていることは素晴らしいと思いました。

【オンライン参加者】

・具体的な取り組みがわかりました。

・”医療的ケア児者の生涯学習の素晴らしさや様々な取り組みを知ることが出来てとてもよかったです。特に現場の方々のあたたかいまなざし、「生徒さん」として尊重して下さっている事に感動いたしました。

・素人でもどうやって現場に関わっていけるのかを知りたいと思いました。”

・全国に広がりつつある活動の需要を感じた。

・訪問型教育は知っていましたが、生涯教育のためにこんなに尽力されている方がいるのは知りませんでした。大きな勇気をいただきました。

・先進的に取り組みを知ることができ、気づきや学びがありました。一つ一つの団体の発表時間が短かったので、もう少しじっくりお聞きしたかったです。

・自分の市にはあるのかという不安、期待、色々な気持ちに成りました。もう少しゆっくり講義を聞きたかった。

・全国様々な立場で事業を展開されている方々のお話は、大変参考になりました。来春高等部を卒業する娘をまだまだ学ばせたいと思っていました。具体的取り組みがあることに希望を持ちました。

・会場に行くことができないのにリモートで大変興味深い話を聞くことができましたことを感謝申し上げます。特別支援学校卒業後でも学ばせてあげたいと思っている気持ちを、また新たに強くすることができました。

・限られた短い時間の中でみなさん目いっぱいお話を聞いていましたが、欲をいえばもう少し詳しく聞きたかったです。

・民間団体の皆様の、立ち上げたきっかけ・現状・ご苦労されていることなどがよくわかり、その想いに時に涙しながら拝見しました。また訪問カレッジの学生さんたちの実際の姿も拝見することができ、我が子（現在7歳）の未来を明るく想像して見ることができました！

・現在 中学2年の脳性麻痺・気管切開 頻回喀痰吸引・経鼻経管栄養・夜間人工呼吸器管理 男児の保護者です。

・かねてから卒業後社会に放り出され生活介護施設で童謡やお遊戯のような活動を強いられることに疑問を感じていました。

・発語はなく言語の獲得もありませんが相手の話すことは大体理解している様子。寝たきりで目も見えない耳も聞こえない手足も動かせないと診断された子が今では不自由ながらも膝立ちまでできるようになり、観たいDVDを選択したり、自我がしっかりしています。あと数年後には卒業を迎えます。

・生涯学習の大切さ、生きる喜びについて改めて考える機会になりました。

・12月8日のICT機器の活用の学習会も視聴させていただく予定です。”

・現在小学校1年生の肢体不自由児がいるのですが、余暇活動がどうしたら充実するか悩んでおります。義務教育後も学びの機会があり趣味や関心を広げておられる先輩方のお話は参考になり、少し前向きな気持ちに慣れました。

・漠然としかわからなかった訪問カレッジのことを、利用されている方の動画など実例をご紹介いただき大変参考になりました。また、人材の確保や財源のことなど、課題もあるようですが、ぜひどの地域に暮らしていても利用できるようになってほしいと思いました。

・自己決定・自己実現が必要であることはわかっている、家族では日々の生活に追われ、なかなかそこまでサポートしきれない部分だが、本人にとってはそれこそが毎日の楽しみや生きがいになっているのだと思うと、やはりその支援をしていく必要があると改めて感じた。”

・いろいろな取り組みが、全国各所で行われていることを知ることができました。

・多様な取り組みが知れて良かった。

・コロナ禍の中での取り組みも興味深い”

・先進的取り組み事例から多くを学びました。特支卒業まであと6年の娘、卒後も継続して学べる場をと考えてきましたが、今日の学びから、待っているだけでなくできることがあるのでは、と思いました。

・重症心身障害者の生涯学習活動が各地への広がりや充実を増している様子や、新しい活動が生む新しいアイデア、活動を支援する仕組みの模索、活動が持続可能になるための課題など、生涯学習の推進の全般を網羅する内容が大変勉強になりました。

・実践事例が数多く聞くことができ、参考になりました。

・訪問看護師の仕事をしています。以前受け持った重心の女の子は、高校を卒業するとそれ以後の選択肢の少なさを不思議に感じました。

・それまでの義務教育はとても熱心なものだったのに、ピタリと環境が変わってしまう。そんな気持ちを残したまま時が経過し、引地達也さんのブログで、福祉の事を考えたり学ぶようになりました。今回のフォーラムもブログから知りました。

・実際に「大学」を運営されている方の発表を聞き、運営の大変さや取組を知り、あの時に「大学」に出会っていたなら、その子の選択肢が広がったのにな、と思いながら症例を聞いています。

質問4の回答

【会場参加者】

・持続にはやはり行政からの支援が不可欠だと思います。

・この生涯学習の必要性を理解していただくために、ことあるごとに立ちあがっている方々の活動を紹介していこうと思います。また、地域のネットワーク、人材を多様な方面から講師をなんとか見つけていかねばならないと思います。

・運営資金と人材の確保!!が課題ですネ!!お互いがんばりましょう。

・一人のニーズに応える、チームを作る。健常者も重度の医療障害も、生涯学び続けることで、人として豊かに成長していくことができることを確信しました。

・今後も大変なお仕事ですが、頑張ってください。私も何かできることがないか考えていきます。

・持続可能な仕組みは財源と人材育成というのはどこでも同じだと思います。

・様々な取り組みを今後の参考にさせていただきます。

- ・運営資金、人材の確保の観点で、どのくらいの資金が必要になるのか？講師や依頼の中での具体的な話をもう少し聞けると良かった。
- ・『「一人のニーズ」に応えるこれが、制度設計の基本』という言葉が心にしみました。そして、持続可能なシステムを作ることに、私自身の事として考えて、また、多くの方々の経験談を参考にしていきたいです。(紹介していただいたウェブサイト等で。)
- ・アイデアだけ出し、イベント的に行うことは簡単であると思います。しかし、「学びを継続させていくためにどのようなアイデアが必要か、要素が必要か考える良い機会になりました。
- ・重度の障害があっても学びたいという気持ちを持ち続けていること、少しずつでもずっと成長していることを、チームを組んでいる大学生は、実際の現場を通して学ぶことのできる大変良いチャンスだと思いました。
- ・「一人のニーズに沿う」という成田様の言葉が響きました。全てはそこからですね。シンポジストの方々の話もとても興味深く拝聴させて頂きました。この先に向けて今何ができるか。小さな一歩でも前に進ませていきたいと思いました。
- ・12年間の学校のあと、「花開く」感動しました。お習字されている心意気は写真だけでも伝わりました。いろいろな立場の方々からの話がきけて、勉強になりました。
- ・誰もが高等教育を受けられる、という観念に感銘を受けた。
- ・保育園で勤務する中でもインクルーシブ教育の必要性、誰もが人の多様性を受容できるような学びをするべきだと考えているので、社会全体にこうした思想が広まってほしいと願う。
- ・制度づくりという点、あまり考えていなかったもので、大変重要なことがわかりました。
- ・「持続可能な仕組」への様々なやり方、生涯教育の意義、思いがうかがえたことがよかったです。今、目の前にいる私がかかわっている方々のその先が、少しだけ広がりつつあることを実感できました。
- ・それぞれの持続可能な仕組みについての話？発表？はわかったのですが、シンポジウム？(討論会)では、ないような気がしました。下川さんのお話は大変役に立ちました。
- ・日野市の取組み、保ゴ者の思いよく伝わりました。
- ・上記の内容を居住地に関わりなく利用できる良いなと思いました。
- ・大学との連携の可能性を知ることができてよかった。
- ・連携、つながること、一人ひとりの高等教育における成長を支援するために個によりそい、ニーズに応え、続けていくこと、広げていくこと、今日の時間はとても良い学びの場になった。ご登壇いただいた皆様の実践の前段階をどう充実させつなげるか、考えていきたいです。ありがとうございました。
- ・人材の確保、制度について参考になりました。
- ・先駆者な日野市の取組を市職員、保護者から聞くことでより理解が深まった。

・シンポジウムは時間が短く残念でした。もっと深ぼりしたことをお聞きしたかったです。生涯学習の課題が淘汰されて道が開けていくことを、皆で力を合わせて解決していければと思います。

・宮崎先生の講義に感銘しました。

・教育・福祉・医療と連携、仕組みへ取り組みが、皆さんの報告から、大変さと考え方、展開の仕方、勉強になりました。

・「訪問型の医療的ケア児者の生涯学習」は、人としての暮らしで必要なことなので「暮らし・生活」という視点で、各者庁など連携して総合的な仕組みで社会保障を考えられたなと思います。

・在宅訪問授業だけでなく、通所先等でオンライン実施などができると、とてもニーズがあると思う。音声入力にも力を入れてほしい。大学校のしくみにとても関心があります。

・市民講師などがたずさわってくれることで、障害者の理解が深まり、広がりへとつながるのだと感じました。

【オンライン参加者】

・午後途中での退室のため、午前中のみアンケート回答。子供の迎えがあり最後まで聞けずに残念でした。どなたも経済的な問題が大きく、予算がつかない現実がショックでした。医療の進歩でハンデを抱えながら平均寿命を全うする方が増えているのに、社会システムが遅れてはいけませんね。ですがコロナ禍でICT活用が進んで、別の次元で生涯学習が展開しているのは素晴らしいと感じました。

・現在、直面している課題とそのためのヒントを知ることができました。また、行政がしっかりかかわっている日野市の事業は、大変参考になりました。各区市町村の行政職の方が、障害者の生涯学習について、もっと理解し関心をもってもらえるように働きかける必要があることを実感しました。

・さいしょおんせいがきこえませんでした

・様々な方法で学習する機会をいつまでも奪われない環境が作れることがわかりました。

・様々な実践をされている方々のお話をお聞きすることができ、大変勉強になりました。

・午前同様、様々な取り組みに大変刺激を頂きました。

・具体的な取り組みと、課題に向けてのアイデアとお聞きすることができ、今後に向けて大変勉強になりました。

・わかりやすい内容でした。

・音声の不調で聞き取れないことがあったのと、用事をしながら拝聴していて集中して画面を見ていられなかったので・・・(こちらの事情で申し訳ありません)

・愛媛大学の取り組みを初めて知りました。通信教育で特別支援の資格を取ることができるのは素晴らしいと思います。

・愛媛大学の大学との連携はとても素晴らしい取り組みだと思いました。

・どのようにすれば学びを持続していけるのか運営上の難しさを知ることができました

- ・もう少し時間をかけてじっくりうかがいたかったです。高等教育などというものは娘には無縁、と考えていた自分の発想の貧困さを恥じました。子どもの可能性を見限ってはならないし、あらゆる機会と様々な出会いからうまれる素晴らしい「繋がり」の今後に期待します。
- ・活動が持続するために、皆さんに理解していただくために必要となる発信を学びました。
- ・医ケア児者の生涯学習に向けての課題の現状と課題がよくわかりました。
- ・午後のシンポジウムを聞き、それぞれの場所で1人の声から「大学」を創り維持存続する為に、資金や講師の確保など、現実問題を知りました。
- ・学びたい、学ばせたい気持ちがあるのに、それに協力できる環境がまだまだ整っていないことが残念です。
- ・「大学」の事をもっと多くの人に認知してもらい、これからの時代に当然ある物になって欲しいなと感じました。
- ・共に生きる社会、みんなで支えられる環境を作れるようにしたいです。
- ・学校を卒業しても、「学びたい」と常を感じるので、学びの場をもっと広げて欲しいです。
- ・私も医療側から関わっていきたいと思います。
- ・今日は多くの学びをありがとうございました。
- ・ぜひ来年も開催よろしくお願い致します。”
- ・居住地の市の取り組みが知れてよかったです。

質問5の回答

【会場参加者】

- ・普段は健常者の方を対象とした生涯学習にかかわっています。
- ・今回の研修を受け「医療的ケアが必要な重度障害者の生涯学習」の世界を知ることができました。大変意義のある活動、支援であると思いますが、本当に大変なお仕事だと思いました。多様なニーズに合った学びの展開を工夫し、日々の学習活動をされている団体運営者及び支援員の先生方に敬意を表します。
- ・本日は貴重なお話をありがとうございました。
- ・今後の具体的な成功例、失敗例〇も含めて、教えて頂きヒントにしていきたいです。
- ・会場とオンラインという画期的なフォーラムを企画して下さい、ありがとうございました。とても有意義な時間を過ごさせて頂きました。
- ・シンポジウムでは、パネリストの方々間での意見交換がきけるとよかったです。
- ・第2回、第3回と続けてください。
- ・全ての話、紹介にも温かさを感じ、自分の今後の仕事、人生にヒントを頂きました。一緒に何かやれたらと熱い思いになりました。

- ・知らなかったことが多く勉強になりました。
- ・ハイブリットのフォーラムは会場に来られない方々には参加したい思いが叶えられ、今後もハイブリットのフォーラムの開催をしていただきたいと思います
- ・入所施設への訪問型が利用できるといいと思います。
- ・福祉の場と生涯教育の場がもっと自由に利用できると良いなと思っています。行政との連携が重要だと思います。

【オンライン参加者】

・とても関心のあるテーマでした。もっと広く告知して多くの学生たちに聞いてほしい内容だと思いました(高等教育機関勤務のため)。生涯教育は万人のための教育の基本理念です。障害者の生涯教育の取り組みの具体をもっと内外に積極的に発信していくことにご協力したいと思いました。今日はありがとうございました。

・今回 ZOOM での参加にした頂きとても参加しやすくありがたかったです。まだ小さな重心な我が子ですが、卒後に通所だけではない選択肢があることがしれてよかったです。また、大学生に入っていただくことで同年代の方とのふれあい、双方向の学習につながる仕組みが素晴らしいと思いました”

・この会を開催するにあたり、ご尽力くださいました皆様に感謝いたします。

・訪問看護で多くの医ケア児→医ケア者の方に出会いますが、孤立せず社会の一員と感じながら生きて欲しいと願っております。”

・場所にしても制度にしても「ないものは作るしかない」というのを改めて再認識しました。しかし、作るの一人ではなく、親や先生や様々な機関のスタッフの方が知恵と力を出し合い、様々な取り組みをされてきたことが、ここまで形にされてきたことに、尊敬と感謝の思いを感じています。生涯学習を含め、息子が一生涯、本人らしく豊かに生きられる社会になるよう、障害児の親として、自分にできることは何かを考えながら、仲間と共に前に進みたいと思います。

・ぼくも、こういうじゅぎょうをうけてみたいとかんじました。

・参加させていただき、ありがとうございました

・元教員として、学校生活より長い卒業後の生活をいかに過ごすか、生きていくかに、課題を感じて、専門職大学院で福祉を学びキャリアコンサルタントや保護者、支援者のメンタルケアの EAP コンサルタントなど資格を取ったものの、どう活かすか、混沌としていたが、発表を聴かせていただき自分から動かなくてはいけないんだと感じた。ありがとうございました。

・岩手県の住んでおります。おもいしょうがいのある人の生涯学習の取り組みの実践が近くに全くありません。はじめの一歩として何から始めたらよいのか知りたいです。

・子どもの学校に送迎があるので、オンラインで参加できたことは大変ありがたかったです。

- ・今子供はまだ小学6年ですが、ここにいらしていた方々の尽力で卒後も学ぶ機会を得ることができる可能性が開かれている、というのがよくわかりました。
- ・私も保護者としてただ待つばかりではなく、自分たちでできることをやっていこうと改めておもいました。本日はありがとうございました。
- ・2回目以降、全国の取り組みがまた聞ける機会があることを希望します。”
- ・特別支援学校高等部卒業後の進路は、ほとんど選択肢がないという話はまわりから聞いていて、なんとかならないものか・・・と思っていたので、皆様の熱い思いやご活躍を拝聴し、とても勇気づけられました。親御さんが立ち上げられた団体もあつたので、自分（保護者）にも何かできることがあるのか、今度改めて個人的に詳しく聞けたらなあと思いました。
- ・今回はウェブで参加させていただきました。ありがとうございました。パワポの資料がよく見えて良かったのですが、お話されている方のお顔もワイプなどでけっこうですので拝見したかったです。
- ・次回の開催も期待しております。
- ・安心して運営できる仕組み作りと、共に学び合うシステムの構築を期待しています。
- ・これまでセミナーは子供の体調なども考えて（登校していてもすぐに迎えに行けるようになど…）、いきたくてもなかなか行けずにいました。今回オンラインで参加できたのでとてもよかったです。オンラインで参加できると、申し込みやすいです。今後、オンライン参加が当たり前になるといいなと思いました。
- ・二十歳の障害のある娘の保護者として参加させていただきました。
- ・医ケアはありませんが、卒後、通所と自宅のみの生活になりがちです。
- ・娘にとっての学びとは何か改めて考える機会となりました。
- ・登壇された先生方お言葉が、ともすれば介護者目線になりがちな保護者に気付きと励ましを与えてくださいました。
- ・学びは回数ではなく質、学ぶことは生きる喜び、特に心に残りました。
- ・娘は社会経験不足なので、必要な学びととらえることができました。
- ・文科省の皆様も生涯学習のサポートをしてくださるとのこと、大変心強いです。”
- ・再来年卒後、ぜひ訪問大学にと考えています。同年代の人との交流も実現できたらとても幸せです。
- ・ZOOMで参加できて本当にありがたかったです。
- ・長時間ありがとうございました。
- ・医療側では、重心と関わる事がないと、なかなか障害者の大学などに触れる事はありません。
- ・もっと医療側も学んでいけたら良いと思います。
- ・重心の研修では、「歩く医療ケア児」「18歳問題」などこれからの課題として考えています。

・福祉と医療の協力がもっとできることが課題だと思います。”

回答以上

6-6 まとめ

今回のフォーラムは初めての試みとして、リモートと参加を融合させた形であり、実際に学びを行っている東京都杉並区の重度障害者の学生も参加するなど、新型コロナウイルス禍の中でもにぎやかなフォーラムとなり、関係者が会せたのは大きな収穫であった。

各地の取組の紹介も、それぞれの個性が出ており、さらに仲間を作りたいという思いがどこの団体からも出ていたことで、各地で動きを始めようとする方々には大きな励みになったと思う。一方で財政面での悩みもそれぞれに出されたことから、共通する課題もあらためて浮き彫りになった。

これらまとまった情報は継続して集めつつ、今後の学びの拡充に向けては、フォーラムを単発で終わらせてはいけないと考えており、来年以降の継続も主催者側は約束した。

7. 訪問講義

7-1 概要

訪問講義は医療ケアの必要な重度障害者向けの学習支援を行っている東京都小平市のNPO法人地域ケアさぽーと研究所（飯野順子理事長）と一般財団法人福祉教育支援協会が運営するシャローム大学校から組織移管した「みんなの大学校」が共同で行うこととし、対象者を東京都内の4人、埼玉県1人の年間を通じた学習を記録しながら有効な学習内容・講義内容を検討することにしたが、そのうち東京都江東区の東部医療センターの女性については、新型コロナウイルスの影響により、外部への入室が禁じられたことで、この女性への講義は断念した。東京都の3人は昨年に引き続きで、今年度新たに加わったのは初めて埼玉県で講義を実施する埼玉県川越市の松本勇成さんである。

新型コロナウイルスの影響で途中、各学生の事情により面談が出来なかつたり、体調を崩すなどで予定通りにはならない中、リモート講義などで対応した。

特に佐藤友哉さんもリモート学習との組み合わせに挑戦し、岩村和斗さんもほかの学生と混じってリモートで「発達心理学」の講義に挑戦しレポートも提出した。

受講者は以下の4人であり、学習実施日は以下である。

・佐藤友哉さん（NPO法人ケアサポート研究所、担当：下川和洋）

学習実施日：7月13日、20日、27日、9月7日、14日、28日、10月5日、12日、11月4日、9日、16日、30日、12月7日、14日、1月20日、27日

・山本利恵さん（同、担当：溝井勝広、宍戸芳子）

学習実施日：7月14日、28日、8月11日、9月1日、15日、10月6日、13日、11月17日、24日、12月15日、22日

・岩村和斗さん（みんなの大学校、担当：山本登志哉、引地達也）

学習実施日：7月1日、8日、15日、22日、29日、8月5日、9月30日、10月7日、14日、21日、11月4日、11日、18日、25日、12月2日、9日、16日、23日、1月6日、13日、20日、27日

・松本勇成さん（みんなの大学校、担当：引地達也）

7月2日、8月18日、25日、9月29日、11月17日、12月1日、15日、1月26日、2月9日

7-2 詳細

佐藤友哉さん




■訪問講義及び学習報告書

受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年7月13日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会 ②Facebook ③国語②（絵本づくり）
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。 ③SNSの活用を通じてメディアリテラシー教育による情報発信力をつける。
講義及び学習内容	①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の学習内容を決める。 ②Facebook：Facebookへ「美術」で作成した作品をアップする。 ③国語②（絵本づくり）：パワーポイントを用いた電子絵本作成。
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティックセンサースイッチ（PPSスイッチ）

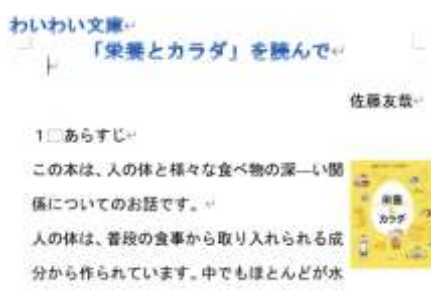
<p>受講者の学習の様子</p>	<p>①はじまりの会 ・挨拶と日付天気 ・最近の出来事：特になし ・本日の予定： Facebook、わいわい文庫、時間があれば録音 ②Facebook：絵「三毛ねこ」を載せる。 ③国語②（絵本づくり） 1）学習：合成音声を録音するための設定（ステレオミキサーの有効化）を行う。 ④終わります</p> <div data-bbox="826 266 1342 421" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>佐藤友哉 7月13日 木</p> <p>この絵は、私がペイントソフトのブラシを使い、一筆懸命に描きました！ この作品は、私が大好きな猫です。 猫の中でも今回は、三毛猫を描きました！ 私は、この絵を描く時にブラシを使い、猫の形を上手く描くのが難しかったです。</p> </div> 
<p>所見</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大により、3月から保護者面会も訪問学習もできなくなる。5月からオンライン授業を開始した。 今年になって本人のパソコンが新調され、授業で使用しているアプリを再インストールし、家族と連絡をとるために導入した Skype の再設定などは既に行っていた。しかし、パソコンの合成音声を録音するソフト「Audacity」や今年度から開始するプログラミングソフト「Scratch Desktop」のインストールや設定の仕方などは、今回全てオンラインでパソコンの画面共有を使い、説明しながらの実施となった。本人も不安感を訴えながら取り組んでいた。本日は、本人からの「合成音声の録音ができない」という訴えがあったことから、「Audacity」の設定に取り組んだ。 いずれにしても新型コロナウイルス感染症拡大前には想定していなかったことであるが、一つ一つ問題解決に取り組むことが、本人のスキル向上に役に立っていると評価している。</p>

受講者： 佐藤友哉さん

担当者： 下川和洋

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年7月20日(月)

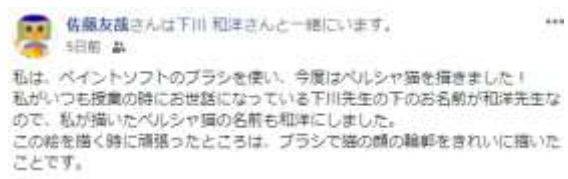
<p>講義及び学習項目</p>	<p>①はじまりの会 ②国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想）</p>
<p>本授業のねらい</p>	<p>①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。 ③SNSの活用を通じてメディアリテラシー教育による情報発信力をつける。</p>
<p>講義及び学習内容</p>	<p>①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の学習内容を決める。 ②国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想） 1）学習：①「栄養とカラダ」のあらすじと感想の添削</p>
<p>配布・活用した教材</p>	<p>①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）</p>

<p>受講者の学習の様子</p>	<p>①はじまりの会 ・挨拶と日付天気 ・最近の出来事：前回の授業で録音アプリ「Audacity」の設定を行い、実際に録音ができたと報告。 ・本日の予定：国語①、美術</p> <p>②国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想）</p> <p>1) 学習：①「栄養とカラダ」のあらすじと感想 「ねこはまいにちいそがしい」のデータを本人のパソコンに移動する。</p> <p>2) 宿題：「ねこはまいにちいそがしい」のあらすじと感想</p> <p>③終わります</p> 
<p>所見</p>	<p>国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想）では、本人が選んだ「栄養とカラダ」のあらすじと感想を発表した。本人は経鼻経管栄養による食事をしているため、通常の食材に含まれる栄養素や水分量など意識になかった部分を学べたとのこと。また、最初の感想では食べ物を口にした経験が無いと書いていたが、実際には少量口にした食材はあるので、その経験を踏まえた感想にするように伝え、次のように感想を書き換えた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>私も少しですが、口から豆乳を飲んだり、プリンやチョコレートやゼリーなどを食べたりしたことがあります。また、20歳になってからはいつも外泊の時に様々な種類のお酒を口から少し飲んでいきます！さらにこの本を読書し、私も日本人が昔から大好きなめん類にチャレンジしてみたいと思いました。</p> </div> <p>後半は、次に読む本を決定し、DropBox 共有フォルダを通じて「わいわい文庫」のデータを送り、自分でデスクトップのフォルダに移動する方法を学んでもらった。</p>

受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋
 実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年7月27日(月)

<p>講義及び学習項目</p>	<p>①はじまりの会 ②美術 テーマ「世界の猫」 ③Facebook ④音楽</p>
<p>本授業のねらい</p>	<p>①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。 ③SNSの活用を通じてメディアリテラシー教育による情報発信力をつける。</p>
<p>講義及び学習内容</p>	<p>①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の学習内容を決める。</p>

	<p>②美術 テーマ「世界の猫」の説明</p> <p>③Facebook : Facebook にアップする</p> <p>④音楽 : 自作曲の楽譜チェック</p>
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ (PPSスイッチ)
受講者の学習の様子	<p>①はじまりの会</p> <p>・本日の予定 : 美術 (猫)、音楽、国語 (絵本づくり)</p> <p>②美術 テーマ「世界の猫」</p> <p>1) 学習 : 絵「三毛ねこ」以外の猫、タイトルをつける「ペルシャ猫の和洋」</p> <p>2) 宿題 : 「ねこの全身の絵」</p> <p>③Facebook : 絵「ペルシャ猫の和洋」を載せる。</p> <p>④音楽</p> <p>1) 学習 : 「パプリカ」のコードで、主旋律作曲→調の記号や全休符を抜かしていたので、その部分を追加した。</p> <p>2) 宿題 : 新曲の曲を決めて、写譜を探す。</p> <p>⑤終わります</p>
所見	<p>猫の絵は、「ペルシャ猫」を描いたそうである。従来、オートシェイプを使って描いていたので、顔は丸という定型になってしまっていたが、ブラシを使うようになって輪郭を描けるようになった。見て形を捉えて表現する力が徐々についていくことを期待する。また、今回初めて作品にタイトルをつけた。短いフレーズで作品を表現する力をつけることにつながると思う。</p>

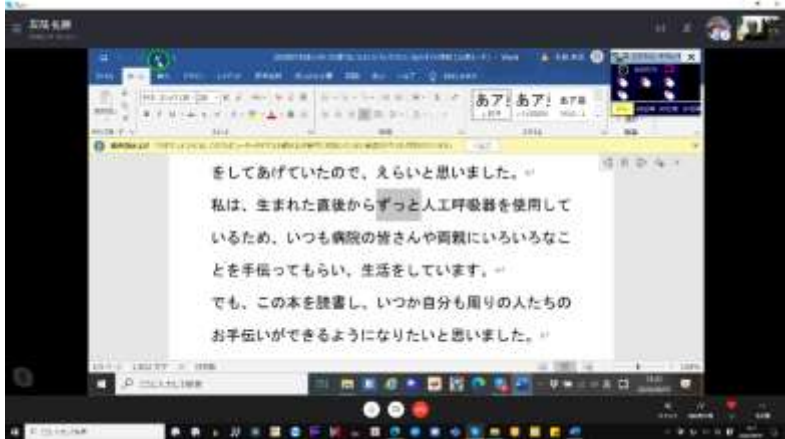


受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skype によるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年9月7日(月)

講義及び学習項目	<p>①はじまりの会</p> <p>②国語① (わいわい文庫の本選択とあらすじと感想)</p> <p>③国語② (絵本づくり)</p> <p>④美術 テーマ「世界の猫」</p>
本授業のねらい	<p>①オペレートナビのスキルを身につける (パソコン操作)。</p> <p>②作品 (絵、音楽、作文) づくりを通して、自己表現力を身につける。</p>
講義及び	①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の



学習内容	<p>学習内容を決める。</p> <p>②国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想）</p> <p>③国語②（絵本づくり）</p> <p>④美術 テーマ「世界の猫」：授業時間の関係で中止</p>
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	<p>①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事として「先週床屋があつて会議室で行い、その時に久しぶりにお父さんと15分間、面会できた。いつもなら外泊できたけど、今年はコロナでできなかった。」</p>  <p>と夏の思い出を語る。その後、本日の学習内容を決める。</p> <p>②国語①（わいわい文庫の本選択とあらすじと感想） 宿題は、本人が選んだ「命と平和につくした人の伝記：キング牧師」の図書にする。新しいデイジー図書データのコピーもできた。</p> <p>③国語②（絵本づくり） 音声ファイルを宿題で4つできていたの、パワーポイントに挿入する方法を説明。二回の説明で、一人で操作できるようになった。</p>
所見	<p>感想文の中で、「私は生まれた直後からずっと人工呼吸器をしているため、いつも病院の皆さんや両親にいろいろと手伝ってもらい、生活をしています。（略）いつか自分も周りの人たちのお手伝いができるようになりたいと思いました」という願いが特に印象的であった。両親にプレゼントするために、今後自分の年金を使う方法を学ぶ必要がある。</p>

受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

（Skype によるオンライン授業）

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年9月14日(月)

講義及び学習項目	<p>①はじまりの会</p> <p>②美術 テーマ「世界の猫」</p> <p>③Facebook：作品「アメリカンショートヘアのヒロキ」を載せる</p> <p>④音楽（時間なく中止）</p>
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。

	②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。
講義及び 学習内容	①挨拶・日付と天気の確認。 ②美術 テーマ「世界の猫」の宿題確認と更に書き加え ③Facebook：作品「アメリカンショートヘアのヒロキ」を載せる ④音楽（時間なく中止）
配布・活用した 教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセン サースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の 様子	①挨拶・日付と天気の確認：行事等特筆すべきできごとが無く、病棟 の生活は寂しい ②美術 テーマ「世界の猫」：参考にした写真と自分で書いた猫の絵 を並べるために自分で考えて、ペイントソフトのウインドサイズを 変更す   ることができ た。次に並べ た写真 と絵を比較して、同じ 部分と違う部分を説明 する。 ③Facebook：ワードで 文章（ポイント 20） を作成したのち、猫の 絵の作品と文章をアップした。次回作、「ノ ルウェージャンフォレ スト」 ④音楽：本人がえらんだ曲は、「君をのせて」 ⑤Zoom のインストールは次回
所見	写真と絵を見比べて違いは指摘できる。一方、体幹から手足がど のように出ているかについてはあまりピンときていない。自身のボ ディイメージがうまく作れていないことによるものと思われる。画 面共有しながら絵で説明したかったが、こちらからの共有画面が見 れないというので、結局そのままとなる。代わりに下川の方で改変 したものを Dropbox で送った。

受講者： 佐藤友哉さん

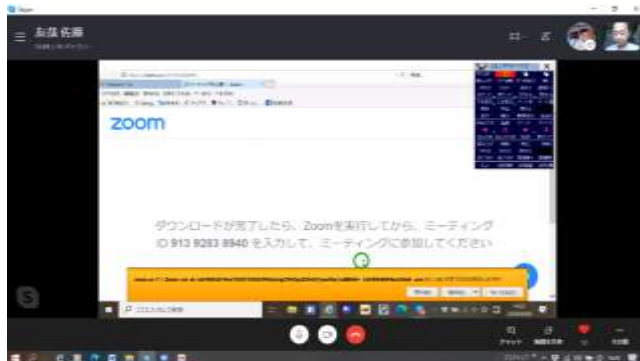
担当者： 下川和洋

（Skype によるオンライン授業）

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年9月28日(月)

講義及び学習項	①はじまりの会
---------	---------

目	②Zoom ミーティングのインストールと練習 ③音楽 新曲はジブリの「きみをのせて」
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②Zoom ミーティングの操作を身につける
講義及び 学習内容	①挨拶・日付と天気の確認。 ②Zoom ミーティングのインストールと練習 ③音楽 新曲はジブリの「きみをのせて」
配布・活用した 教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセン サースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の 様子	<p>①挨拶・日付と天気の確認：車いすに乗るのは2週間に1回ぐらいだけれど、自分で電動車いすの差操作する機会がないのが残念。</p> <p>②Zoom ミーティングのインストールと練習 Zoom のインストールをするために、Zoom ミーティングの URL を最初は DorpBox 経由でワードに記入したものを送ったが、「Ctrl+左クリック」の合わせキーをオペレートナビで入力する方法が不明だったので、次善の策としてメールで URL を送った。インストールがはじまった後、途中で止まってしまう。Skype とぶつかってしまっているかもしれないので、いったん Skype を停止してから行くと、無事につながった。</p> <p>③音楽 新曲はジブリの「きみをのせて」の楽譜を確認したので、この楽譜の写譜（Studio ftn Score EditorVer9.59）を宿題にする。</p>
所見	Zoom のインストール自体に手間取ってしまったが、その後のビデオ停止・再開や画面共有、音声ファイルの再生での確認作業などは Skype での経験があるので比較的スムーズに行えた。



受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skype によるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年10月5日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会 ②国語①「わいわい文庫」 ③音楽・ジブリ「きみをのせて」 ④Zoom ミーティングの使い方を学ぶ
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。
講義及び学習内容	①挨拶・日付と天気の確認。 ②国語①「わいわい文庫」 ③音楽・ジブリ「きみをのせて」 ④Zoom ミーティングの使い方を学ぶ
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	①挨拶・日付と天気の確認：特に発表する話題は無いとのこと ②国語①「わいわい文庫：命と平和につくした人の伝記：キング牧師」を読んで発展課題を行う。 課題①「①キング牧師の有名な言葉をインターネットで探しましょう。②I have a dream の言葉の Dream とは何か」 課題②「大坂なおみさんが優勝したことと、キング牧師の黒人差別について最近の話題をインターネットで調べてみましょう。」 課題③「キング牧師が感銘を受けたインドのガンジーさんが戦った理由を『カースト制度』を調べて考えてみよう」 「この本で学んだこと」を書き加えることを宿題にした。 ③音楽・ジブリ「きみをのせて」：音符の選択ミスのチェック。 ④Zoom ミーティングの使い方を学ぶ：ホワイトボードを使って共同で絵を描く。 
所見	偉人伝の中からキング牧師を取り上げたのは、人種差別問題についての理解と、最近話題の白人警察による黒人殺害の関係を理解しているか確認したかったが、こうした時事問題については知らないということが分かった。ネットで検索して記事や関連動画を見ることで理解を図った。 Zoom ミーティングの使い方は、本人から何が出来るかを教えて欲しいという要望で行う。学習に対する意欲がとても高い。

受講者： 佐藤友哉さん

担当者： 下川和洋

(Skype によるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年10月12日(月)

講義及び学習項目	<p>①はじまりの会 ②美術 テーマ「世界の猫」 ③Facebook ④国語② (絵本づくり)</p>
本授業のねらい	<p>①オペレートナビのスキルを身につける (パソコン操作)。 ②作品 (絵、音楽、作文) づくりを通して、自己表現力を身につける。</p>
講義及び学習内容	<p>①はじまりの会 ②美術 テーマ「世界の猫」 ③Facebook ④国語② (絵本づくり) : 長い文章を合成音声で読み上げた場合に二つのファイルを合成する方法</p>
配布・活用した教材	<p>①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ (PPSスイッチ)</p>
受講者の学習の様子	<p>①挨拶・日付と天気の確認 : 本人から3点話があった。 ①先週の金曜日 (10月9日) にご両親が病院に来て友哉君のパソコンにウィルスバスタークラウドの更新をしてくれた。その後、Facebook にログインしようとしたら新しくパスワードを入れるようにと表示された。しかし、Facebook のパスワードが分からないので、授業の中で教えてもらい、ログインしたい。 ②病棟療育活動は新型コロナの流行する前は、水曜日午後に行われていたけれど、現在、新型コロナの関係で同じ病室単位の活動になった。基本は木曜の午後だが、来週は月曜の午後になったので、来週の授業をお休みする。11月2日はお風呂日になりそうだ。 ③先週金曜日の夜に NHK「ドキュメント 72 時間」でいつも苗を購入している園芸専門店 (オザキフラワーパーク) が出ていた。番組を見ていたお母さんが岩村君ぼい人がいるのに気がついたというけど、知っていますか? 自分でも父が録画した DVD で見たけど良くわからなかったの知っていたら教えて欲しい。 ②美術 テーマ「世界の猫」: 描いた絵が写真と比較して異なる点を挙げて、修正。 ③Facebook へのアップ ④国語② (絵本づくり) : 時間の都合でできなかった。IE を Edge に変更する方法を伝える。</p> 

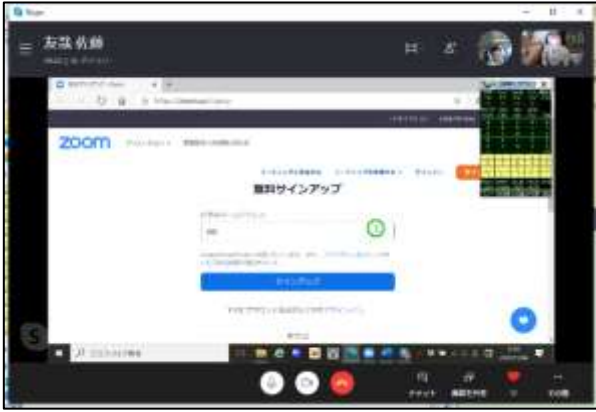
所見	伝えたいこと3点について、それぞれうまくまとめて相手に伝えようと考えて話している。事実と本人の気持ちの説明部分をもう少し分けて話せるようになると、さらに相手に伝わる話し方になる。
----	---

受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skypeによるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年11月4日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会 ②11月13日(金)フォーラムの参加の仕方について ③わいわい文庫の活用術の原稿作成について
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける(パソコン操作)。 ②作品(絵、音楽、作文)づくりを通して、自己表現力を身につける。
講義及び学習内容	①はじまりの会 ②Zoomの参加方法の練習を行う。 ③「わいわい文庫活用術」の原稿作成のための手順の説明。
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティックセンサースイッチ(PPSスイッチ)
受講者の学習の様子	①はじまりの会 新しい枕が理学療法士さんによって出来上がったので使っている。良い感じとの感想。 ②Zoomの参加方法の練習を行う。

	<p>Zoom ミーティング参加について、①ミーティング ID を記したワードデータを Dropbox で共有してそれを見る方法と、②メールで URL を伝えて参加する方法を学ぶ。①はやはり Ctrl+Enter ができないので、メールでの参加方法にする。</p> <p>これまで本人の ID を作成してこなかったため、ミーティング ID の取得を行った。Skype を使って根気強く入力していき、サインアップまで到達できた。通常の ID 獲得では上手くいかなかったため、最終的には、「Facebook でサインイン」を活用した。</p> <p>③「わいわい文庫活用術」の原稿作成のための手順の説明。実際の作成は宿題にした</p>	
<p>所見</p>		<p>伊藤忠記念財団わいわい文庫活用術 佐藤友哉</p> <p>1. コロナ禍で病棟生活がどのように変わりましたか？</p> <p>2. Skype 授業について</p> <p>①わいわい文庫の本をどのように決めていますか？</p> <p>②読む本のデータをどのように佐藤君のパソコンに移していますか？</p> <p>③Skype 授業について、良かったこと、あまり良くないことを教えてください。</p>

受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skype によるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年11月9日(月)

<p>講義及び学習項目</p>	<p>①11月13日(金)フォーラムにZoomミーティングでの参加の仕方 ②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ③国語(絵本づくり)</p>
<p>本授業のねらい</p>	<p>①オペレートナビのスキルを身につける(パソコン操作)。 ②作品(絵、音楽、作文)づくりを通して、自己表現力を身につける。</p>
<p>講義及び学習内容</p>	<p>①Zoomの使い方の練習を行う。 ②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ③国語(絵本づくり)</p>
<p>配布・活用した教材</p>	<p>①Windowsパソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ(PPSスイッチ)</p>
<p>受講者の学習の</p>	<p>①Zoomの参加方法の練習を行う。</p>

<p>様子</p>	<p>最初に Skype で音声ミュートとビデオ停止の方法を確認する。次に Skype を停止して、メールで送った Zoom ミーティングの URL を使って Zoom に切り替えて使い方を練習する。</p> <p>最初に音声とビデオの切り替えは、スムーズにできた。バーチャル背景やビデオフィルターの使い方を説明するが、本人のパソコンの性能の理由からか動作しないことが分かる。当日は友哉さんが好きなきときに入って、好きなきときに退出して良いと説明する。</p> <p>以後、共有画面を使って学習を行う。</p> <p>②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 「コロナ禍で病棟生活がどのように変わりましたか？」への回答は良く書けていた。続きは宿題。</p> <p>③国語（絵本づくり）</p> <p>1) 学習：曲と合成音声のファイルをパワーポイントに貼る。スライド 17 以降が残っていたが、18 の文章が長いので分割して録音。その後、音声ファイルを合成する方法を学んだ。</p> <p>2) 宿題：他の音声ファイルを貼り付けて完成させること。</p>
<p>所見</p>	<p>2020 年 2 月 14 日のコンファレンスの際は使い慣れている Skype で、かつ保護者が同席する中での参加であったが、今回のフォーラムは全部ひとりで行わなければ行けないので心配とのこと。本日の練習で Zoom ミーティングでの参加について自信が持てたようだ。</p>



受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skype によるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年11月16日(月)

<p>講義及び学習項目</p>	<p>①はじまりの会 ②11月13日フォーラムのお話 ③国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ④音楽 (Studio ftn Score Editor9.59)</p>
<p>本授業のねらい</p>	<p>①オペレートナビのスキルを身につける (パソコン操作)。 ②作品 (絵、音楽、作文) づくりを通して、自己表現力を身につける。</p>
<p>講義及び学習内容</p>	<p>①はじまりの会 ②11月13日フォーラムのお話 ③国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成</p>

	④音楽 (Studio ftn Score Editor9.59)
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ (PPSスイッチ)
受講者の学習の様子	<p>①はじまりの会 本日の予定を以下のように伝えてくれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月13日の13時ぐらいにZoomで「フォーラム」をのぞいたら、お昼休みだった。入浴が終わって再度見たらちょうど下川先生の話している場面で30分ぐらい見ていた。13日にどんなことを行ったか教えてほしい。 ・わいわい文庫の原稿がだいぶ進んだので見てほしい。 ・音楽は途中までできたので見てほしい。 <p>②11月13日フォーラムのお話 今回は施設の風呂時間だったので細切れでの見学のみだったが、次回は登壇したいという希望を伝えてくれた。</p> <p>③国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 コロナ禍の中で生活が一変したこと、そうした状況下でわいわい文庫での読書を続けているのをしっかりまとめていた。スカイプ授業の利点欠点をまとめるのが次の課題。</p> <p>④音楽 (Studio ftn Score Editor9.59) 天空の城ラピュタのテーマ曲「きみをのせて」の楽譜を見て、写譜を行う課題。半分ほど仕上がっていたので、その正誤チェック。</p>
所見	最初に、本日学習したい内容をしっかりとまとめて伝えることができた。宿題にしていた「わいわい文庫活用術」の原稿や楽譜の写譜、いずれも途中までではあったが、良くかけていた。

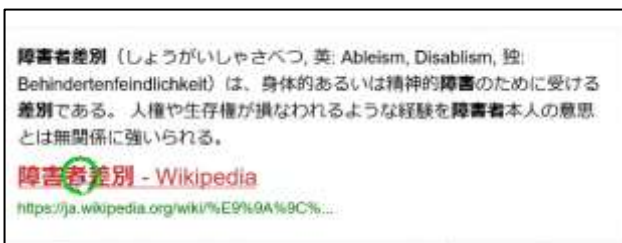


受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋
(Skypeによるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年11月30日(月)

講義及び学習項目	<p>①はじまりの会</p> <p>②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成</p> <p>③国語：「わいわい文庫」偉人伝「キング牧師」</p> <p>④美術：どの猫を描くか決める</p>
本授業のねらい	<p>①オペレートナビのスキルを身につける (パソコン操作)。</p> <p>②作品 (絵、音楽、作文) づくりを通して、自己表現力を身につける。</p>
講義及び	①はじまりの会

学習内容	②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ③国語：「わいわい文庫」偉人伝「キング牧師」 ④美術：どの猫を描くか決める
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	①はじまりの会：下川からの情報：「東京コロニー在宅パソコン講習事業」を紹介する。 ②国語：「わいわい文庫活用術」の原稿作成：ほぼ完成原稿ができた。 ③国語：「わいわい文庫」偉人伝「キング牧師」 1) 学習：「キング牧師」の物語で学んだことを加える。 ・「〇〇差別」の種類をネットで調べて書き出す。：人種差別・年齢差別・男女差別・宗教差別。逮捕歴差別・結婚差別・結婚差別・同性愛差別・障害者差別 ・障害者差別について「自分で調べたい」とネットで調べた。 2) 宿題：次の本のタイトルは、「ナイチンゲール」にする。 ④美術：どの猫を描くか調べて「スフィンクス」に決める。 写真をダウンロードして、参考写真とペイントの画面を並べる練習をした。
所見	「キング牧師」の偉人伝から、差別問題を学んでもらう。差別と言う言葉を聞いたことはあるが、何が問題で、どんな種類の差別があるのか知らないと言うので、様々な差別があることをインターネットで調べる。そうした中、障害者差別という言葉を見つけ、さらに自ら調べてみると言って調べたのには関心した。



受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

(Skypeによるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年12月7日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会 ②国語①：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ③国語②：わいわい文庫の本選択とあらすじと感想 ④国語③：絵本づくり
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。

講義及び 学習内容	①はじまりの会 ②国語①：「わいわい文庫活用術」の原稿作成 ③国語②：わいわい文庫の本選択とあらすじと感想 ④国語③：絵本づくり
配布・活用した 教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の 様子	<p>①はじまりの会：佐藤仙務氏の講演会のチラシを渡して紹介をした。同じ身体状態なので興味は持ったようだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の予定：国語（原稿作成・ナイチンゲールの感想）、合成音声音の二つのファイルをくっつける方法の学びを希望した。 <p>②国語①：「わいわい文庫活用術」の原稿作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下川の方で岩村さんと佐藤さんの原稿を合わせて、一本の原稿にして、それを確認してもらった。 ・自分で書いた物がそのまま載っていたので、原稿について了解してくれた。「原稿は良くできていたので、わいわい文庫の担当の矢部さんに送ってください」と依頼があった。 <p>③国語②：わいわい文庫の本選択とあらすじと感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に話の内容をまとめていた。 ・自分で作った作品を売って、そのお金を貯金してフランスのルーブル美術館に行ってみたい。 <p>④国語③：絵本づくり</p> <p>パワーポイントによる電子絵本を作成しているが、文章が長いために合成音声音が二つのファイルになってしまった。それをあわせて一つのファイルにする方法を学習した。</p>
所見	ナイチンゲールの偉人伝を読んで、日頃お世話になっている看護師さんへの感謝を述べていた。一方で、本人は自分で作った作品を売って、買った人に喜んでもらい、「売り上げは貯金して世界旅行をしたい」という感想は実に面白い。




受講者： 佐藤友哉さん

担当者： 下川和洋

(Skypeによるオンライン授業)

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年12月14日(月)

講義及び学習項 目	①はじまりの会 ②美術 テーマ「世界の猫」 作品「スフィンクス」 ③Facebook：絵「スフィンクス」を載せる。 ④音楽 (Studio ftn Score Editor9.59)
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける (パソコン操作)。

	②作品（絵、音楽、作文）づくりを通して、自己表現力を身につける。
講義及び学習内容	①はじまりの会 ②美術 テーマ「世界の猫」 作品「スフィンクス」 ③Facebook：絵「スフィンクス」を載せる。 ④音楽（Studio ftn Score Editor9.59）
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティックセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	①はじまりの会 「わいわい文庫活用術」の原稿入稿を伝えると、先週、Skypeを使って父母に伝えた。とても喜んでもらえたと報告。 ②美術 テーマ「世界の猫」 作品「スフィンクス」 本人が描く猫の体幹がどうしても線になるので体幹を描くようにすると、頭と胴体のサイズを考えて、手直しを行う。 【手直し前】  【手直し後】  次回作品は「ペンガル猫」 ③Facebook：絵「スフィンクス」を載せる。 本人のコメント：「私は、ペイントで猫のスフィンクスを描きました！この絵を描く時に難しかったところは、胴体や手足をバランス良く描いたところですよ。」 ④音楽（Studio ftn Score Editor9.59） 途中までの入力ではあったが、正確に入力できていた。宿題は、この続きで主旋律に加えて、コードのアルペジオを入れる。 
所見	本人の視力や色覚などには問題ないのだが、描く絵には奥行きやサイズのバランスの悪さが目立ち、頭足人（幼児画）のような作品になっている。立体で見る、触って大きさを確かめるなどの経験ができないことが影響しているようだ。

受講者： 佐藤友哉さん

担当者： 下川和洋

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年1月20日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会 ②Facebook の使い方
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（ペイントソフト使用）。 ②Facebook の SNS スキルを身につける。

講義及び学習内容	<p>①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の学習内容を決める。</p> <p>②ペイントソフトで書き初め「今年の夢」を描く。</p> <p>③Facebook の操作を学ぶ。</p>
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	<p>①はじまりの会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶と日付天気 ・最近の出来事：12/31-1/2 外泊した。大晦日はリアルタイムで紅白歌合戦を見て、パプリカやディズニーの曲、嵐の歌が印象的だった。1/1 は電車で東伏見の氷川神社に初詣。おみくじは小吉。写真は日本酒を飲んだところ。 ・本日の予定：Facebook。前のデータを新しいパソコンにコピー。書き初め「今年の夢」 <p>②Facebook：お正月外泊の記録。</p> <p>③IC レコーダーの操作アプリのインストール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページから最新のアプリをダウンロードして、インストールする一連の作業を学ぶ。 <p>④美術 テーマ「世界の猫」</p> <p>1) 学習：宿題「友哉」、書き初めのテーマは「今年の夢」で、「聖火リレー」にした。聖火リレーが外れたので、当時は外出し、近所を走る聖火リレーを見て、家で休んで病院に帰る。書いたものを Facebook にアップ。</p> <p>2) 宿題：冬にちなんだ言葉を考えて作成する。</p> <p>⑤終わります</p>
所見	「聖火リレー」は本人が選択した。見本を見せながら描いた。聖火の聖の口の字が最初は異様に大きく書かれていたが、パーツのサイズ変更で一緒に対応した。



受講者： 佐藤友哉さん 担当者： 下川和洋

実施場所 国立精神・神経医療研究センター 2階南病棟 実施日 2020年1月27日(月)

講義及び学習項目	①はじまりの会
----------	---------

	②行事：文部科学省「共に学び生きる共生社会コンファレンス」の発表打合せと練習
本授業のねらい	①オペレートナビのスキルを身につける（パソコン操作）。 ②文部科学省カンファレンスへの心構えと準備。
講義及び学習内容	①挨拶・日付と天気の確認。最近の出来事をまとめて伝える。本日の学習内容を決める。 ②文部科学省のカンファレンスの事前練習。
配布・活用した教材	①Windows パソコン、オペレートナビ、ピエゾニューマティクセンサースイッチ（PPSスイッチ）
受講者の学習の様子	<p>①はじまりの会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶と日付天気 ・最近の出来事：①先週木曜日に病棟で成人式に参加。②宿題作品を作ったがうまく開けなかった。パソコンが変わって図形編集がペイントソフトではなく別になっていたので設定を直す。 ・本日の予定：コンファレンスの打ち合わせ、音楽、時間があれば美術の作品を完成させる。 <p>②コンファレンスの打ち合わせ</p> <p>1) 当日のスケジュールの確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お風呂を出て処置後の 14:40～。 ・母が Skype を使って撮影（発表作品を起動済み状態） ・下川から訪問カレッジ概要紹介 ・本人から：自己紹介、作品紹介 ・質問：①下川質問（今年の夢）②会場からの質問 <p>2) 予行演習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の流れで予行演習 ・Skype と音楽ソフトは同時に音を出せないのが判明。当日は母のスマホで撮影していただくことに変更。 ・来週母親を交えて 15:00 から練習する。 ・当日は 13:00、母（自宅）と会場で直前の動作確認を行う。 ・宿題：本人はお話内容と画面操作の練習、母はスマホに Skype を設定。Skype が難しい場合、iPhone なので FaceTime の利用も可能。 <p>②終わります</p>



所見	本人が発表内容や作品の選定をしたり、母を交えて練習したり、主体的に取り組めた。
----	---

山本利恵さん



■訪問講義及び学習報告書

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子

実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年 7月 14日(火)

講義及び学習項目	<p>① 体への取り組み (14:00~14:20、16:00~16:20)</p> <p>② 科学 (14:20~14:50)</p> <p>③ 創作・文章表現 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~16:20</p> <p>④ 歴史学：源氏物語 (→時間が無くなり、今回はなし)</p>
本授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識し、コントロールできるようになる 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学：科学的な考え方を学ぶ。 ・創作、文章表現：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。 ・歴史学：源氏物語の登場人物と時代背景について学ぶ。(→時間が無くなり、今

	回はなし)
講義及び学習内容	<p>① 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手と足を触れて動かす。後半では骨盤付近を動かす。文章表現の学習中は凸側のお腹・背中・足・手指を触れる。</p> <p>② 科学：大気圧によって水が持ち上がることを、実験を通して学ぶ。</p> <p>③ 創作・文章表現：作品「サラダ」の評価。詞の書き方（きっちゃんの詩を詞になおす）。同窓会機関紙「なかまたち」に載せる原稿の校正。</p> <p>④ 歴史学：今回は時間が無くなり、次回へ</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学は配布物はない。大気圧により水が持ち上がることを実験を通して講義した。 ・前回に提出した作品「サラダ」「漬物」と評価表。・スライドを印刷したもの。（文章を上手に書く）
受講者の反応	<p>① 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・腕を上げていたが手を触れるとリラックスして腕を下げた。腕を動かす中で、肩甲骨を動かすことが出来た。授業中に薬指を少しだけ動かしていたら、指が少しだけ曲がるようになってきた。足をもって骨盤を動かす中で、体幹のねじれが少しだけ改善でき全体的にゆったりできた。 ・前は空気に重さがあることを学習し、今回の実験で大気の高さにより大気圧があることを理解したように思う。体の変化と天気について気づくことがあると話していた。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サラダについては「」と改行が出来ている点、人物の表現に深みが出てきた点について評価し、さらに工夫が必要な点を伝えた。作品はなるべく短くし、当初の人間関係や役割等が話が進行しても維持できるようにすること、プロットをメモにして貼り出しておくこと、などを提案した。 ・「雲」を題材にした短文を書いてあり、詩にしたいとのことで改行しながら詩のスタイルにした。「言いたいことが書いてない」と反省していた。 ・「新しい生活様式」と「ストレス」について宍戸の例を情報提供し、一緒に考えた。

	<p>ことを伝えた。</p> <p>④ 歴史学：今回は時間が無くなり、次回へ</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学は配布物はない。大気圧により水が持ち上がることをパワーポイントで復習した。 ・前回は提出した作品「漬物」「私の相棒 呼吸器と伝の心」と評価表。・スライドを印刷したもの。（「文章を上手に書く」）
受講者の反応	<p>③ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・腕を上げていたが手を触れるとリラックスできた。肩もゆったりした。お腹を触れていると、内蔵が動くのを感じた。脚を持って脚や股関節・腰を動かした。背中も動かしたいと思ったが、利恵さんが姿勢変換を望まないなので、行わなかった。 ・空気が温められると膨張し軽くなるということは理解できたと思うが、高気圧と低気圧の話は、理解できていない様子であった。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「漬物」は作り方についてよく調べて書いてある点、改行や「」が出来ている点、人物の表現に深みが出てきた点等を評価するとDVD「美味しんぼ」と「モリのアサガオ」を参考にしたとのこと。良い作品を読んだり見たりして、自分の言葉で表現することが大切と伝えると頷いていた。前回「プロットの作成」を提案したが、「テーマ」を意識しながら書けるようになってきている。 ・音楽の先生から「詩に曲をつけてみた」との連絡があったことを伝えると、とても喜んでいました。 ・加藤徹先生の詩集から「車イスのなわとび」を紹介。知っている先生なので真剣に見て聞いていた。 ・前回は続いて「新しい生活様式」と「ストレスの解消法」について、一緒に考えた。
所見	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組みでは、少しでも良いから、からだに対して取り組んできたことが自信になり、ボトックス注射の前にもリラックスしていただけるようになれば良いし、そういう取り組みをしたい。科学の授業では、空気は温度によって軽くなることを行ったが、低気圧と高気圧の話との関係については次回もっと詳しくやる必要がある。 ・「漬物」はテーマを意識しながら長い作品に仕上げた。DVDを見て作品の内容・構成を考え、今までにない良い作品になった。本人が書いた文をスライドで具体的に示し、改善が必要な点を伝えるようにしているが、「」、改行などは向上してきた。漢字変換、文節変換は課題が多い。同窓会機関紙への文章の題はすぐに自分の意見を述べ、決めることが出来た。このようなひらめきは本人独自のものです。今後の創作にも生かしていければと思う。書くことは好きで、緊張が強か

	ったが薬を飲みながら伝の心の操作をしていたとのこと。「書くことへの意欲」に寄り添いながら、さらに文章表現力の向上を目指したい。
--	---

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子
 実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年 8月 11日 (火)

講義及び学習項目	<p>⑨ 体への取り組み (14:00~14:20、16:00~16:20)</p> <p>⑩ 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50)</p> <p>⑪ 創作・文章表現 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~16:20</p> <p>⑫ 歴史学：源氏物語 (→時間が無くなり、今回はなし)</p>
本授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学：具体的なことを通して考え方を学ぶ。当面は空気について。実験は高気圧と低気圧。 ・創作、文章表現：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。 ・歴史学：源氏物語の登場人物と時代背景について学ぶ。(→時間が無くなり、今回はなし)
講義及び学習内容	<p>③ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手と足を触れて動かす。後半では脚をもって骨盤付近を動かす。文章表現の学習中は凸側のお腹・背中・足・手指を触れる。</p> <p>② 科学：温度の差による空気の流れを見る。(実験)</p> <p>③ 創作・文章表現：作品「漬物」の評価。「加藤先生の詩集を読んで」の感想文を校正。</p> <p>④ 歴史学：今回は時間が無くなり、次回へ</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学は配布物はない。パワーポイントで復習し講義した。実験は虫かごにお湯と氷を入れ、空気の流れを線香の煙で見た。 ・前回に提出した作品「漬物」と評価表。・スライドを印刷したもの。(文章を上手に書く)
受講者	<p>④ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気温が高く、文章作りを組んでいたために、脈拍の値も高かった。手を触れたらすぐにゆったりした。お腹を触れていると、内蔵が動くのを感じた。足を意識して、脚を動かし、股関節

の反応	<p>や腰を動かした。側臥位になることを希望しなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空気は、暖かいと上昇し、冷たいと下降することを理解できていた。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漬物は内容、構成、登場人物の表現に深みが出てきた点を評価し、さらに工夫が必要な点を説明した。誤入力を少なくするためには、文節入力と候補の漢字をよく見て選択することが大事であることを、前回に続いて丁寧に説明した。漢字を選ぶ際に候補の漢字をよく見れるよう「伝の心のスピードを遅く」したとの報告があった。新しい作品についてのプロットを作ってはいないが、自分で意識しながら書いているとのこと。良い作品を書くための「セルフチェックをするポイント」を提案した。 ・コロナ禍の生活と「ストレス」について、友人やヘルパーさんたちの例を出し合い、一緒に考えた。
所見	<ul style="list-style-type: none"> ・現在行っている体の取り組みが、リラックスするのも本人の学習によることを理解して欲しいが、マッサージと同じだと思っているところがある。姿勢変換も本人が希望しない。 <p>科学の授業では、高気圧と低気圧のできる理由を行ってきたので、次回はまとめを行い、理解を深めたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「漬物」は内容、構成ともに良い作品になった。漢字変換、文節変換が課題なので、改善方法について具体的に提案していく必要がある。加藤先生の詩集を読んだ感想文は、数か所の誤字入力の加除訂正のみであり、自分の意見をきちんと表現できていた。長編の創作物語を書くことが本人の生きがいになっているが、プロットを作成し、それを意識しながら書けるようになるとよい。文章表現の指導教材をどう作るかが課題である。身近な人たちの例を挙げながら、「書くことへの意欲」に寄り添い、文章表現力の向上を目指したい。今回の「加藤先生の詩集」は良い刺激となった。

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子
 実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年 9月 1日 (火)

講義及び学習項目	<p>⑬ 体への取り組み (14:00~14:20、16:00~16:20)</p> <p>⑭ 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50)</p> <p>⑮ 創作・文章表現 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~16:20</p> <p>⑯ 歴史学：源氏物語 (→時間が無くなり、今回はなし)</p>
本授業	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 <p>健康な体づくり 動きやすい体づくり</p>

の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・科学：具体的なことを通して考え方を学ぶ。空気の重さから低気圧と高気圧についてのまとめ。 ・創作、文章表現：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。 ・歴史学：源氏物語の登場人物と時代背景について学ぶ。(→時間が無くなり、今回はなし)
講義及び学習内容	<p>④ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて動かす。後半では脚をもって骨盤付近を動かす。首・顔を触れる。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・足・手指を触れる。</p> <p>② 科学：空気について、学んだことをまとめ、つながりを考える。</p> <p>③ 創作・文章表現：作品「五郎」の評価。「伝の心がフリーズした際の対処法」。</p> <p>④ 歴史学：今回は時間が無くなり、次回へ</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学は配布物はない。 ・前回に提出した作品「五郎」と評価表。・スライドを印刷したもの。(文章を上手に書く) ・「伝の心がフリーズしたら」の案内図(A4) ・DVD「大化の改新」「天地創造」を貸し出し。
受講者の反応	<p>⑤ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回(8月18日)は体調を崩して欠席であったが、手を触れた時には肩のところまでゆったりしていた。背中が緩むのを感じられた。「伝の心」を操作している時に右足がよく動くことが見られた。脚を持って、股関節や腰周りを動かす。顔や首を触れたが、触れ方が安定しないので、ゆったりする感じがわからなかった。 ・授業で取り組んできた空気のこと、気圧のこと、温めると軽くなることは理解できていた。低気圧や高気圧についてもっと説明が必要であった。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「五郎」は登場人物の名前の誤入力が減り、句読点が多すぎない点を評価し、さらに工夫が必要な点を説明した。前回説明した文節入力と候補の漢字をよく見て選択することが、徐々に改善されてきている。自分で判断して「伝の心のスピードを遅く」したのが良い結果を産んできている。「起承転結」は常に自分で意識しながら書いているとのこと。良い作品を書くためにはいろいろな作品を鑑賞することが大事であると話し、本人の希望を聞き、DVDを2枚貸し出した。 ・伝の心にトラブルが生じた際の対応について説明し、今後の自分の行動の在り方を考えた。

	<p>③ 創作・文章表現・情報：作品「五郎」の評価。「はげみ」に載った飯野Tの原稿を紹介。テレビ番組から「イムジン河」を紹介。朝鮮半島の歴史を簡単に説明。</p> <p>④ 歴史学：源氏物語「六条の御息所」</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・前回に提出した作品「五郎」と評価表。・スライドを印刷したもの。(文章を上手に書く、情報) ・「はげみ」の記事のコピー ・DVD「イムジン河」を貸し出し。
受講者の反応	<p>⑥ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・始まりからゆったりしていたので肩を動かすことができた。凸の方の背中やお腹をゆったり触れることができた。脚を持って、動かすことはできるが、首については触れるだけで、動かすところまで行っていない。 ・交感神経・副交感神経の話は、本人の体の状態がどちらが優位であったかを理解出来たと思う。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「五郎」は句読点が少なく文章がなめらかで読みやすい、里子が自立した女性として描かれている点の評価すると笑顔が出ていた。さらに工夫が必要な点として「」{} が混在、借金の額（簡単に借金はできない）、主治医の呼び名について説明した。借金のルールは知らなかったとのこと。良い作品を書くためにはいろいろな作品を鑑賞し、自分の中に蓄えることが大事であると話したが頷いていた。本人の希望を確認しDVD「イムジン河」貸し出した。伝の心のスイッチが接触不良？で注文したとのこと。
所見	<ul style="list-style-type: none"> ・前回説明ができなかったところで、低気圧と高気圧の違いを密度のことで行った。 体の取り組みでは、ゆったりしているので、預けることから動かすことを中心に行うことができた。ただし、首については、当面触れて預けることを行う必要がある。首へのこだわりは強い。姿勢を変えることについては出来ていない。時間配分が必要である。 ・「五郎」は内容、構成ともに工夫の跡が見られたが、「誤入力を減らす」ための努力に課題が残る。「イムジン河」を通して朝鮮半島の歴史を簡単に説明し「悲しくてやりきれない」の歌が生まれた背景についても触れた。韓国ドラマが好きで韓国旅行の経験があるので、関心を持って集中して聞いていた。物語を書きたい、との意欲に寄り添い、よりよい作品にするため必要な事について丁寧に具体的に説明していきたい。将来の自立生活などの相談をしたく、先日ヘルパーと市役所に行ったが、その後連絡がないとのこと。両親と生活しているので、両親か

	らの話も必要かもしれないと伝えた。本人のリクエストで母の手作りの「ヨーグルトケーキ」を食べているとのこと。レアチーズケーキに近い。
--	---

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子

実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年 10月 6日(火)

講義及び学習項目	21 体への取り組み (14:00~14:20、16:10~16:20) 22 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50) 23 創作・文章表現・情報 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~15:50 24 歴史学：源氏物語 (薫) 15:50~16:10
本授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学：具体的なことを通して考え方を学ぶ。気圧と体 (気象病) について。 ・創作、文章表現、情報：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度を学ぶ。(障害者総合支援法) ・歴史学：源氏物語の登場人物と平安時代の経済について学ぶ。
講義及び学習内容	<p>⑥ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて動かす。特に肩を動かす。後半では脚をもって股関節や腰・背中を動かす。首・顔を触れる。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・手・足を触れる。</p> <p>⑦ 科学：寒暖差や気圧の変化が体のストレスになり、気象病を起こすことについて話す。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報：作品「五郎」の総合評価。誤字入力を減らす方法を具体的に提示。将来の自立生活に向けて障害者総合支援法の概要を学び、自分のライフスタイルカルテを作成する。</p> <p>④ 歴史学：源氏物語「薫」。源氏・女三宮・柏木の関係と薫の出生。当時の女流文学者の置かれた状況と物語小説の主題が「結婚生活の破局、愛の裏切り」と言われている理由を説明。</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・前回に提出した作品「五郎」と評価表。・スライドを印刷したもの。(文章を上手に書く、障害者総合支援法、秋の植物) ・DVD「天地創造」「大化の改新」「イムジン河」を貸し出し中。
	⑦ 体の取り組みと科学

<p>本授業 の狙い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学：具体的なことを通して考え方を学ぶ。自律神経の窓口としての呼吸について。 ・創作、文章表現、情報：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度（障害者総合支援法）を学び可能なところから行動に移す方法を学ぶ。 ・歴史学、文学鑑賞：古今和歌集の成立と選者、有名な和歌について学ぶ。
<p>講義及 び学習 内容</p>	<p>⑧ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手を触れて動かす。足は膝が痛いということで触れるだけにした。後半では首・顔を触れ、頭を預けることを行う。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・手・足を触れる。</p> <p>⑨ 科学：呼吸によって、脈拍や血圧が変わることを行ったが、時間の関係で、実際に授業で実験を行うことをしなかった。呼吸については、腹式呼吸の仕方と血流について話す。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報：作品「良子」の総合評価。誤字入力を減らす方法を前回に引き続き具体的に提示。自立生活に向け障害者総合支援法の概要を学び、ライフスタイルカルテを作成する。</p> <p>④ 歴史学、文学鑑賞：時間が無くなり、古今和歌集の有名な和歌を紹介したのみ。</p>
<p>配布し た教材</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・前回に提出した作品「良子」と評価表。・スライドを印刷したもの。（文章を上手に書く、障害者総合支援法、秋の植物） ・DVD「天地創造」「大化の改新」「イムジン河」を貸し出し継続。
<p>受講者 の反応</p>	<p>⑧ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・膝が痛いということで、脚を持って動かすことはしなかったが、手や体幹についての取り組みはいつものように行った。後半の取り組みで首の弛緩と頭を預けるについては、見ることと関係するという話をした。 ・ゆったりした、深い呼吸については、呼吸器を使っている利恵さんにはできない内容であった。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「良子」の母親が徐々に自立し、良子に適した学校を選ぶ様子が描かれている点は評価した。「養護学校を嫌う母親が多い」という表現について、最近では子供の将来を考えて特別支援学校を選ぶ親が多くなり、教室が足りなくなっている現状を伝えたが、知らなかった様子である。誤入力を減らすための方法、注意点

	<p>等を再度具体的に伝えた。新しい作品「二人」の内容が以前に書いたものに酷似しているため、多くの作品を鑑賞し学ぶことの必要性を強調して伝えた。振り返ることなく、書きたいことだけを書いているようである。DVDの貸し出しの継続を希望した。</p> <p>・伝の心が新しくおなり、快調であるとのこと。障害者総合支援法の学習とライフスタイルカルテの作成には非常に意欲的であり、手帳を側に置いて待っていた。</p>
所見	<p>・ボトックス前であるが、体はゆったりしていた。ボトックス前といってもまだ1週間あるので、気持ち的にも余裕がある様子であった。首のリラックスについては、見ることと関係するので、利恵さんにとっては大切なので、時間をかけて行いたい。今回できなかった、触れることとリラックスの関係については次回行いたい。</p> <p>・誤入力が相変わらず多い。また、画面を見てその場面に合った漢字を選べるようになる事が課題。将来の生活に対する不安があるため、障害者総合支援法の制度の学習と、ライフスタイルカルテの記入には意欲的である。自分で障害者手帳を用意して待っていた。記入する項目の意味や内容の理解が十分でないところがあり、母親の援助が必要であった。</p>

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子
 実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年11月17日(火)

講義及び学習項目	<p>29 体への取り組み (14:00~14:20、16:10~16:20)</p> <p>30 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50)</p> <p>31 創作・文章表現・情報 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~15:50</p> <p>④ 歴史学：古今和歌集 16:00~16:10 (時間がたりなくなった)</p>
本授業の狙い	<p>・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり</p> <p>・科学：具体的なことを通して考え方を学ぶ。触れる・触れられる関係は自律神経に影響すること。</p> <p>・創作、文章表現、情報：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度(障害者総合支援法)を学び可能なところから行動に移す方法を学ぶ。</p> <p>・歴史学、文学鑑賞：古今和歌集の成立と選者、有名な和歌について学ぶ。</p>
	<p>⑩ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて簡単に動かす。後半では股関節や骨盤・腰を動かす</p>

<p>講義及び学習内容</p>	<p>し、首・顔を触れる。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・手・足を触れる。</p> <p>① 触れることによってリラックスするのは、本人が触れられたところを知りたいと思うことによって、筋をリラックスさせるという話をした。緊張すると分かりづらい。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報：作品「二人」の総合評価。誤字入力を減らすためには、先を急がず確実な入力が必要と伝えた。自立生活に向けた「ライフスタイルカルテ」のNo.2を作成する。</p> <p>④ 歴史学、文学鑑賞：時間が無くなり、古今和歌集の学習は次回に回した。</p>
<p>配布した教材</p>	<p>・科学の配布物はない。</p> <p>・前期単位取得証明書」「成績表」「総合単位取得表」「前期作品集」「医療的ケアが必要な重度障害者の生涯学習 理解推進パンフレット」</p>
<p>受講者の反応</p>	<p>⑨ 体の取り組みと科学</p> <p>・1ヶ月ぶりで、前回の足の痛みはなくなったようなので、いつものように触れて動かすことを行った。触れるとすぐにゆったりした。首のリラックスについては、まだ触れて預けることができていない。もっと丁寧に行う必要がある。</p> <p>・筋の緊張を弛緩するのは、触れることによってできることの話をした。触れて何かを知るとき、私たちは力を抜いて行うことは理解できたと思う。</p> <p>② 創作、文章表現、情報</p> <p>・最近の気になるニュースは「嵐」のこと。コンサートに行きたいがDVDを見て我慢する。ライフスタイルカルテの作成 (No.2) 「リスクの高い医療情報」の欄を埋めた。呼吸の状態、痰の吸引、カニューレの管理、などを報告してくれたが、それぞれの役割、何故必要なのか、等は母が説明してくれた。本人の言いたいことをヘルパーに通訳してもらいながら入力したが、時間がかかる。</p>
<p>所見</p>	<p>・1ヶ月ぶりであったが触れた感じがいつものようであった。体の学習を続けてきたので、触れるとすぐにゆったりする。ただし、首については触れてもまだゆったりできないので続ける必要がある。利恵さんにとっては、首周辺は頼りどころになっている。</p> <p>・触れることの意味については、利恵さんの体の取り組みだけではなく私自身も知りたい内容なので、今後も取り組んでいきたい。</p> <p>・前期の単位修得証明書、成績表、作品集を渡し、証明書は今回からは学長の名前になった点を伝えると笑顔で応えていた。下川Tからのメッセージは真剣に受け止めていた。作品を書く際の資料集めと学習が大事であることを伝え、</p>

	インターネットで調べる方法を具体的に示しながら「杜氏、酒、紹興酒」を検索してみた。伝の心でインターネットを使えるように家族に頼むとのこと。誤入力はまだ多い。先を急がずに確実に変換することが大事である点の認識は甘い様子。作品集と理解推進パンフレットをセンターに持って行きたいとのこと。パンフレットに写真が載っているのが嬉しいとのこと。
--	--

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子

実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年11月24日(火)

講義及び学習項目	<p>32 体への取り組み (14:00~14:20、16:10~16:20)</p> <p>33 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50)</p> <p>34 創作・文章表現・情報 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~15:50</p> <p>④ 歴史学：古今和歌集 16:00~16:10 (時間がたりなくなった)</p>
本授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学：新型コロナ感染拡大がしているので『ウイルスと免疫』について行こととした。 ・創作、文章表現、情報：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度(障害者総合支援法)を学び可能なところから行動に移す方法を学ぶ。 ・歴史学、文学鑑賞：古今和歌集の成立と選者、有名な和歌について学ぶ。
講義及び学習内容	<p>⑫ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて簡単に動かす。後半では股関節や骨盤・腰を動かし、首・顔を触れる。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・手・足を触れる。</p> <p>⑬ 『ウイルスと免疫』については、ウイルスと免疫の進化の歴史についてNHKスペシャルを元にして話をした。ウイルスの大きさについてはいかに小さいかを話した。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報：作品「二人」と「酒」の評価。資料を調べて作品を書く必要性和大事さについて説明。自立生活に向けて「ライフスタイルカルテ」を作成する。(3回目)</p> <p>④ 歴史学、文学鑑賞：時間が無くなり、古今和歌集の学習は次回に回し</p>

	た。
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・「医療的ケアが必要な重度障害者の生涯学習 理解推進パンフレット」を3部 (本人の希望) ・説明のスライドを印刷したもの、作品「二人」「酒」を印刷したもの。ライフスタイルカルテ (途中)
受講者の反応	<p>⑩ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前は1ヶ月ぶりであったが、今週は1週間ぶりの訪問で、利恵さんは伝の心で作品を仕上げたという満足感のような感じで、非常にゆったりしていた。ただし、後半の首を触れて動かすことについては、不安があるので、無理をしないで取り組むと伝えた。 ・『ウイルスと免疫』については、話をよく聞いていたので、興味があると感じた。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝日新聞の「声」欄の投稿募集を朝のメールで伝えたが、今年も投稿したいとの希望で原稿を入力してあった。大型テレビ画面の原稿を見ながら加除訂正・校正をして完成させた。ライフスタイルカルテの作成は「週の予定」「年金保険証書の番号」の欄を埋めた。母に代弁してもらうことを提案したが、自分で伝えたいとの強い意思で、ヘルパーに通訳してもらいながら欄を埋めた。
所見	<ul style="list-style-type: none"> ・前週とは違い、非常にゆったりしていた。気持ち的なことも加わっていると思うが、ゆったりした感覚が体に身につけてきたと思う。首のリラクゼーションは最近取り組み初めている。一番頼りどころでもあるので、取り組みについては不安があるので、無理をしないで取り組んでいきたい。 ・『ウイルスと免疫』については、最近いろいろな科学的な発表がなされているので、学びながら伝えるようにしていきたい。 ・作品の中に「ニトロ」を殺人の毒薬として使ったとの表現があったので確認すると、青酸カリの間違いであったとのこと。「酒」は中国と大和時代を舞台にしている。三国志、沖縄に関心があり、その時代を題材にしたかったようだが、時代背景が正しくないので年表にして示した。事前の資料集めと学習が大事であることを伝えた。誤入力がまだ多い。確実に入力するより、作品を書きたいという気持ちが先行している。朝日新聞「声」への投稿は過去に2回採用されており、今回も投稿したいとの気持ちが強く、時間を延長し、校正も意欲的に行った。

受講者： 山本 利恵 さん

担当者： 溝井勝広 宍戸芳子

講義及び学習項目	<p>35 体への取り組み(14:00~14:20、16:10~16:20)</p> <p>36 科学とは(授業を通して、科学的な考え方について行う)(14:20~14:50)</p> <p>37 創作・文章表現・情報(一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~15:50</p> <p>④ 歴史学:古今和歌集 16:00~16:10(時間がたりなくなった)</p>
本授業の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・体の取り組み:自己の体を意識することを狙う。 健康な体づくり 動きやすい体づくり ・科学:新型コロナ感染拡大がしているので『ウイルスと免疫』について行こととした。 ・創作、文章表現、情報:創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度(障害者総合支援法)を学び可能なところから行動に移す方法を学ぶ。 ・歴史学、文学鑑賞:古今和歌集の成立と選者、有名な和歌について学ぶ。
講義及び学習内容	<p>⑭ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて簡単に動かし、肩甲骨を動かすこととお腹を触れてお腹を揺する。後半では股関節や骨盤・腰を動かす。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・足を触れる。</p> <p>⑮ 前は『ウイルスと免疫』の話をしたので、その復習をしてワクチンの話をした。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報:作品「酒」の評価。1単位を認めたが、時代背景が前後しているので評価はC。それ以外は良い作品になっていると伝えた。栗山Tから「承諾書」にサインと押印をしてほしいとの依頼があった点の説明をした。「ライフスタイルカルテ」を作成する。(4回目)</p> <p>④ 歴史学、文学鑑賞:時間が無くなり、古今和歌集の学習は次回に回した。</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・説明のスライドを印刷したもの、作品「酒」を印刷したもの。栗山Tからの依頼書。ライフスタイルカルテ(途中) <p>自立生活に向けて参考になると、「こんな夜更けにバナナかよ」のDVDを貸し出した。</p>
	<p>⑪ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1ヶ月近く空いてしまったが、手を触れたときにゆったりしているのを感じた。脈拍も60台であった。体の取り組みをしていく中で50台になった。お腹については丁寧に触れるようにした。寒くなって、足が冷たいと

<p>受講者の反応</p>	<p>感じたので、足を触れることに時間をかけた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『ウイルスと免疫』については、前回の復習をしてワクチンの話をした。新型コロナのワクチンについては、興味を持って聞き、接種についての本人の考えについて話す。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 「酒」の評価がCなので残念そうであった。栗山Tからの承諾書の記入について「なんで私に？」と質問が出て、経過や内容について丁寧に説明して納得できた。ライフスタイルカルテの作成は6「日常生活の様子、配慮が必要な場面」、7「好きなこと・嫌いなこと」（嫌いなことはない、とのこと）、8「コミュニケーションの方法」の欄を埋めた。ヘルパーに通訳してもらいながら欄を埋めた。
<p>所見</p>	<ul style="list-style-type: none"> 体の取り組みでは、寒くなってきているので、循環のことを考えて肩やお腹、足を中心に行った。後半の取り組みが、時間がなくなってしまい、首を触れることができなかった。科学の時間を伸びないようにしないといけない。 新型コロナウイルスの感染拡大し、ウイルスやワクチンも利恵さんにとって興味・関心のある内容であると思うので、学びながらわかりやすいように伝えていきたい。 作品「酒」の時代背景が前後している点を、前回同様に丁寧に説明した。三国志の時代を舞台にしたいとの希望が強いので、沖縄を南の島、車を牛車、民の国を魏呉蜀のいずれかにすることを提案して納得できた。中国の歴史と日本の歴史を比較して考えるのは難しそうである。今回はクリスマス会でプレゼント交換をしたいとの希望が出たので、今年最後なので楽しく過ごすことにした。

受講者： 山本 利恵 さん 担当者： 溝井勝広 宍戸芳子

実施場所 山本利恵さん宅 実施日 2020年12月22日(火)

<p>講義及び学習項目</p>	<p>38 体への取り組み (14:00~14:20、16:10~16:20)</p> <p>39 科学とは (授業を通して、科学的な考え方について行う) (14:20~14:50)</p> <p>40 創作・文章表現・情報 (一部は体への取り組みに並行して行う) 14:50~15:50</p> <p>④ お楽しみ会</p>
<p>本授業</p>	<p>・体の取り組み：自己の体を意識することを狙う。</p> <p>健康な体づくり 動きやすい体づくり</p>

の狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・科学：今年最後の授業なので、面白い内容として目がテンの『もっと知ってほしい、科学ニュース』を取り上げた。 ・創作、文章表現、情報：創作への意欲を喚起し、文章表現の力を向上させる力を養う。自立に向けて制度（障害者総合支援法）を学び可能なところから行動に移す方法を学ぶ。 ・1年間のまとめをして次年の目標を考える。
講義及び学習内容	<p>⑩ 体の取り組みは静的弛緩誘導法による 前半では手足を触れて簡単に動かし、肩甲骨を動かすこととお腹を凸の方は狭く凹の方は広くなるように触れた。文章表現の学習中は、凸側のお腹・背中・足を触れる。</p> <p>⑪ 牛のお尻に目を書くとライオンに襲われなかったことやカエルに食べられても生きたままお尻から出てくる昆虫がいるなど。</p> <p>③ 創作・文章表現・情報：作品「犬」の評価。1単位を認め、評価はAに近いB。「ライフスタイルカルテ」を完成させる。福岡の重度障害者が自立生活を行っている新聞記事を紹介した。</p> <p>④お楽しみ会：流行語大賞を参考に一年を振り返り、川柳をつくる。プレゼント交換</p>
配布した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・科学の配布物はない。 ・説明のスライドを印刷したもの、作品「犬」「幸田（途中）」を印刷したもの。新聞記事「親亡き後 障害者挑戦」のコピー。
受講者の反応	<p>⑫ 体の取り組みと科学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お腹を丁寧に触れる中でお腹が動くのを感じた。足も温かいのを感じた。ただし、授業の後半に今年最後の授業ということで、お楽しみ会を行ったので後半の体の取り組みはできなかった。 ・おもしろい科学のことなので、楽しそうに見ていた。また、興味のあることは、自分の考えを述べていた。 <p>② 創作、文章表現、情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「犬」の評価がAに近いBと伝えると嬉しそうであった。お骨が入った箱の色「黒い」については、十字架があったなど丁寧な説明が必要と伝えると納得していた。ライフスタイルカルテの諸連絡先については母親に補助してもらった。医療や支援者等に希望することとして「人格を傷つけるような言葉や強い口調で話されると緊張が強くなり、伝えたいことが表現できなくなるので気を付けてほしい」とヘルパーに通訳してもらいながら自分の意思を欄に入れた。DVD「こんな夜更けにバナナかよ」の感想は「進行していくのに自分の信念を貫くのは凄い。できそうにない。」と。

所見	<ul style="list-style-type: none"> ・体調を崩すことなく1年間授業を行うことができた。ゆったり過ごしているし、伝の心を使っているときも以前のように力を入れなくて入力できている。今後も本人に体の取り組みの大切さを伝えていきたい。 ・科学について、今回は面白い内容で興味を持ってもらえたと思う。一つのこと分かるのに何年間も観察や実験をして、結論を導くということが分かってほしいと思う。 ・作品「犬」は内容、表現ともに良い作品になっている。誤字入力が少なくなっているのは伝の心が新しくなり、操作がスムーズになった点もあるようだ。文例の候補を選んで入力する操作方法に関心がなく、使いこなせていない。ライフスタイルカルテには自分の意思を入れることが出来た。本人の要望で「お楽しみ会」を実施。川柳を作りプレゼント交換をした。参加者5人で楽しく過ごすことができた。
----	---

岩村和斗さん



講義担当：山本登志哉・発達支援研究所所長、元早稲田大教授、みんなの大学校教授
 本講義はみんなの大学校の本講義である「発達心理学」の講義をリモートでほかの学生と一緒に受講するものであり、当初は岩村さんの自宅に引地が訪問しリモート学習をサポートしたが、途中からは父親やヘルパーの支援により、引地が同席しなくてもリモートでつながり、受講することができた。また、講義毎に最後に先生へ質問する機会では、チャット機能と読み上げの音声によって質問した。当初は先生に「どんな動物が好きですか」などの基本的な質問であったのが、途中からは講義内容からの質問に変化していった。最後はレポートを提出し、自分の学びの動機づけにも言及した。昨年に比べ、確実に学ぶ姿勢が整っているように思う。

以下が本講義のシラバスであり、この内容を予定通り受講した。

科目名 (副題)	開講年次	単位	担当者名
発達心理学		4	山本登志哉
授業概要			
人は人と一緒に生きていきます。人と一緒に生きるには、相手を理解し、協力し合う力が必要ですが、うまくいかない時にはその状態を工夫して乗り切る力も必要です。その力の基礎は進化の中で作られ、体の仕組みに遺伝として備わっています。さらに生まれた後、周りに働きかけ、また周りの人から働きかけられて人間の「心の仕組み」が育っていきます。また困難を乗り越える力は、みんなで手探りしながら作られていきます。そんなコミュニケーションの力の育ちを中心に、人の発達の過程を考えてみましょう。			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・生物としてのヒトはどのように社会性を持つ人になっていくのかを知る ・人はどのように他人と理解しあい、関係を調整しあっていくようになるのかを知る ・発達の道筋は一つではないことを知り、文化・歴史・障がい特性の違いと発達の関係を考える 			
授業方法			
毎回テーマを設定し、最初にそれについて説明した後、皆さんの経験や意見を聞きながら、理解を深めていきます。			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%			
教科書・教材・参考文献 等			
パワーポイント提示。必要なものは授業前日までにデータで送付			
質問への対応			
歓迎します。			
授業経過 (授業日程に若干の変更)			
項 目	内 容		
1	人が変化するという事	場面による変化、年齢による変化、時代による変化、文化による変化の例を考えてみる。	
2	変化の仕組み 1 : 進化	人間の「発達」は動物の進化の中で準備されました。動物行動学などから進化について考えてみます。	
3	人の変化 1 : 遺伝	進化は「遺伝」の仕組みで起こります。私たちの行動の土台にある遺伝的行動を見てみます。	
4	変化の仕組み 2 : 学習	人の行動や心理は経験を通して変化します。経験が変化を生む学習の仕組みを説明します。	
5	人の変化 2 : 経験	経験は人をどんなふうに変えるのでしょうか。学習によって変化する人間の行動や心理を考えてみます。	
6	変化の仕組み 3 : 発達	人は経験さえ積めば変化するとは限りません。学習を成り立たせる仕組み自体の変化について説明します。	
7	人の変化 3 : 発達段階	発達心理学で問題にされてきた発達段階のいくつかを考えてみます。	
8	身体の発達	特に子ども時代は人間の発達の基礎に身体運動の発達があります。その様子を見てみます。	
9	言葉の発達	人間の特徴は言葉を話すということです。人はどのように言葉を話せるようになるのかを説明します。	
10	社会性の発達	協力し合い、衝突・対立を調整しあって人は生きています。その基本的仕組みがどうできるのかを説明します。	
11	文化による発達の違い	発達はいつでもどこでも同じ道をたどるわけではありません。文化によってどう違うのかを見てみます。	

12	時代による発達の違い	時代によっても子育ての様子は違い、求められる発達の姿も変わっていきます。その変化をみてみます。
13	障がい特性による発達の違い	発達の道筋は障がい特性によっても異なります。定型発達者の道筋とは少し違う道筋をみてみます。
14	私の発達	自己意識を持つのも人間の特徴です。自己肯定感の有無は人の幸せに大きく関係します。その意味を考えます。
15	変わるものと変わらないもの	人は常に変化しながら生きています。けれども同時に「同じ人」として生きています。発達の中で変わる自分、変わらない自分について考えてみます。
履修者へのコメント		
発達心理学も時代によって発達しています。これからの発達心理学は一人一人の人が主観的に感じる「意味」の世界を深め、共有する仕組みを理解することが課題になるでしょう。受講者一人一人が自分のこれまでの発達の道筋を振り返ってみるきっかけになるといいと思います。		

15回の学習で岩村さんが書き山本教授に提出したレポートは以下であった。

レスポデント反射とオペラント反射

私の発達について書きます。時計の勉強で覚えた件。歴史の勉強で覚えた件。世界の国の勉強で覚えた件。オペラント反射学習だったと思います。引地先生に褒められると思ったから勉強したから、オペラント学習をした。これからはやりたいことは自分で決めて勉強をしたいです。岩村和斗

本講義はリモート学習の可能性を知る上で非常に有効であり、来期も継続して取り組んでいきたい。



松本勇成さん

全 10 回の講義内容

第一回以外は埼玉県川越市の自宅で講義。訪問ヘルパーの熊谷瞳さん（元特別支援学校教諭で松本さんの担任）、母親も同席し共に学ぶスタイルである。

	テーマ	内容
1	オリエンテーション	かるがもにて看護師らにあいさつ、今世の中で起こっていることを話し、学びの可能性について講義
2	世界の国について	世界地図を目の前に広げて、世界がどうなっているか、どんな国があるかを講義
3	世界の国について	世界地図を目の前に広げて、アジアの国について講義
4	ハッピーバースデー	誕生日をお祝いし、誕生日に関する話題で講義を展開
5	世界の国について	世界地図を目の前に広げて、アメリカやヨーロッパの国について講義
6	コミュニケーション	コミュニケーションとは何かという話題から、コミュニケーションに関するクイズで理解を促す
7	メリークリスマス	クリスマスに合わせてクリスマスという文化について講義
8	ことばで遊ぶ	カードを母親やヘルパーさんに引いてもらって「あ」から始まる「たのしい言葉」などで、言葉を考え、言葉のバリエーションを広げる
9	ことばを作る	詩を作ることを目標にして、いろいろな簡単な言葉を用意し、その言葉を口にしながら、そこから広がるイメージを話していく
10	ことばを作る	詩を作ることを目標にして、いろいろな簡単な言葉を用意し、その言葉を口にしながら、そこから広がるイメージを話していく

松本さんにとっては初めての 18 歳以降の学びであり、視力もなく、コミュニケーションツールもほぼない中で、訪問サービスのぼぶりの熊谷瞳さんが元来、松本君が通った特別支援学校の教諭だったことから、熊谷さんが松本君の支援に「学び」という視点で模索し、引地と結びついた経緯がある。

そのため引地の講義の際には常に熊谷さんと母親と一緒におり、コミュニケーションを縦横無尽にしながら話す内容を松本君の頭に入れてもらって、言葉をイメージする方向で

講義を進めた。最初はオリエンテーションから始まり、世界の国やアジアの国の話をし、最終的には様々な言葉の反応を見ながら、言葉を紡いでいき、詩を作る基本を後期の終盤に行い、来期から詩を書くことを目標にした。以下は2020年のまとめとして、ヘルパーが作成した「新聞」である。



7-3 まとめ

今回モデルになった4人はそれぞれ強い学びへの思い（1人は家族と周囲）があり、担当者もそれに応えるために自分の時間を捻出し対応している状況である。コロナ禍にあって、交流ができなくなることで情報弱者となり、結果的に弱者になってしまう重度障害者が日ごろから誰かとつながる、もしくはつながるツールを持っていることは学びに向けた必須の環境整備である。そしてその学びは昨年らそれぞれ進歩している。

佐藤友哉さんは報告書の通りアウトプットの量が増えた。また山本利恵さんも学習の幅が広がり、やりたいことの意味表示は活発なので、まだまだ学びで得るものは多いと感じさせる。岩村和斗さんは完全なウェブによるリモート授業で双方性を実現させてので、今後の学びの展開も楽しみになってきた。松本勇成さんの詩づくり、歌作りは地域とつながるよいきっかけとしても期待できそうだ。

8. 共生社会コンファレンス

8-1 開催プロセス

共生社会コンファレンスの開催は文部科学省と一般財団法人福祉教育支援協会が協働で方針を確認し、実行委員会の意見をうかがいながら企画を構成していった。当初は明治大学駿河台キャンパス内で開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響で大学での催しの開催が困難となり、急遽東京都内の会場を探した結果、東京都国分寺市の本多公民館を会場にすることでまとまった。しかしながら、本多公民館の構造等の問題で新型コロナウイルスの感染リスクを回避するための措置などの問題から、当初予定していた会場への参加とオンラインの参加を同時に行うハイブリット型は難しいと判断し、登壇者だけが会場に集合し、参加者はオンラインでつながる形式とした。しかしながら2021年1月8日に東京都には緊急事態宣言が出されたことから、会場に集まることも極力避けながらの対応となった。

実行委員会のメンバーは以下であり、事前協議の後、8月28日を第一回目の委員会を開催し、1月27日まで開催した。また会場との話し合いとリハーサルも実施された。

(1) 実行委員会メンバー

小林繁（明治大学教授）

平井威（明星大学客員教授）

三浦修平（世田谷区教育委員会社会教育主事）

谷岡重則（社会教育推進全国協議会）

岡田麻矢（豊島区教育委員会社会教育主事）

兼松忠雄（全国喫茶コーナー交流会事務局長）

文科省

井口啓太郎（障害者生涯学習推進室）

鈴木孝志（障害者生涯学習推進室）

事務局

引地達也（一般財団法人福祉教育支援協会）

(2) 実行委員会及び事前準備

事前協議 2020年7月30日 明治大学駿河台キャンパス

事前協議 2020年8月24日 文科省障害者生涯学習推進室打合せスペース

第一回 2020年10月9日 文科省同

（10月21日本多公民館視察）

第二回 2020年11月10日 文科省同

（12月14日本多公民館環境の確認）

第三回 2021年1月12日 文科省同

(1月16日前日リハーサル)

8-2 広報と受付

実行委員会での協議を経て、メインテーマのタイトルや分科会の内容、全体のプログラム構成を決めていった。概要は以下である。新型コロナウイルスの影響で集合型にするのか、リモート開催にするかの判断は開催前の1か月前程からリモートに向けた準備を進めていき、受付もホームページから申込のフォーマットで受け付けた。

開催概要（当日のメインPPT）は以下である。

オープニング

全体司会：岡田麻矢

特別区社会教育主事会 会長／豊島区 社会教育主事

主催者あいさつ＜障害者の生涯学習の推進に向けて＞

小林美保

文部科学省 総合教育政策局

男女共同参画共生社会学習・安全課

障害者学習支援推進室長

基調講演

＜君と同じ街に生きて－インクルーシブな学びへ＞

小林繁・明治大学 教授

専門は社会教育でノーマライゼーションの視点から障害をもつ人の学習文化活動や障害をもつ人が働く喫茶コーナーの取組に長く関わる

全国障がい者生涯学習支援研究会副会長や障害をもつ人が働く全国喫茶コーナー交流会の代表などをつとめている

主な編著書に『学びのトポス／社会教育計画論』（クレイン、2000年）、『現代社会教育／生涯学習と社会教育職員』（クレイン、2008年）、『障害をもつ人の学習権保障とノーマライゼーションの課題』（れんが書房新社、2010年）、『地域福祉と生涯学習／学習が福祉をつくる』（現代書館、2012年）など

レクチャー

コロナ禍におけるオンラインの学びの可能性ーコロナ禍での障がい者のリモートの「学び」実践と工夫

引地達也・みんなの大学校学長

研究テーマは「ケアとメディアを融合するケアメディアの確立」「メディア倫理」「障がい者のメディア教育」「18歳以降の障がい者の学びの場づくりの実践」「コミュニケーション改善に向けたカリキュラム開発」
著書に『ケアメディア論』（ラグーナ出版、2020年）

分科会紹介

- 分科会 1 障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～**
齋藤尚久・杉並区教育委員会事務局生涯学習推進課 社会教育主事
- 分科会 2 知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割**
平井威・明星大学 客員教授
- 分科会 3 カフェを介した「共生の学び」の実践**
兼松忠雄・明治大学講師、全国喫茶コーナー交流会 事務局長
- 分科会 4 当事者の言葉からデザインする新しい学び**
ー「学ぶ」を体感する学生シンポジウム
引地達也・みんなの大学校 学長

分科会 1 障害者青年学級の学び ～東京都特別区の事例から～

齋藤尚久・杉並区教育委員会事務局生涯学習推進課社会教育主事

登壇者

小林繁氏（明治大学 教授）

谷岡重則氏（社会教育推進全国協議会）

森下富美代氏（目黒区教育委員会事務局 生涯学習課 社会教育主事）

石川稔氏（渋谷区知的障害者教室 コーディネーター）

分科会 2 知的制約のある人々の 生涯学習支援に果たす大学の役割

平井威・明星大学客員教授

登壇者

菅野敦氏（オープンカレッジ東京／
一般社団法人生涯発達リサーチ・サポートセンター）

山元薫氏（静岡大学）

打浪文子氏（淑徳大学短期大学部）

樋田幸恵氏（淑徳大学短期大学部）

分科会 3 カフェを介した『共生の学び』の実践

兼松忠雄・明治大学講師、全国喫茶コーナー交流会事務局長

登壇者

根本尚之氏（西東京市障がい者福祉をすすめる会 代表）

諏訪肇氏（東京都立志村学園 統括校長）

矢野善教氏（作新学院大学女子短期大学部）

分科会4 当事者の言葉からデザインする新しい学び —『学ぶ』を体感する学生シンポジウム

引地達也・みんなの大学校学長

ここでは学びの中にいる当事者・学生が主役です！

登壇者

水越真哉（みんなの大学校）

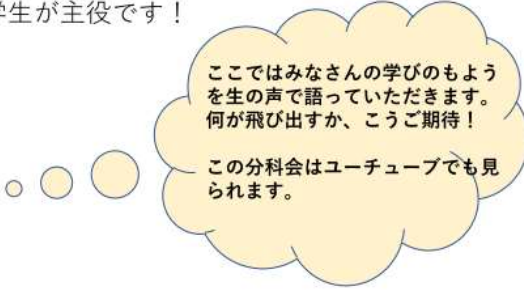
福原龍生（シャンティつくば）

まなちゃん（モアタイムねりま）

高橋美奈代（モアタイムねりま）

飯嶋賢太郎（i-LDK）

原田奈津紀（i-LDK）



ここではみなさんの学びのもよう
を生の声で語っていただきます。
何が飛び出すか、どうぞ期待！

この分科会はYouTubeでも見
られます。

分科会報告

- 分科会1 障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～
齋藤尚久・杉並区教育委員会事務局生涯学習推進課 社会教育主事
- 分科会2 知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割
平井威・明星大学 客員教授
- 分科会3 カフェを介した『共生の学び』の実践
兼松忠雄・明治大学講師、全国喫茶コーナー交流会 事務局長
- 分科会4 当事者の言葉からデザインする新しい学び
—『学ぶ』を体感する学生シンポジウム
引地達也・みんなの大学校 学長

総括

小林繁・明治大学 教授

令和2年度 文部科学省事業

共に学び、生きる共生社会 コンファレンス

IN
関東甲信越ブロック

～地域で共生の生涯学習を展開するために～

2021/1/17(日)10～16時

<WEB会議システム「ZOOM」によるオンライン開催>

開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めている（24条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要がある。こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。

第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の生涯にわたる学びの場の拡大）。

参加対象

障害者本人、学びの支援者・関係者、障害者の学びに関心のある人等、都道府県・市町村職員（障害者学習支援担当、生涯学習、教育、スポーツ、文化・芸術、福祉、労働等）、社会教育主事、公民館・図書館・博物館職員、特別支援学校等教職員、教職員経験者、障害者の学習支援実践者（NPO等）、大学関係者、福祉サービス事業所職員、社会福祉協議会職員等

<当コンファレンスサイト URL><https://www.kyoseishakai-conference.com/2020>

お申込みは上記サイトの関東甲信越ブロック、特設サイトからお願いいたします。

「共生社会コンファレンス 2020」で検索



※申込み締切：1月15日（金）18時

<主催>一般財団法人福祉教育支援協会、文部科学省
<協力>特別区社会教育主事会、全国喫茶コーナー交流会、国分寺市教育委員会
<お問合せ先>一般財団法人福祉教育支援協会
メール：conf@wess.or.jp（コンファレンス<関東甲信越ブロック>専用） / URL：http://wess.or.jp/

■10:20-11:20

基調講演<君と同じ街に生きてーインクルーシヴな学びへ>

講演者:小林繁氏(明治大学 教授)

■11:30-12:10

レクチャー<コロナ禍におけるオンラインの学びの可能性 ーコロナ禍での障がい者のリモートの「学び」実践と工夫>

講師:引地達也氏(みんなの大学校 学長)

■12:10-12:30

各分科会紹介<各コーディネーターが説明>

■13:30-15:30

分科会



※昨年度の当コンファレンスの開催風景

1. 障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～

東京都特別区では昭和30年代後半から、学校を卒業した障害者の学びの場として、障害者青年学級が開設されてきました。本分科会では、目黒区と渋谷区の事例報告から、障害者青年学級における知的障害者への学習支援について学び、これから障害者の学びの場をつくりたいと考えている方への一助とします。

●コーディネーター:齋藤尚久氏(杉並区教育委員会事務局 生涯学習推進課 社会教育主事)

2. 知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割

これまでの大学における障害者生涯学習支援の歴史を振り返り、そこに流れていた思想とノウハウを明らかにします。現時点での大学における取組の現状を分析し今後の発展に生かせる諸条件を探ります。この上で、知的制約のある人々の学習ニーズにもとづく生涯学習支援に果たす大学の役割のいくつかを提案したいと思います。

●コーディネーター:平井威氏(明星大学 客員教授)

3. カフェを介した「共生の学び」の実践

埼玉県川口市のめだかふぁみりいは、1983年から、スポーツクラブの活動からスタート。その後、作業所「すいーつばたけ」を立ち上げ、おもちゃ図書館やカルチャースクールなど、地域の人も参加できる余暇活動を展開してきました。東京都立志村学園の Café de NOVICE。生徒が実習として取り組むこのお店は、地域の市民講師の指導の下、地域に開かれたお店として、様々な取り組みを展開しています。二つの事例から地域の中で、障害者も他の人にとっても心地よい社会のあり方について学びます。

●コーディネーター:兼松忠雄氏(明治大学 講師・全国喫茶コーナー交流会 事務局長)

4. 当事者の言葉からデザインする新しい学びー「学ぶ」を体感する学生シンポジウム

18歳以降の青年期の学びを中心に各地で展開する「通所」「通学」型の学びを行う学生らが日々の学びや、その学びを選ぶまでの過程を紹介しながら、学びに対する思いを発言し、これからを考える当事者中心の分科会。当事者の言葉から、学びの意味と未来の学びを考えていきます。

●コーディネーター:引地達也氏(みんなの大学校 学長)

■15:30-16:00

クロージングセッション

総括:小林繁氏(明治大学 教授)

8-3 プログラム構成及び内容

実行委員会での協議を経て、以下のプログラムが確定された。開催された概要は以下である。

(1) テーマと趣旨

共に学び、生きる共生社会コンファレンス IN 関東甲信越

～地域で共生の生涯学習を展開するために～

■開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めている（24条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要がある。

こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。

第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の学びの場の拡大）。

■実施体制

主催：文部科学省、一般財団法人福祉教育支援協会

共催：特別区社会教育主事会、全国喫茶コーナー交流会、国分寺市教育委員会

運営事務局：一般財団法人福祉教育支援協会

■会場

東京都国分寺市本多公民館（ホール及び講習室等）

参加者想定：ズームを使ったウェブ開催のために公民館には関係者 20 名程度、ウェブでの参加者は 160 名)

(2) プログラム内容

開催当日に配布したプログラムは以下である。

令和2年度 文部科学省事業

共に学び、生きる共生社会 コンファレンス

IN
関東甲信越ブロック

～地域で共生の生涯学習を展開するために～

プログラム

2021/1/17(日)10～16時
＜WEB会議システム「ZOOM」によるオンライン開催＞

＜当コンファレンスサイト URL＞
<https://www.kyoseishakai-conference.com/2020>

「共生社会コンファレンス 2020」で検索 

＜主催＞
一般財団法人福祉教育支援協会、文部科学省

＜協力＞
特別区社会教育主事会、全国喫茶コーナー交流会

開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めている（24 条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要がある。こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。

第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の生涯にわたる学びの場の拡大）。

参加対象

障害者本人、学びの支援者・関係者、障害者の学びに関心のある人等、都道府県・市町村職員（障害者学習支援担当、生涯学習、教育、スポーツ、文化・芸術、福祉、労働等）、社会教育主事、公民館・図書館・博物館職員、特別支援学校等教職員、教職員経験者、障害者の学習支援実践者（NPO 等）、大学関係者、福祉サービス事業所職員、社会福祉協議会職員等

タイムスケジュール

■10:00-10:20

オープニング・主催者あいさつ＜障害者の生涯学習の推進に向けて＞

■10:20-11:20

基調講演＜君と同じ街に生きて－インクルーシブな学びへ＞

講演者：小林繁氏（明治大学 教授）



小林繁氏

■11:30-12:10

レクチャー＜コロナ禍におけるオンラインの学びの可能性
－コロナ禍での障がい者のリモートの「学び」実践と工夫＞

講師：引地運也氏（みんなの大学校 学長）

■12:10-12:30

各分科会紹介＜各コーディネーターが説明＞

コーディネーター：引地運也氏（みんなの大学校 学長）

・齋藤尚久氏（杉並区教育委員会事務局 生涯学習推進課 社会教育主事）

・平井威氏（明星大学 客員教授）

・兼松忠雄氏（明治大学 講師・全国喫茶コーナー交流会 事務局長）

<12:30-13:30 昼休憩>

■13:30-15:30

分科会

■15:30-16:00

クロージングセッション

総括：小林繁氏（明治大学 教授）

各分科会のご紹介

■分科会 1

障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～

◆分科会概要

東京都特別区では昭和 30 年代後半から、学校を卒業した障害者の学びの場として、障害者青年学級が開設されてきました。本分科会では、目黒区と渋谷区の事例報告から、障害者青年学級における知的障害者への学習支援について学び、これから障害者の学びの場をつくりたいと考えている方への一助とします。

◆コーディネーター：齋藤尚久氏（杉並区教育委員会事務局 生涯学習推進課 社会教育主事）

<略歴>杉並区の社会教育主事として「障害者青年学級等担当者情報交換会」の立ち上げに携わっている。

◆登壇者：小林繁氏（明治大学 教授）
谷岡重則氏（社会教育推進全国協議会）
森下富美代氏（目黒区教育委員会事務局 生涯学習課 社会教育主事）
石川稔氏（渋谷区障害者知的障害者教室 コーディネーター）

■分科会 2

知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割

◆分科会概要

冒頭司会から、これまでの大学における障害者生涯学習支援の歴史を振り返り、そこに流れていた思想とノウハウを示します。その後、3 大学 4 名の以下の事例発表をもとに、知的制約のある人々の学習ニーズにもとづく生涯学習支援に果たす大学の役割を考えます。

1. 成人知的障害者の「考える技」（科学的思考力と実生活応用力）を育てる—菅野敦氏
2. 当事者のニーズを開拓し学生と共に学ぶ体験—打浪文子氏、樋田幸恵氏
3. 特別支援教育地域ネットワークとの連携とコロナ禍においても取り組む工夫—山元薫氏

フロアの皆さんの意見交換も含めて、大学における取組の発展に生かせる諸条件を探りたいと思います。

◆コーディネーター：平井威氏（明星大学 客員教授）

<略歴>教員養成に携わる傍ら、障害のある人の地域生活と生涯学習支援に関する実践・研究に従事。全国障害者生涯学習支援研究会副会長



平井威氏

◆登壇者：菅野敦氏（オープンカレッジ東京／一般社団法人生涯発達リサーチ・サポートセンター）
山元薫氏（静岡大学）
打浪文子氏（淑徳大学短期大学部）
樋田幸恵氏（淑徳大学短期大学部）

■分科会3

カフェを介した「共生の学び」の実践

◆分科会概要

東京・西東京市の「障がい者福祉を進める会」は、市内の障がい者団体が障がい者理解を進める活動の一環として、公民館の中に1987年「ふれあい」をオープン。公民館だけでなく地域でのイベントに協力してコーヒーをサービスしています。東京都立志村学園のCafé de NOVICEは生徒が実習として取り組むお店で、地域の市民講師の指導の下、地域に開かれたお店として、様々な取り組みを展開しています。二つの事例から地域の中で、障害者も他の人にとっても心地よい社会のあり方について学びます。

◆コーディネーター：兼松忠雄氏（明治大学 講師・全国喫茶コーナー交流会 事務局長）

<略歴>自治体職員として41年、主に社会教育、子ども支援等に従事。現在は、障害者が働く「喫茶コーナー」の広がりを通じた、共生社会の実現に向けて活動。明治大学講師。



兼松忠雄氏

◆登壇者：根本尚之氏（西東京市障がい者福祉をすすめる会 代表）
諏訪肇氏（東京都立志村学園 統括校長）
矢野善教氏（作新学院大学女子短期大学部）

■分科会4

当事者の言葉からデザインする新しい学びー「学ぶ」を体感する学生シンポジウム

◆分科会概要

「学校卒業後も地域の中で自分らしく生きていきたい」そんな声にこたえるように、全国各地で多様な「学びの場」が創出されています。今回は、東京都練馬区、同国分寺市、茨城県つくば市の学びの場を舞台に、そんな「学びの場」に出会い「学び」とともにある当事者が、自分たちの思いをありのままに語るシンポジウムを企画しました。学びに出会うまでの自分、学んでいる今の自分、そして学びが拓く未来の自分・・・いろいろな自分を対比させながら、当事者が「自分と学び」について率直な思いを語ります。自分が学んでいること、自分が変わったな～と思うこと、これからこんなことを学んでみたい！など、「学び」を得た彼ら（当事者）が、何を感じ、何を考えているのかがわかる貴重な機会＝学びの場です。これからデザインしていくべき新しい「学び」とはなにか、当事者の言葉から学び、ともに考えていきましょう。ぜひ、ご参加ください！

◆登壇者：水越真哉氏（みんなの大学校）
福原龍生氏（シャンティつくば）
まなちゃん・高橋美奈代氏（モアタイムねりま）
飯嶋賢太郎氏・原田奈津紀氏（i-LDK）

◎この分科会はユーチューブでも同時に見ることができます。
URLはこちらです→<https://youtu.be/YTjynDUM8Cc>

8-4 参加者概要とアンケート結果

参加者は以下であった。

	申込人数	参加人数
全体会 ・ 基調講演 ・ レクチャー ・ 分科会説明	÷	130
第一分科会	29	39
第二分科会	17	25
第三分科会	34	32
第四分科会	36	31 + Youtube28
クロージングセッション	÷	90
希望なし	6	÷
不明	27	÷
合計	149	165人以上

アンケート結果

所属

項目	人数	構成比
学校（生徒除く）	8	14.3%
大学（学生除く）	2	3.6%
公民館等（類似施設含む）	7	12.5%
図書館・博物館・青少年施設等	1	1.8%
スポーツ施設・文化芸術施設等		0.0%
行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）	10	17.9%
行政（学校教育・関係機関含む）		0.0%
行政（保健・福祉・労働・関係機関含む）	2	3.6%
行政（その他部局）		0.0%
社会福祉協議会	1	1.8%
障害福祉サービス等事業所	6	10.7%
社会教育関係団体（スポーツ・文化芸術団体等含む）		0.0%
当事者等団体（保護者の会等含む）	4	7.1%
当事者（所属なし）	1	1.8%
保護者（所属なし）	1	1.8%

その他	13	23.2%
総計	56	100.0%

あなたは、どのような立場で障害者の生涯学習活動に関わっていますか？

項目	人数	構成比
仕事として	29	51.8%
ボランティアとして	12	21.4%
参加者として	4	7.1%
これまで関わったことがない	11	19.6%
総計	56	100.0%

本コンファレンスは全体を通じて、今後障害者の生涯学習活動に取り組むにあたり、参考になる内容でしたか？

大変参考になった	29	51.8%
参考になった	26	46.4%
あまり参考にならなかった	1	1.8%
参考にならなかった		0.0%
総計	56	100.0%

アンケート内容

- 1 ご所属
- 2 あなたは、どのような立場で障害者の生涯学習活動に関わっていますか？
- 3 本コンファレンスは全体を通じて、今後障害者の生涯学習活動に取り組むにあたり、参考になる内容でしたか？
- 4 参加されたプログラムについて、感想やご意見をお聞かせください（自由記述）
- 5 オンライン配信について、感想やご意見をお聞かせください（自由記述）
- 6 その他のプログラムについて、また全体を通じてお気づきになったことがあれば、お聞かせください（自由記述）
- 7 今後、本フォーラム（共生社会コンファレンス）で、取り上げて欲しいテーマ・課題をお聞かせください（自由記述）
- 8 障害者の生涯学習の推進・学びの場づくりなどについて、今後、必要なことは何だと思えますか？（自由記述）

1	1 その他
	2 仕事として

	<p>3 大変参考になった</p> <p>4 ①②③⑦⑧</p> <p>基調講演はこの問題のポイントが分かりやすかった。分科会4は参加する当事者の交流の様子が良かった。</p> <p>5 参加しやすいので、コロナ後もかつようしてほしい。ハイブリッドでもよい。</p> <p>6 ネット回線が細いところだったのか、その点は残念です。</p> <p>7 障がい者の学びについて、周的正統参加(LPP)の議論など、社会の中で生きていく「場所づくり」やアイデンティティー形成の視点からの議論も必要な気がします。</p> <p>8 上に同じ。学びには身体も心も頭もみんな入って、それぞれの人が自分に与えられた条件の中で「より良く生きる」力を養っていくことと考えればあらゆるタイプのあらゆる重さの障がいも包摂されるのいいですね。</p>
2	<p>1 当事者等団体（保護者の会等含む）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 第2分科会に参加させていただきました。知的障害、制約のある人の学びの場について考えてくださっていることに保護者としてとても嬉しく思いました。知的障害の人も参加出来るオープンカレッジの存在も知りませんでした。知らないだけで、需要はかなりあると思います。特別支援学校高等部など、就労(福祉就労も含む)のための実習だけでなく、在学中に余暇や学びの体験など、オープンカレッジなどの体験が出来る機会もあると、参加出来る場所を見つけられる機会も増えていくのではないかと思います。また、重度の人のために福祉サービスとの連携も大切かなと思いました。</p> <p>5 オンライン化のお陰で、自宅で受講出来るようになったことで、介護や障害のある子供の保護者も参加しやすくなっていくのではないかと思います。</p> <p>7 知的障害者や発達障害者、自閉症などのICTの活用について(作業などの手順や工程、視覚的に示すことで理解出来ることが増えたり、またコミュニケーションツールとしてもこれまでにない広がりを持たせることが期待されます。今後、どのように活用されていくのか勉強したいです。)</p> <p>8 誰もがコミュニケーションをとれるような場づくり</p>
3	<p>1 行政（保健・福祉・労働・関係機関含む）</p> <p>2 参加者として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 学習保障の根拠について学術的に体系的に理解できて、たいへん貴重な学びの機会を頂きました。</p> <p>5 私は集中力が人様のより劣るので講義はオンデマンドの方が先生も聞くほうも</p>

	<p>自分の体調がいいときにきけるからいいかと感じました。</p> <p>6 共生の障害学習の皆様の実践について、私は知らないことばかりで、たいへん理解が深まりました。</p> <p>7 全国喫茶コーナー交流会</p> <p>8 今はなくなった、私は埼玉大学教育学部社会教育総合過程の卒業生なので、新課程の社会教育主事任用資格が取得できるようなりカレント教育を働きながら受けられれば、私が貢献できる可能性も広がるのではないかと考えました。</p>
4	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 分科会1に参加しました。具体的なお話を聞いて大変参考になりました。</p> <p>5 やはり、生で交流することにはかなわないとは思いますが、コロナ禍の状況下では最適な学びの場が得られたと思います。</p> <p>8 様々な事例を学ぶことだと思います。</p>
5	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p>
6	<p>1 その他</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 大学で学生として障害について学んでいます。今回、大学で受ける授業とは違った、実際に社会で当事者に関わってプロジェクトを動かしている方々のお話を聞く機会を持てて良かったと思います。卒業後の学びの場の重要性、政策や取り組み、普及の課題を知ることができました。分科会では当事者の学びの様子や、工夫した進捗を自分の目で見ることができ、生涯学習への取り組みの一端がわかりました。現在、特別支援教育は特別支援学校高等部までの教育が主ですが、その後も学び続ける、いつでも学び直せる環境が必要であると感じました。</p> <p>5 所々聞き取りにくい箇所もありましたが、支障が出るほどではなかったと考えます。また、オンラインであることで参加のハードルが下がっているとも感じます。気軽に聴講できることは、オンラインならではの利点であると思います。</p> <p>8 生涯学習の必要性について、より多くの人に知ってもらうこと。特別支援教育は高等部までという雰囲気があるので、その後も学び続けるという考え自体が広まっていないと思います。このような取り組みがあるということや大学の授業でももっと強調してもいいのではないかと感じます。</p>
7	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 仕事として</p>

	<p>3 参考になった</p> <p>4 様々な学びの種類、形態があるものの、それを望む人が望む機会に簡単に辿り着くあるいは提供できる環境を整えることの重要性を改めて感じました。障害や障害者の生活、自立、学びについて、障害（者）と縁のない方々の認知・理解が欠かせないと感じています。</p> <p>5 今はまだ、参加者側が未熟で最後まで聴講・参加できなかつたり、参加そのものを尻込みしたりの状況なので、オンラインで参加できる者だけで進むのではなく、すそ野を広げる取り組みも必要なのかもしれません。</p> <p>8 障害の状況や学習したい内容やレベル、目的も様々（百人百様）です。商業目的の催し、公的な催し、大学の提供する機会など、障害者向けに場をつくるには、そのための人物金と気運が必要ですが、すでに行われている一般の催しの「合理的な配慮」や「ともに学ぶというコンセプト」とそれらを「周知」をすることも一つの道かと考えます。</p>
8	<p>1 大学（学生除く）</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p>
9	<p>1 その他</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 参考になった</p>
10	<p>1 当事者等団体（保護者の会等含む）</p> <p>2 参加者として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 下記①②③④に参加しました。障害のある人の学びの大切さ奥深さを再認識しました。教育分野と福祉分野の協働について、簡単にはいかないけれども実現させていきたいです。生涯学習のひとつとして青年学級などの存在の大切さを実感していますが、自治体において関わる部署が教育分野（生涯学習課など）から障害福祉分野（障がい者福祉課など）へ移管される動きがあることに疑問と危惧を感じています。</p> <p>5 時間や場所に制約されにくく、参加しやすくなり良かったです。チャットでの発言は、会場発言よりも壁が低くなったと感じました。</p> <p>6 長時間で内容が詰まったプログラムでした。障害のある息子が在宅しているため、全てを視聴できなかったのは残念です。後日配信などありますか？</p> <p>8 障害のある人々への学びの場という側面だけではなく、地域の人々みなへの出会い・学びの場・お互いを知る場・お互いが助け合える場、といった側面での検討。</p>
11	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p>

	<p>3 大変参考になった</p>
12	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ①②③⑦⑧に参加致しました。学生主体の進行は、それぞれの学びの場の紹介を学生が発表していく形でした。印象的だったのは、どの学生の方も緊張しないでしっかり発表出来ていたことが良かったです。この発表で「学びの楽しさ」「学びの大切さ」と言うのが伝わりました。質問の中で、義務教育との違いは？という質問に、学ばされているという事ではなく自発的に学んでいるのだと言うことが分かり、学びの大切さと言うのが分かりました。先生も一緒に楽しんで、一緒に学んでいるから、先生も生徒もとても良い雰囲気なんだと思いました。私も学ぶ事が大好きなので、その場にいたいと思いました。</p> <p>5 前回のコンファレンスには、仕事で参加出来ませんでした。今回は日曜日なので参加出来ました。本当は現地で参加する方がより学べるとは思いますが、コロナ禍の中ではやむを得ません。ですが、配信でも集中して参加出来たので、配信でも十分に学べました。</p> <p>6 配信なので何日間か録画を観ることが出来たら、全ての分科会に参加できるので、次回が配信となりましたら、ぜひ録画で全ての分科会も観れるようにして下さい。</p> <p>7 生涯学習を行って行くために、先生や生徒以外にも支えている人達の言葉やご両親などの言葉も聞きたいです。</p> <p>8 福祉と医療の共生</p>
13	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 オンラインだったので参加できた。今、コロナの脅威に世界中でオンラインでのコミュニケーションがスタンダードになる流れになっているが、障害のある方々は、それをコロナ前から取り組んでこられている先駆者であることが分かった。地域には閉じこもりがちな高齢者が多く精神や健康を害すなど新たな問題になっている。あいにくのデジタル未開地であり即実践には結びつかないかもしれないが、障害や年代を越えた繋がり場の場づくりに参考にしたい内容であった。</p> <p>5 zoom で参加したが日々の業務、生活の中でリアルタイムで入室するのは2時間が限界かもしれない。zoom と YouTube の両方のアクセスが可能であると、途中退席や分割視聴など選択肢が増えて良いと思った。</p> <p>6 みんなの大学校の引地先生の軽やかさが画面から伝わって面白かった。紹介くださったクイズやゲームは、コロナ禍のオンライン講座を実施する際、アイスブレ</p>

	<p>イクに使うとより対面に近い感覚になって良いと感じ、大変参考になりました。</p> <p>7 高齢者の孤立・多世代間コミュニケーションの実践</p> <p>8 誰もが当たり前のように発信し続けること</p>
14	<p>1 保護者（所属なし）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 基調講演のお話など、大変参考になりました。ありがとうございました。</p> <p>5 オンラインで配信していただけると、育児中でも家で視聴でき、とてもありがたいです。</p>
15	<p>1 社会福祉協議会</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 ⑦当事者の言葉は何より力強いと思い、聞くことができよかったです。</p> <p>5 オンラインでなければ私は参加していなかったと思います。よかったです。参加しやすい形でした。</p> <p>6 皆さんの熱意が伝わる密度の濃い内容でした。</p> <p>7 性の問題。恋愛、結婚など。</p> <p>8 サークル、カウンセリング、メンタルヘルスケア</p>
16	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 ①オープニング～文科省小林室長のあいさつ</p> <p>5 申し込みの時にも書きましたが、ぜひアーカイブ配信をお願いします。日曜日開催だったので、自宅のパソコンで見ましたが、育児・家事をしながらですので、当然全体を見ることはできません。最低限、文科省の動きを知りたい、と思い、冒頭だけで失礼しました。</p> <p>8 自治体の関係部署や地域にある様々な人材・組織の連携が絶対に必要だと思います。自治体内でも、教育部門と福祉部門との連携、役割分担の事前および随時の調整も非常に重要なこと。</p>
17	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p>
18	<p>1 障害福祉サービス等事業所</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 分科会④は学生の生の意見を聞くことができ、頼もしかった。今後も専攻科の</p>

	<p>カリキュラムを考えるにあたって、参考にしていきたい</p> <p>5 どこにいても参加できるオンラインでの参加は今後も継続してほしい。音声聞き取りにくいことがあり、残念だった。</p> <p>7 海外含めた専攻科の取り組み例を教えてください</p> <p>8 教育と福祉の連携、専攻科の制度化</p>
19	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 ②の小林先生のお話が特に印象的です。軽度のたたきを持った方の方が学びや交流の機会が得づらく、休日や放課後も一人で過ごしがちというのは、当事者の家族として実感しているところでもありました。私自身、当事者の家族という立場、大学生という立場、将来教員を目指す立場として考えていかなければならないと感じました。</p> <p>5 途中音声途切れたり、音が小さい方がいたりして聞き取りづらいところがあり残念でした。現在山梨にいますが、県外に出ずとも参加できたのでありがたかったです。"</p>
20	<p>1 図書館・博物館・青少年施設等</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>5 オンラインに不慣れなので戸惑いましたが、何とか参加することが出来ました。コロナ禍での開催としては、良かったと思います。Wi-Fiなど条件が整わないと参加しにくいなあと感じました。また、通信の影響でフリーズした際、自分の端末だけの症状かどうかわからないので不安でした。"</p> <p>8 小林先生の「福祉行政と教育行政を分けているのは、日本だけ」という言葉が響きます。肩肘張らずにゆるりとした関係で場づくりに努めたいと思いました。</p>
21	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 実際に行っている学習内容を知れてよかった。また、実際に生徒さんの声を聞いてよかった</p> <p>5 どこからでも聞けるというのが良かった。</p>
22	<p>1 行政（保健・福祉・労働・関係機関含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 クロージングセッションがよかった。</p> <p>5 大変勉強になった。</p>

	<p>6 特になし</p> <p>7 障がい者の方が会社経営していること等</p> <p>8 障がい者自身が、生涯学習の推進の中心となる</p>
23	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 基調講演、分科会を通じて、課題や取り組み、事例等を学ぶことができ参考になった。</p> <p>5 問題なく参加することができたが、会場や参加者の様子がわからないことが少し残念に感じた。</p> <p>7 ボランティアや支援者等の体験談</p> <p>8 実態の把握をはじめ、関係者の情報共有、周囲の理解など環境の整備が重要だと思います。</p>
24	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p>
25	<p>1 当事者等団体（保護者の会等含む）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 ①と②は障害者の生涯学習の歴史や法律のことが良くわかり、よかったです。分科会は⑦を選び参加しました。当事者の声を聞く機会を設けてくださったことはとてもよかったですと思います。これからも様々な方法で当事者の参加を試みてくださることをお願いいたします。</p> <p>5 障害のある家族がいるので日曜日に会場に行くことは難しいこともありますが、今回オンライン配信をご用意いただいたので参加することができました。とても有意義でした。ありがとうございました。アフターコロナにおいても会場とオンライン配信の両方を考えていただくと、多くの人が参加することができると思いますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>6 後日、他の分科会の配信もあるといいと思います。オンラインだからこそ可能なのかと期待しています。</p> <p>8 障害の理解が一番大切だと思います。まず知っていただくこと、そのためにはこのような機会を数多く作っていただくことだと思います。学びの場が数多くでき、参加しやすいような仕組みづくりも必要かと思います。サブタイトルの通りだと思います。</p>
26	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p>

	<p>3 参考になった</p> <p>4 「分科会1」コロナ禍での障がい者青年学級のあり方や運営内容が参考になった。</p> <p>5 移動時間がない分、参加しやすい</p>
27	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 私の働く自治体の公民館は職員数がとても少ないです。その中で障害者の社会教育活動にどのように取り組むことが出来るかとても考えさせられました。</p> <p>5 今回、コロナの影響でオンライン配信になったかと思いますが、会場まで遠い場合のことを考えると、来年度以降もぜひ、オンラインでの配信を続けていただけたらと思います。</p> <p>7 外国の方、LGBT などマイノリティの方たちの生涯学習の推進、学びの場づくりに関して取り上げてほしいです。</p> <p>8 一人ではなかなか行動に移せません。障害者の方たちに実際に話を聞く、同じ思いの方たちと出会う、社会教育施設で働いているのであれば、障害者の生涯学習の推進に関して職員が同じ方向を向いて活動することなどが必要になってくると思います。正直、ただ開けていればよいという公民館も多いように感じています。</p>
28	<p>1 当事者等団体（保護者の会等含む）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ⑥分科会3に参加しました。学校を卒業した後の居場所があって良いと思いました。</p> <p>5 コロナ感染拡大防止のことを考えると、オンライン配信は必要だと思います。</p> <p>6 学校教育で、インクルーシブな学びの場がもっとあっても良いと思います。</p> <p>7 テーマとして『防災と共生社会について』などがあっても良いと思います。避難行動要支援者名簿による個別計画作成の推進など、地域住民（自治会など）との共生について取り上げて欲しい。</p> <p>8 国の『ユニバーサルデザイン 2020 行動計画』にあるように、特に学校教育における『心のバリアフリー』に向けて取り組んでいくべきだと思う。</p>
29	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 分科会2に参加しましたが、大変貴重なお話を聞くことができました。大学における障害者の学び、地方ではまだまだ進んでいないという印象をもちました。学校所属という現在の自分の立場で何をどの程度できるのか、考える機会になりました。</p>

	<p>た。他の分科会の内容も気になりました。</p> <p>5 遠くからも参加できるメリットが十分生かされたと思います。</p> <p>6 特にありません。</p>
30	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 ⑦専門家の意見はもちろん当事者の思いを聞くことによって、求められている生涯学習について教養に関する学びについて考える視点を獲得することができた。</p> <p>5 大きな乱れはなく講演等を聞くことができたので良かったと思う。</p> <p>8 教養について学ぶ場。学校卒業後、青年期の学びの場と学校の連携</p>
31	<p>1 その他</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 障がいを持つ人々が障がいを持つ人々同士だけではなくもっと広い繋がりです社会と繋がっていける機会を作り出そうとしている、尽力している人たちがいることを知ることができた。</p> <p>5 少し聞こえづらい部分があった。</p> <p>6 特になし</p> <p>7 障がいをもつ子ども</p> <p>8 もっと周知されること。</p>
32	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ③レクチャー。障害者と一緒に学び合う環境を創出することにおいて、障害者に対して「やらされている感」を与えず、いかにポジティブな空気をつくるかに悩んでいました。引地先生が仰っていた手法のクイズは単純でわかりやすく、皆が何の障害もなく輪に入ってこれそうで、これなら気軽に使える手法だと感じました。ありがとうございます。</p> <p>5 プログラムの時間配分や同じ参加者と思いを共有しにくい点がありましたが、インターネットに繋がっていれば誰でも参加できるオンライン配信は、まさしく共生社会の実現に近づいた大きな一歩だと思いました。</p> <p>7 間接的にでも良いので、社会に存在する障害とは何かを障害者自身の言葉から学びたいです。</p> <p>8 障害者自身が愚痴や不満を気軽に言い、その解決に向けて一緒に学び合えること。</p>
33	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p>

	<p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 森下さんのお話が分かりやすかったです。</p> <p>5 初めての zoom 参加でしたので、まごついたり分からないこともありました。</p> <p>7 今は特に思いつきません。</p> <p>8 もっともっと障害者の学習機会が増えることを希望します。予算が少ない中で如何に広い範囲から熱意あるボランティアを集めるかが課題だと思います。</p>
34	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 分科会 4 では障害を持つ人が、家族と職場以外の人と触れ合ったり、日々のストレスをリフレッシュするために地域の生涯学習活動に参加していると知りました。自分の仕事で障害者の生涯学習活動に取り組むべきだと感じました</p> <p>5 障害者の生涯学習が求められていることは知っていましたが、ネットで調べてもなかなか情報が出てこなかったもので、知る良い機会になりました。地理的にも、会場に行くことは難しく、オンラインだからこそいい情報を知ることができ、非常にありがたかったです。</p> <p>8 障害者の生涯学習が求められている事実や、具体的にどのようなことが行われているのかについて、多くの人を知ることだと思います。実際に行おうと思っても、職場での理解が足りなければ実行するまで時間がかかってしまいます。</p>
35	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ①②③⑤⑧に参加。これまでに行われていた幅広い活動を知ることができて、自身の活動の参考になった。</p> <p>5 音声が飛んで聞こえない部分が少しあったが、全体としては対面の講演会と同じようであった。YouTube の配信と Zoom 講演会を 2 台の PC で同時に参加できたことは、オンライン配信のメリットと思われる。</p> <p>6 内容も進行も適切であった。</p> <p>7 今後の展望について、より具体的な内容。</p> <p>8 国民の理解。</p>
36	<p>1 その他</p> <p>2 参加者として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 午前の部、全体にややぼやけてしまった部分があると思われます。</p> <p>分科会 4 について、楽しくとの思いが伝わってきました。自発的な学びに誘うため</p>

	<p>にも必要だと考えます。</p> <p>5 オンラインだからこそ出来る発信もありますが、障害があるからこそ実際に対面しなければならないことは、まだまだあるとかんじました。また、他の参加者の反応を感じ取りにくいことは、改善の余地があると思われます。当事者の参加もあったことから、本人を今後も守る責務が発生することも否めない事実としてあるのではないのでしょうか。</p> <p>6 インクルーシブ教育として、全障がいに対応することと、各ニーズに対応することの矛盾、バランスをどこにとるかが大切だと考えます。</p> <p>7 障がい者に限らず、いったん社会からの挫折があった場合の、具体的な復帰への展望を見せていくことが出来るならば、希望を与えることができると考えます。</p> <p>8 金銭面の支えの拡充を期待しますが、共に援助を受けることにより枠に縛られる危惧もあるため、各支援者の判断は難しいと思われます。</p>
37	<p>1 当事者（所属なし）</p> <p>2 参加者として</p> <p>3 あまり参考にならなかった</p> <p>4 私は精神障害者です。②の基調講演について、当事者研究が出てきませんでした。講師の小林繁さんご自身が、精神障害のことをよく知らないようです。私は、講演（一斉授業）自体が、障害者虐待・差別に当たると思います。私は「講演会に参加すると熱を出す」という症状を持っています。小林さんの講演をまじめに聞いてしまうと、後で熱を出すため、半身になって聞いていました。他に、例えば統合失調症の幻聴の症状をお持ちの方は、講演中に幻聴が始まれば、その対応で講演どころではなくなってしまいます。PTSD の症状をお持ちの方は、講演中にフラッシュバックが始まれば、会場を出て、外で休むということがあります。精神症状は講演会の内容と関係なく始まることもありますし、講演会の内容が精神症状を引き起こすということもあります。後者の場合は教育虐待です。当事者研究ミーティングの場合、最初の1時間を全員の自己紹介に充てます。全員が、次の6項目について、話します。</p> <p>①名前（ニックネーム OK）、②病名、③いまの気分・体調、④最近良かったこと、⑤最近困ったこと、⑥今日研究したいこと。このタイミングで「私は講演会に参加すると熱を出すという症状を持っています」と発言することができます。幻聴の症状をお持ちの方は、「ぼくは幻聴の症状で困っています」と発言できます。PTSD の症状をお持ちの方は、「フラッシュバックで困っています」と話すことができます。</p> <p>5 オンラインにするべきだと思います。社会教育はどんどん Zoom にしていくべきだと思います。自宅で視聴ができると、具合が悪くなったときにパソコンを切って、すぐ隣のベッドで寝られるので、Zoom だと助かります。障害者にとっては福音だと思います。</p> <p>6 福祉教育に関心がある人たち、特に大学教授と話をしたいと思います。「こち</p>

らがどんなことで困っているか？」を知ることができないと、改善することができないと思います。

7 当事者研究、PPI（患者・市民の研究参画、Patient and Public Involvement）です。さきほどく4>で、当事者研究ミーティングについて説明をしましたが、その他に、症例報告を患者が書くというものがあります。昔は、医師が患者を観察して、論文を書いて、学会に発表し、そうやって医学は発展してきました。しかし2012年の個人情報保護法施行や、各学会の倫理指針が厳しくなったことによって、この症例報告が書きづらくなっているようです。患者がカミングアウトする分には問題ありませんから、自分で書く流れになっています。私は精神科の症例報告についてしか知らないのですが、おそらく内科や外科など他の診療科目も同じ葛藤を抱えていると推測します。精神科の場合は、例えば「患者は覚醒剤取締法で逮捕されたことがある」とか「強姦されたことがある」等、個人情報の中でももっともセンシティブな事柄を話題にしますので、争いが多かったのです。日本精神神経学会で、「精神医学・精神医療に関するパラダイムシフト調査班」というのを立ち上げて、当事者や家族の経験を研究に取り入れていくようです。

https://www.jspn.or.jp/modules/about/index.php?content_id=53

他に類似の医学系の潮流として、PPI というのがあり、これはがんサバイバーや難病患者を対象にしたもののようです。例えばI型糖尿病等。AMEDにメールをしたら、「将来的に精神科の当事者研究もいれようと思っています」というような返信をもらいました。おそらく文科省の井口啓太郎さんや小林繁さんは文系だと思いますが、当事者研究やPPIは理系のノリが入ってきます。いままで福祉教育というのはマイナー領域で、あまり評価されてこなかったかもしれません。障害者は一方的に教わるだけみたいな、ただサービスを消費しているだけみたいな。しかし、患者・障害者にしかできないことがあり、それは、「同じ病気になる患者を減らすこと＝医学発展への貢献」だと思います。ぜひ来年はこのカンファレンスで当事者研究・PPIを扱って、私たちの有用さ、存在意義を社会に知らせてほしいです。

8 精神障害者の公民館の利用方法として、自助グループというものがあります。例えば断酒会、ひきこもり当事者会、性暴力被害者の会等です。しかし、公民館の会議室を借りるにあたって、利用団体登録をする必要があります。友だちを何人か集めて、会則と帳簿を作って、市民団体をこしらえないと、会議室を借りられないのです。私が住んでいる東京都小平市の場合、友だちを5人集める必要があります。精神・発達障害者の特性として「友だちができにくい」という障害特性があります。5人というのがハードルが高いです。私は地域で3年間活動していますが、ソロでやっています。友だちを1人作るのも大変です。こちらも精神的に浮き沈みがありますし、相手も浮き沈みがあるわけです。いまコロナ禍で、自助グループは公民館で対面でやるのではなく、オンラインでZoomを使う流れになっています。にして

	<p>も、Zoom 代がかかるわけです。社協が地域福祉活動助成金というものを持っていて、応募しようと思ったのですが、やはり申請にあたって市民団体を作る必要があり、仲間が5人必要だそうです。文科省・厚労省のほうで、「自治体は自助グループの育成を下さい」と呼びかけてくれると嬉しいです。それから、文科省・厚労省で「障害者の学習について研究をしよう」というときに、大学教員に研究費を与えて研究させるのではなく、現場に近い、自治体の教育委員会に補助金を与えてほしいです。例えば文科省で、学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究という予算枠があり、令和2年度に国分寺市教育委員会が知的障害で採択されています。これはとてもよいです。なぜかという、公民館職員・社協職員を育てる必要があるからです。私は小平市に住んでおり、小平市には国立精神・神経医療研究センター（NCNP）があります。精神病の重症者・希少疾患の患者が多く住んでいるエリアです。私は小平市障害者支援課や教育委員会に「ぜひ学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究に応募して」と訴えています。小平市立中央公民館や、福祉会館（小平市社協の持ち物）で、当事者研究会をやるべきだと思います。コロナ禍ですから、公民館で開催するというやり方は現実的かどうかわかりませんが、いずれにせよ、公民館職員を育てる必要があります。できれば、障害者支援課か教育委員会で臨床心理士を1人、社協で精神保健福祉士資格を持った職員を1人ぐらい、雇ってくれると嬉しいです。教育というのは心理学と倫理学のかたまりです。それと精神病がぶつかることがあります。これを説明するには、臨床心理士に説明するのがよいように思います。自治体側は新自由主義で、「公務員の人件費を払いたくない」とか言うと思うので、それを補うように、文科省・厚労省から補助金を出してほしいです。</p>
38	<ol style="list-style-type: none"> 1 障害福祉サービス等事業所 2 ボランティアとして 3 大変参考になった
39	<ol style="list-style-type: none"> 1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術） 2 仕事として 3 大変参考になった 4 分科会1で目黒区、渋谷区の歴史ある取組について知ることができ良かった。目黒区は軽度の方のみ、渋谷区は重度の方も受入れているなど、同じ東京都でも地域差があるのだと感じた。目黒区はプログラムを当事者が決定に携わる点が非常に良いと思った。渋谷区は地域に根付いた活動を重視し、また障害のあるなしに関わらず安心して混ざり合うという理念が素晴らしいと思った。 5 東北の私でも参加する事ができありがたかった。 6 自分の事だけで申し訳ないのですが、当日大雪のために大幅に遅れて参加してしまいました。小林先生の講演がほとんど聞けず非常に残念だったので、YouTube

	<p>で後日再度見られるとありがたいと思いました。</p> <p>7 共生社会を目指す上で、当事者以外をいかに巻き込んでいくかが、今後の持続性に不可欠だと思います。その辺りをテーマに取り上げてもらえればと思います。</p> <p>8 社会教育は社会の要請と個人の要望によって行われるものだと思います（教育基本法第十二条）。今行われている障害者の生涯学習は、個人の要望（障害者の自立）がメインなように思われます。共生社会と社会の持続性を考えた時に、障害者の権利としての学びと同時に、社会の要請を考え、地域の方と一緒に学ぶ取り組みが必要だと思います。福祉、労働、民間と winwin の関係をどのように作っていけるか、共生社会に向かって何が必要かを色々な分野の方たちで話し合う機会が必要だと思います。</p>
40	<p>1 障害福祉サービス等事業所</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 大変参考になった</p>
41	<p>1 障害福祉サービス等事業所</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 日頃の取り組みの方向性や企画の考え方が間違っていなかったと、背中を押された印象です。冒頭の話題提供における制度的背景や、これまでの経緯が非常に参考になりました。</p> <p>5 一部音声聞き取りにくい部分がありましたが、全体を通して参加しやすかったです。</p> <p>6 分科会で各参加者の所属の記載が少なく（名前のみ）、どのようなお立場の方が参加しているか分かると、もっと良かったと感じました。</p> <p>7 ライフステージ毎に取り上げるべきテーマや、そもそも学齢期に学ぶべき項目、それ以前の家庭（養育の部分で）で身に付けるべきこと等、全てが成人後に勉強する内容ではなく幼少期からの一続きのテーマなので、「家庭、学校、支援機関、企業」の役割分担について整理できると良いと思っています。</p> <p>8 時代に即した内容や開催方法であること。アクセスの困難さを如何に解消するかが個別の課題であり、「共に学ぶ」機会是对面でもウェブでも可能だと感じています。一方で、やはり対面の持つ力も大事にしたいと思っています。ありがとうございました。</p>
42	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 分科会 4 での学生の皆さんの直接の声を聞いて生涯学習の意義を感じると共に励みになった。ありがとうございました。</p>

	<p>5 オンライン配信によって他地域同時にいろいろなことが利点を感じた。音響で少し問題があったがすぐに改善された。</p> <p>6 皆さんの熱い思いと学生の皆さんの意気込みで大変良いコンファレンスだった。</p> <p>7 学生たちにとってのロールモデルとなるような先輩たちの紹介と参加・共生社会フォーラムで紹介しうる事業などのケーススタディー</p> <p>8 このような意味ある事業を世の中に根付かせていくのか、特にコロナ禍で人の移動や集合、そして予算的な制約がある中でさらに発展させていくのかは課題と感じた。</p>
43	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 分科会 4 当事者の方々の、作られ過ぎていない生の声が聞けたこと、それにより自分で感じ考えることができたことがよかった。障害を持っていること以上に、周りの人の関わり方によって生きやすさ・生きづらさ、自己肯定感につながることを改めて感じ、そのきっかけのひとつとなる学びの場や機会を社会が作っていくことの必要性を認識した。</p> <p>5 現地に赴く良さもあるが、気軽に参加できることがよかった。参加のハードルが下がるので、裾野を広げられるよい手法だと思う。</p> <p>8 関わる人を育成し、質の高いサービスを提供できる人やしくみにはそれなりの報酬が支払われる公的支援があるといいと思います。</p>
44	<p>1 大学（学生除く）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 参考になった</p>
45	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 分科会 1 特別区の進んだ取組を知ることができ、貴重な機会となりました。</p> <p>5 音が途切れ途切れになってしまったり、声の大きさによってほとんど聞こえない人がいたり、課題があるように感じました。</p>
46	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 これまで関わったことがない</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 これまで障害者の生涯学習活動に関わったことはありませんが、これから自分の活動として取り組みたいと考えていたところでしたので、ちょうど良いタイミングで生涯学習支援の事例や課題を知ることができました。「障害者は働かなくていい</p>

	<p>い、学ばなくていいという考えは間違いである」との見解については、私もその通りだと思います。</p> <p>5 移動時間や場所に左右されずに参加できるのは良いと思います。</p> <p>6 クロージングセッションのなかで、「みんなの大学校」で学んだ当事者の方が、ご自分の意見を発表したのはとても良かったと思います。感動しました。</p> <p>7 生涯学習支援の事例だけでなく、障害当事者の声（学びの場に参加した感想や、これから自分がどうしたいかなど）を聞く機会を増やしていただきたいです。当事者の声を聞いて、障害を持たない人がどう感じたかについても、意見を聞きたいです。</p> <p>8 障害を持つ人と、持たない人とを区別するのではなく、こどものころから一緒に学ぶ場を作ることが必要だと思います。また、分科会でも意見が出ていましたが、支援者の養成、他の資源とどう繋げるか、社会教育行政と障害福祉行政との連携も必要だと思います。</p>
47	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ③の引地先生のレクチャーが一番印象的だった。障がいのあるなしにかかわらず、面白い取り組みをされていていらっしゃると感じた。</p> <p>5 自宅から気軽に参加できたため、とても良かった。特に④は、YouTubeでのライブ配信もしていただいていたので、テレビに映して部分的に家族で視聴できた。</p> <p>8 障がいのある方とない方が触れ合う、かかわる場づくり。</p>
48	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p>
49	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 コロナ禍において、障がい者学級を継続していくための課題をあらためて考える機会となりました。</p> <p>5 模索が続きますが、今できることを最大限やっていきたいと思います。</p> <p>6 本来はリアルで実施することがベストでしょうが、こういう形でも開催できたことは大きな成果だと思います。</p> <p>7 興味のある分科会が多く、ひとつに絞ることが難しかったです。このような環境下でも、開催していただいたことに感謝します。障がいのある人の学習権の保障と、共生社会の実現を現場で進めていくことの難しさを感じています。長年実施してきた「障害者学級」のあり方を、今の社会状況と照らし合わせてどう捉え直して</p>

	<p>いくつか、とても悩むところです。そのようなこと共有し、語り合う場があればと思います。</p> <p>8 学びの選択肢が広がること。本人の意見が今まで以上に尊重され、本人が思うように活動できる支援体制があること。</p>
50	<p>1 障害福祉サービス等事業所</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 ②で、これまでの経過と最近のトピックを網羅的に説明していただき、また思想的にもとても大切な確認をしていただけて、全体の方向性を見出すことができた。③は、オンラインという最近のニーズに対応した取り組みの紹介でタイムリーだった。⑤は、内容はとても良かった。あと 30 分くらいあれば、何らかの方向性が見出せたのではないかな。</p> <p>5 ・集合研修ではできない様々な可能性を拓くことができる手法だと感じた。 ・メイン会場の回線の接続が最も良くなかった。 ・分科会参加者の ZOOM の表示名が、所属を示すものがほとんどなかった (第 2)。匿名希望を除き、名前の表記のルールを決めるか、主催者機能で名前の変更をしてみようか。</p> <p>・分科会参加者が全員ビデオをオフにしていたが、オンの方が良いと思った。シンポジストからも参加者の顔が見えていないのではないかな。</p> <p>6 すべての部分言えることだが、各々の時間が短かったのが残念だった。目的、内容、講師の構成等がとても良かったです。今後の展開を楽しみにしています。司会が明瞭で好感が持てました。</p> <p>7 ・今後連携する上では、地域内の教育分野以外での取り組みを広く取り上げ、公的教育で担いきれない地域内での連携を考える材料としてはどうか。 ・IT 技術を活用した取り組み (技術的なこと、実践の発表 (オンライン、オンデマンド等)) ・分科会に異分野の人の組み合わせでシンポジストを入れて、相互の取り組みや地域課題を包括的につかんだり、新たな方法を模索するような分科会にしてみようか。</p> <p>8 ・生涯学習の趣旨にもとづく、各分野の連携 ・教育機関がその核となること ・IT 技術の活用"</p>
51	<p>1 行政 (社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術)</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 目黒、渋谷の青年学級の取組が参考になりました。本県ではこのような場がな</p>

	<p>く、市町村教育行政（社会教育施設含む）の取組がなかなか充実していないので、どのように展開していけばよいか考えています。参考にさせていただきます。その他の資料もこれから読み込んで、参考にしたいと思います。</p> <p>5 やはり対面がいいですね。出席者相互のつながりがあるような会だと一番です。一方、直接行かなくともこれだけのプログラムを知ることができるメリットは感じます。オンラインの中でもいろいろな方法があるので、参加者側と運営側のメリットをそれぞれ考える必要があると感じます。</p> <p>7 複数の団体による連携事例、行政と関係団体の連携による事例があれば知りたいところです。</p> <p>8 担い手（支援者）をどのように確保・育成していくか。</p>
52	<p>1 公民館等（類似施設含む）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p>
53	<p>1 障害福祉サービス等事業所</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p> <p>4 分科会 2 に参加させていただいたが、非常にためになる発表を聞くことができた。また、発表後の質疑応答も大変濃い内容で勉強させていただいた。</p>
54	<p>1 学校（生徒除く）</p> <p>2 仕事として</p> <p>3 大変参考になった</p>
55	<p>1 その他</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p>
56	<p>1 行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）</p> <p>2 ボランティアとして</p> <p>3 参考になった</p> <p>4 分科会 1 に参加させていただきました。各区で歴史や様々なしほりがある中での活動、とても考えさせられました。私自身は、仕事ではなく、ボランティア的な立ち位置で今イベントなどを企画する立場にいて、当事者のご家族もメンバーにいらっしやいますが、やはり実際は学校卒業後の行き場がないという話を伺うと、民間だけでなく行政のサポートが大切になると改めて思いました。まだまだ私は知識も経験もありませんが、障害の軽重により、受けられるサポートにも軽重がある印象を受けました。何がこれから自分にできるのか、発信していくことができるのか、考えていかなければと思いました。ありがとうございました。</p> <p>5 オンラインは、事務局の方々は大変かと思いますが、参加者としては安心して</p>

参加できるので、とても良かったです。今後もオンラインで色々開催していただけたら嬉しいです、ぜひ今後も参加したいと思います。

6 ほかの分科会に参加できなかったことが残念でした。

8 ありきたりのことしか思いつきませんが、周知活動をもっと効果的にできたらと思っています。全ての人に学びの場を作っていくことは大切ですが、学びの場があること、参加できることを、障害者の方たちにもきちんと届けられるようになるとういなと思っています。特別な講座を作るよりも、場がある周知が、その後に大きく影響するのではとったりしています。

8-5 まとめ

共生社会コンファレンス開催において、委託団体として目指したかったのは多くの当事者に来てもらい、当事者とともに交じり合い考える場の設定であった。メインテーマである「障害発・新しい学びの提起 健常者中心の学びを超えて」はシンポジウムを行う津田教授、牧野教授、星加准教授、引地が積極的に合意する形で発出されたのは大きな成果だと考えている。シンポジウムでもそれぞれの立場から、テーマに沿った問題提起がされた。ワークショップではケアフィット協会と星加准教授が作った「バリアブルレストラン」、照山准教授の「ヒューマンライブラリー」の多彩な語り手の方々、プロのミュージシャンとともに音楽を作り上げる「音楽ワークショップ」で、当事者と混ざり合うという試みは形作られたと考えている。

分科会も「社会教育」「喫茶コーナー」「福祉型専攻科や『高等』教育とのインクルージョン」等、ほかのコンファレンスでもスタンダードになっている議論を抑えながら、「重度障害者へのアウトリーチ」「当事者研究」を加えられたのも、新たな視点を提供できたのではないかと思う。

最後のクロージングセッションでは、各分科会のコーディネーターが登壇し、分科会で議論された内容の総括を「キーワード」「キーフレーズ」で画用紙に記載し示しながら説明していただいた。第一分科会「社会教育が取り組む生涯学習支援」では「学習のプロセス」というフレーズで、社会教育が今後取り組む上で重要なのはプロセスであることを強調した。第二分科会の「『高等』教育におけるインクルージョン」では「理想と現実」が出され、福祉型専攻科など特別支援学校卒業後の学びや大学との連携などは理想は共有できるものの、実践では様々な現実があることを確認することになった。第三分科会の「カフェを介した『共生の学び』」では「しかけとしてのカフェ」とのフレーズで今後地域とともに共生社会の中で位置づけるための「しかけ」としての認識が必要との見解を示し、第四分科会「エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ」では「学びの継続性」で、重度障害者向けの学習機会を18歳以降も続けるべきとの考えがアピールされた。第五分科会の「当事者研究がもたらす学び」では「マイノリティ同士が共感できた」ことが、当事者の大きな励みになるとの見解で、学びの場で生きづらさを抱えた人が共感により立ち上がれる可能性を示した。

本コンファレンスでは多様なアプローチを試みたが、これを発展し各地域で共生社会の学びに取り組んでもらうためには、まだまだ啓もうと実践が必要であり、今回をきっかけにした様々なスピノフの企画を期待したい。

9. 連携協議会

9-1 第一回開催概要

日時：2020年6月17日午後4時—午後5時30分

場所：浦和大学 4号館4207教室（ウェブ会議システムで参加も可能とします）

〒336-0974 埼玉県さいたま市緑区大崎3551

議題：2020年度文部科学省委託研究「特別支援学校高等部卒業生及び学びを必要とする障害者を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」内容の説明と検討

出席者

連携協議会委員

氏名	所属・役職等	出欠
九里秀一郎	浦和大学総合福祉学部教授	○
小林節子	特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表	○
唐沢隆弘	東京リーガルマインド執行役員	ズーム
高橋基成	元東京都・埼玉県特別支援学校教諭	ズーム
田中瑛	東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程	ズーム
佐光紀子	翻訳家	ズーム
水越真哉	障がい当事者・シャローム大学校学生	○
島田秀明	埼玉県教育局生涯学習課・指導主事	○

連携協議会事務局構成員

氏名	所属・役職等	出欠
引地達也	一般財団法人福祉教育支援協会上席研究員・シャローム大学校学長	○
渡辺昌志	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	○
杉本頼久	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	ズーム
加藤のぞみ	一般財団法人福祉教育支援協会事務局	○

<式次第>進行・コーディネーター引地達也

1：本年度委員紹介

2：本年度計画説明

- (1) 本事業の考え方
 - (2) オープンキャンパス
 - (3) 訪問講義
 - (4) 視察予定
 - (5) カンファレンス開催
- 3：全体に関するコメント等
- 4：今後の日程確認・事務連絡等

9-2 第一回開催内容

3か年計画で進められてきた文部科学省「特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」の最終年度として埼玉県の担当者とシャローム大学校の学生である水越さんを当事者として出席し幅広い意見を聞くことを目的として開催した。

協議会では、まず今年度のオープンキャンパスについてその趣旨や開催プログラム、年間スケジュールが共有された。しかしながら、コロナ禍によりそれぞれの開催について慎重な姿勢も求められ、細心の注意を払いながら各事業を進行し、無理をしない中で進行することを確認した。

9-3 第二回開催概要（最終報告会）

日時：2021年2月17日午後4時—午後5時30分

場所：ウェブ会議システムズーム開催

議題：2020年度文部科学省委託研究「特別支援学校高等部卒業生及び学びを必要とする障害者を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」の事業報告

出席者

連携協議会委員

氏名	所属・役職等	出欠
九里秀一郎	浦和大学総合福祉学部教授	○
小林節子	特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表	×
唐沢隆弘	東京リーガルマインド執行役員	○
高橋基成	元東京都・埼玉県特別支援学校教諭	×
田中瑛	東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程	○
佐光紀子	翻訳家	×
水越真哉	障がい当事者・シャローム大学校学生	○
島田秀明	埼玉県教育局生涯学習課・指導主事	○

連携協議会事務局構成員

氏名	所属・役職等	出欠
引地達也	一般財団法人福祉教育支援協会 上席研究員・シャローム大学 学長	○
渡辺昌志	一般財団法人福祉教育支援協会 事務局	×
杉本頼久	一般財団法人福祉教育支援協会 事務局	○
加藤のぞみ	一般財団法人福祉教育支援協会 事務局	○

<式次第> 進行・コーディネーター 引地達也

- 1: 本年度事業報告
- 2: 委員のコメント等
- 3: 協議
- 4: 総括

9-4 最終報告会及び第二回開催まとめ

冒頭で主催者側が本年度の環境の激変による対応で計画変更を余儀なくされ、その対応に追われたこともあり、本来ならば連携協議会に意見をうかがいながら進行する予定が事業計画をお伝えする第一回連携協議会以来、開催できず結局 2 月中旬の最終報告会を兼ねることになったこととお詫びした。

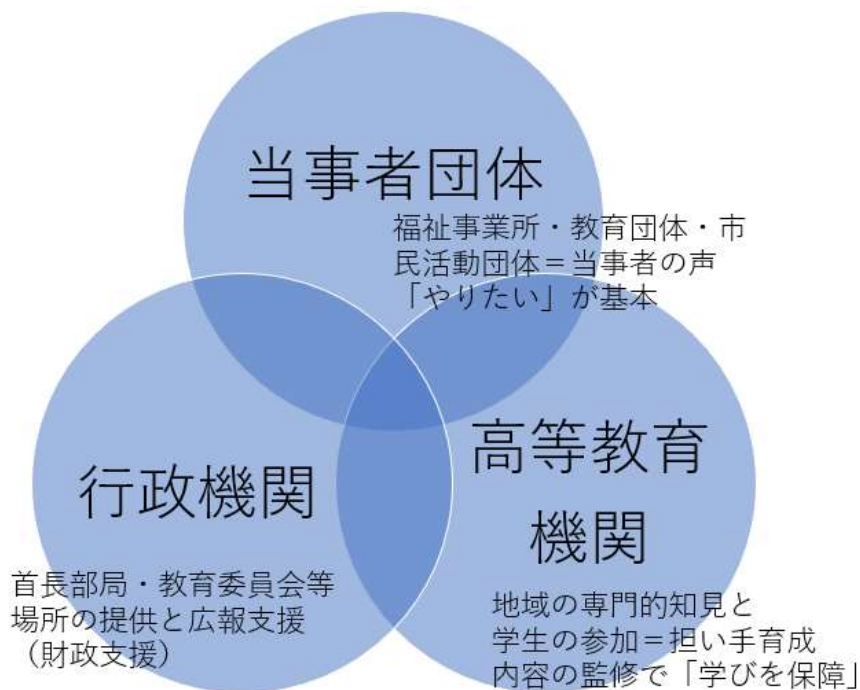
その上で本年度の事業を説明した。計画の概要、オープンキャンパスの実施概要、重度障害者への学習支援の報告、重度障害者学習支援フォーラム、共生社会コンファレンスの内容を説明し、各委員からのコメントをいただいた。

九里委員からは浦和大学での開催を受けて、担当していただいた片山教授の役割の大きさに言及しながら学生にとっても素晴らしい経験の機会となり、大学としても有意義な時間となったと評した。田中委員からは今後の方向性についての質問があり、唐沢委員からは、企業として今後は貢献する検討をしたいとの発言があった。さらに埼玉県の高田委員からはコロナ禍にあってはなかなか行政が動きづらい点を説明され、今後の取組の参考にする旨の考えを示された。

引地からは、みんなの大学校でウェブでの学びの展開とともに、継続したオープンキャンパスと重度障がい者への学習支援を第二回の重度障害者学習支援フォーラムを開催する計画を説明した。

■ 検討結果

- ・ 連携の効果的な実施体制



・実施体制のモデル

みんなの大学校の役割—カリキュラム作成の支援及び提供、プロセスの支援

加えて、福祉関係を中心とした市民団体や企業体との連携し、全体をつなぐ役割をする

実施主体—当事者に近い支援団体グループが中心となりつつ、各地の高等教育機関が必要なりソースを提供、行政が支援

10. 総括

10-1 成果と効果

事業計画書で記載した「見込まれる成果・効果」をもとに、「⇒」後に現状での結果を総括し、成果と効果を整理したい。まずは本事業の大枠の項目ごとの成果と効果は以下である。

本事業	成果と効果
オープンキャンパス事業	<p>成果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域での活動と文科省の方向性を結び付け、地域での障がい者の学びの可能性を提示（山梨及び長野） ・継続した市民団体と障がい者の交流を地域の行事に結び付け継続した交流と学びの枠組みを確立（埼玉県和光市） ・高等教育機関での開催で一般の学生と障がい者が学び合うインクルーシブな学びの形を提示（浦和大学） ・上記の取組を通じての業務フローを確立 <p>効果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい者との学びに関わることの形を提示

	<ul style="list-style-type: none"> ・地域コミュニティでのインクルーシブな学びの場の確立に向けてのきっかけ ・各行政機関への啓もう、民間とのつながりで可能性がひろがることの具体的なイメージ喚起
訪問講義事業	<p>成果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各地域の学びが国も後押しするというメッセージによる希望と当事者、支援者のやりがい ・ノウハウの蓄積 ・フォーラム開催による全国の動きをネットワーク化 <p>効果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フォーラム開催で動画の配信及びパンフレット作成で広く全国に啓蒙
共生社会コンファレンス	<p>成果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会教育に焦点をあてたことで自治体関係者の動きを活発化させるきっかけに ・当事者の声の発信により学びのイメージの拡充 <p>効果：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度に向けての学びの活性化に向けての機運づくり

さらに学習内容などの細部については、以下の項目で開発してきたが、この妥当性を含めて「成果・効果」は⇒以下で示したい。

<p>【学習プログラム講義】</p> <p><招集型学習></p> <p>これまでの知見をもとに、「1日バージョン」「短時間バージョン」でそれぞれの授業項目と内容 内容設定と伝え方、言語の選択や作図の適性化などの授業の進め方について検証し、さらなる最適化を開発</p> <p>時間配分 50分授業を基本に、講話は15分以内におさえてのアクティブラーニングを心掛ける効用を再確認</p> <p>サブティーチャーの役割 想定人数4-5に1人という割合のうえで、障害特性に応じた対応とすることとし、講義毎の障害特性への対応の蓄積を記録し、アクティブラーニングを通じてどのような「介入」「指導」の方法が有効かを検証したうえで、「サブティーチャー養成」も開発</p> <p>⇒成果・効果</p> <p>新型コロナウイルスの中でも4回のオープンキャンパスを人数を限定した上で招集型学習を行ったことは大きな経験となった。そのうち山梨、長野、浦和大でのプログラムが昼ご飯を挟んで午前午後のプログラムであったが、2年の経験で初めて会う人の多いプログラムではそれぞれが「一緒」に学ぼうとするインクルーシブな心の状態になるには、昼</p>

<p>食と一緒に食べる、というプロセスも重要であると考え。</p> <p>また 50 分を一区切りにする時間配分も 1 年目から行われ、みんなの大学校でも実践する中で妥当な時間だと認識しており、今回もちょうどよい時間配分であることを確認した。</p> <p>サブティーチャーの役割は重要であり、講義者と受講者との間に、媒介役がいることが必須の場合もあり、すべての人が 1 対 1 であることは難しいが、媒介役が活躍することで、その学びが退屈なく過ごせるものになるであろう。</p>
<p><訪問型学習></p> <p>1 タームで毎週 1 回 50 分の講義を連続的に行うことを考えての学習内容についての検討を経て、これまで整理した「英語」「歴史」「創作」等の学習内容と、今後の学習内容の決め方、受講者ニーズの汲み取り方、学習内容への反映の仕方などのフォーマット提示</p>
<p>⇒成果・効果</p> <p>4 名への学習支援はそれぞれのニーズと特性があるために、すべてに通用するガイドラインは難しいものの、「ニーズと特性」に合わせることを基本として、フォーラムでその基本をもとにそれぞれのノウハウを共有するのが重要であり、この枠組みが出来たのが成果であり、それを使った団体が一つでも増えるのが効果と考える。</p>
<p>【受け手側の反応】</p> <p>招集型・訪問型のどちらにおいても受講者の学習意欲 レポートやアンケートをもとに「何が学びに必要か」を検証し成果物に反映させる。以下 2 点の観点で検討し成果を示す</p> <p>人格形成への有効化 連携協議会での検討やサブティーチャーの感想、支援者の声などから受講者の心の変化などをくみ取りながら、何が授業で有効であったかを提示しケーススタディとして蓄積し公開する</p> <p>社会性を身に着けるための有効化 授業をすることによって、協調性や協働性の変化があったのかを検証し、そのポイントを検出しケーススタディとして公開する</p>
<p>⇒成果・効果</p> <p>人格形成への有効化</p> <p>本プログラムをほぼすべて受講した 40 代の精神障害者は自分の学びの総括を以下のような表現でまとめている。</p> <p>「私は一時期、障がい者としてただ、細々と生きて行こうと思っていました。落胆して、ある意味では決意さえしていた時期もあります。障がい者として、型に押し込められる、自分自身でもはめ込んでいく感覚に襲われていたのです。それが、学ぶことにより、自分の人生を生きようと思えるようになりました。学びから、ものごとを見る視点が客観的、多角的になり、新しい生き方が見えて来たのです。それは、将来に対する開けた視界であ</p>

り、この世界を生きていきたいと思える感情なのです」。

この学びが持つ可能性を示す文章はすなわち、学びによる人格形成の可能性も占めていると考えている。

社会性を身に着けるための有効化

この課題への成果としても前述の受講者の記述から示したい。

「わがままに夢を追う自由という学びではなく、現実を見据えるための、生きていくための学びとしてなのです。学ぶほど現実は厳しく時に残酷であることを気づかされますが、それら乗り越える力、希望もまた、学びから得られるのだと考えています。私のこれからの一歩として、社会にどう受け入れてもらうかという課題があります。これまで私は、自身に足りないことを知識で克服しようと背伸びをしてきました。もちろん、知識から得られるものは大きいですが、しかし、経験をつみ重ねたものには及ばないと思います」。

この経験の部分が絶対的に「ない」「足りない」ことで、精神障害者や知的障害者の仕事を含めた社会活動の可能性が狭まっていると考えると、学びによる経験の拡充は重要な方向であり、このプロセスに社会性を身に着けることにつながってくると考えられる。この考え方を確実にしたことが成果と考える。

【コンテンツの可能性】

訪問型・招集型ともに、どのような学習コンテンツが有効かを検証しながら、そのラインアップを増やしていくことで多様な学習内容を示したい。

招集型—1日学習のプロセスと科目、狙いと評価

簡易バージョンで90分以内での学習プロセスと科目、狙いと評価

訪問型—50分×12回の学習プロセスと科目、狙いと評価

レクレーション学習のプロセス、狙いと評価

⇒成果・効果

招集型は、対象者を考えた上で、体を動かさず、在学、またはその2つのハイブリットを考え、それらの狙いを明確化する必要がある。今回では知的障害者に好評だったサインシンガー、精神障害者や発達障害者に有効だった言葉のゲーム、どの障害でも盛り上がったチャレンジランキングはファシリテーターやサポーターが学びの効果性のカギを握る。

これらの内容が整理できれば時間配分は状況に応じて変化することは可能である。またレクレーション学習は3年を通じて行ってきたオリエンテーションで知らない者どうしが最初の段階で知り合い、ふれあい、緊張感をなくす場づくりが極めて重要である。

以下は7年目までの計画を示してきたものであるが3年目の本年は前述のように計画の変更があったものの、これからの4年目～7年目は、オープンキャンパスにウェブでの講義を多用することが付加されるものの、基本的な考えとフローは変える必要はないと考え、本事業を受けて今後の計画として提示する。

■7年目までのアウトカム目標

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	7年目
オープン キャンパス 事業	和光市及びさい たま市で開催/地 域市民団体・ NPO・福祉団体 と連携=A	A及び伊東市、 佐久市し地域モ デル構築=B	埼玉県内で浦和 大学・県教育委 員会で開催、B モデルで甲府市、 松本市で開催	高等教育+自治 体モデル=Cで 継続開催（長野、 山梨、埼玉基 点に5か所程度）	「障害者とも に学ぶ」ABCモ デル発信し10か 所で開催（後方 支援含む）	「障害者とも に学ぶ」ABCモ デル全国で開催、 研究会発足、全 国大会も
訪問講義 事業	調査研究	実践研究4人 カリキュラム開 発検討	実践研究及び ネットワーク化 向け全国会合	ネットワーク化 の運用・地域で の活動活性化 コンテンツ提供	ネットワーク化 拡充で全国広く で学習可能とす る基礎づくり	全国で訪問学習 が可能に
共生社会 コンファ レンス		コンファレンス 実施（関東甲信 越）	コンファレンス 実施+佐久市と 伊東市で報告 会・研究会	コンファレンス と各地で研究会 （エリア5か 所）	コンファレンス と各地で定期研 究会（エリア7 か所）	コンファレンス と各地の研究会 が融合し議論の 質向上
ガイド ライン作成	調査研究	ガイドラインの 基礎検討	ガイドライン作 成（初版）	ガイドライン普 及（研究会）	ガイドライン普 及と実践	ガイドライン改 定（研究会）

10-2 まとめ

初年度、2年目の事業を経て抽出した課題に対応することを念頭に最終年となる3年目ではゴールに向けての力点が明確になり始まったものの、思うように動けない中での実践研究となった。2年を通じての事業開催と共生社会コンファレンスの開催で各地域での「障がい者の学び」に対する認知も確実に増えて、地域における「学び」を展開したい市民グループから実施を要請する声も出された。

この状況下でも参加人数等を制限をしながらもオープンキャンパス等が実施できたのは、大きな収穫であったと考えている。スタイルの違う学びを行うことで、学びのバリエーションも広がった。今後は各地の地域モデルを確立し持続可能な形を作っていくための支援を行う立場となりたいと考えている。

また重度障がい者に対する学習支援は当事者のニーズは変わらないものの、周辺の訪問看護関連のサービス事業者や医療機関などで外部との接触を禁止する中で活動も制限がかけられたが、十分な対応の上で学び続けたことも大きな収穫であり、何よりも初めて重度障がい者の学びの活動を全国でネットワーク化できたことは大きい。

共生社会コンファレンスは昨年に続き2回目の開催となったものの、昨年の東京大学での集合型で行ったことは事例にはならない、ウェブでの開催を余儀なくされ、新しい形での開催となった。これも新しい生活様式の中での対応として大きな経験と受け入れたい。何よりも形はともあれ、参加した方々が新たな発見や学びがあったことはアンケート調査等から得ており、これらすべては本事業の成果と考えている。

10-3 次年度に向けて

2018年度から一般財団法人福祉教育支援協会として受託し3年間で得た知見を基礎として、教育事業を一般社団法人みんなの大学校に移管し、本拠を東京都国分寺市に移転したことに伴い、2021年度は同法人として文科省の委託研究を受託し、新型コロナウイルスへ

の対応など時代に環境に応じながら国分寺市と協働し障害者の学びの拡充に向けて事業を行っていききたい。2021年度も新型コロナの影響は免れないことを念頭にし、障害者に向けての生涯学習を提供することを中心にした事業計画を立案し、以下3つを重点項目として行っていく。概要は以下である。

(1) ウェブでつながる要支援者への学び(新規事業)

「高等」教育をウェブ上で同時時間性を確保して行うことで、障害者で気軽に学びができる、学び始められる枠組みを提供する。さらに精神疾患や引きこもりなどの方々、事業所でもモチベーションが上がらない方の、社会移行に向けてのきっかけにもなると考えている。

対象者：オンライン上で年間200人程度

手法：講師の先生が週1度のペースで講義を行う。ペースは4-7月、10-1月の前半後半で15回ずつ。

想定講師とテーマ

テーマ	担当	肩書など
発達心理学	山本登志哉	発達支援研究所所長
コミュニケーション	引地達也	みんなの大学校学長
哲学と国際社会	アルン・デソーザ	上智短期大学非常勤講師
経済とくらし	内村治	国際会計士
ITの開発	西村啓太郎	グラノラジャーニー代表取締役
ボードゲーム	河辺朋久	みんなの大学校西宮校施設長
ヨガ	加藤有紀子	ヨガインストラクター

上記の講義のうちいくつかを「オープンキャンパス化」することを検討

(2) 重度障害者への学習支援(継続事業)

医療機関や自宅で医療的ケアを受けている人のうちで「学び」への希望に対し、訪問で行う学習支援・講義を引き続き行う。ウェブ上の学びが可能な場合は1のオンライン講座に参加してもらおう。

対象者：2-4人

手法：講師の先生が週1度のペースで講義を行う。ペースは4-7月、10-1月の前半後半で15回ずつ

想定学生と担当者

学生	居住地	担当者	回数
松本勇成	埼玉県川越市	引地達也	30回
岩村和斗	杉並区	下川和洋、引地達也	30回
新規Aさん	国分寺	引地達也	30回

(3)「第2回医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」(継続事業)

昨年の第1回に引き続き全国の重度障害者の学習に関する団体を集めてのフォーラムを東京都内で開催する。東京都小平市のNPO法人地域ケアさぼーと研究所と共催、東京都後援で参加者は会場が50名、オンラインが200名だった。また啓蒙のためにパンフレットを作成し配布している。

■フォーラム開催概要

メイン会場：国立オリンピック記念青少年総合センターもしくは国分寺市内

参加者想定：集合型100名程度、オンライン200名程度

実施時期：2021年度秋ごろ

1.1.3 3か年の総括

本事業は2018年度から開始したが、当初は集合型のオープンキャンパスを行うことでノウハウを蓄積し、全国に波及できるモデルを作ることを中心しながら、学びのニーズを探るために全国の福祉事業所に調査をしたところから始まった。

以下が開始当初の3年間での展開イメージである。

	期間の位置づけ	主な内容	成果イメージ
1年目	研究開発	オープンキャンパス開催 (本事業)	講義内容等のフォーマット化等(本事業)
2年目	実証	オープンキャンパス開催 ・和光市モデルの確立 ・他地域での開催 訪問型講義の実施 連携型講義の実施(本事業外) 法定外「大学」で検証(本事業外)	1年目の成果を効果測定し、和光市での継続実施と確立、他地域での展開、訪問講義の可能性の追求により、各コンテンツの充実と形を提供する。さらに展開可能な型をフォーマット化、映像での遠隔地参加やDVDによる時差参加の可能性を提供
3年目	展開	オープンキャンパス開催(埼玉県、他地域) カリキュラムは大学校で検証 コンファレンスの普及 訪問型の普及と連帯 DVDによる他地域開催 訪問型や連携型などのさま	全国で障害者の学びが集合型や訪問型等、方法に応じてコミュニティ化して、そのコンテンツやフォーマットを提供できる。各地での実践が広がり、大きなコミュニティと小さなコミュニティが有機的に交わる「障害者の生涯

		さまざまな形で、どんな障害の方でも学習できる環境とするための取組み	学習」が展開する
--	--	-----------------------------------	----------

この取組は現地調査で重度障害者への学習支援の必要性が浮かび上がり、2年目からその対応とネットワークも重要なミッションとなり、加えてコロナ禍の対応もありながらも、集合型を継続的に行う基本姿勢は3年間の柱となった。

オープンキャンパスについて1年目は、地元となる埼玉県和光市での開催と、地域でのつながりを作りコミュニティづくりに重点を置き、2年目は、1年目のノウハウを他の地域に派生させようと長野県佐久市、静岡県伊東市での開催を試みた。さらに3年目は、地域だけではなく、高等教育機関とのつながりなど、社会カテゴリーの多様化にもつながる枠組みづくりにも取り組んだ。

これらすべてはノウハウとして蓄積しており、3か年の事業を通じて、どこの地域のどんなコミュニティに対応できると考えている。

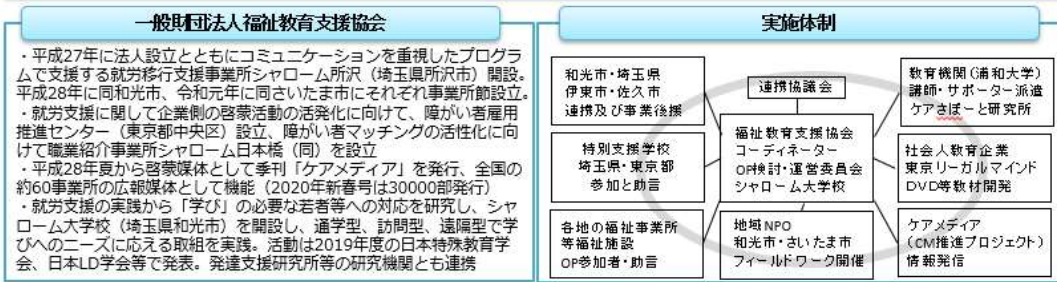
以下は各年度の事業の全体図である。

■2018 年度実施事業全体図



■2019 年度実施事業全体図

一般財団法人福祉教育支援協会(埼玉県)における学校から社会への移行期の生涯学習に関する取組



「オープンキャンパス」学習プログラム構成と成果

基礎教育ステージ	関わりあいステージ	実践教育ステージ
<p>第1回 生き物って何? みんなでDNA抽出実験(和光市)</p> <p>約60人が参加</p> <p>伊東市での音楽コミュニケーション</p> <p>基本構成 10時~12時 オリエンテーション⇒授業・講義(アクティブラーニング)⇒感想のシェア ※佐久市・伊東市 10時~14時半 1オリエンテーション 2講義 昼休憩 3講義 ワーク 4感想</p>	<p>第2~3回 学ぶを楽しむ/体を使って音楽コミュニケーション(佐久市及び伊東市※写真)</p> <p>第4回 見沼たんぼでおにぎりゲーム(さいたま市緑区) NPO 法人見沼じゃぶじゃぶラボ</p> <p>第5回 五輪を知りみんなで清掃(和光市)和光おもてなし隊</p> <p>第6回 冬の畑からできるもの焼きいもを囲んで(さいたま市緑区) NPO法人のらんどあぐり</p>	<p>第7回 ビジネスマナーを学ぶ(和光市)</p> <p>五輪を知る</p> <p>見沼たんぼで「わら投げ」大会</p>

「訪問講義・学習」実施と成果

学習者(学習場所)	学習内容
20代男性(東京都・国立精神神経医療センター)	PCの作曲機能を使っての作曲、SNSでの発信⇒
50代女性(東京都・東部医療センター)	英語、ミソンの編み物等の創作⇒
20代男性(東京都・自宅)	世界の国、人類の歴史と日本の歴史
40代女性(東京都・自宅)	詩や童話の創作、科学実験等

1回の講義・学習は90-100分、担当者は特別支援学校の元教諭等

成果

- 和光市での開催、静岡県伊東市、長野県佐久市での開催を通じて地域での「市民と障がい者」の学びあいの形を提示。今後の地域展開の基礎を構築
- 自宅や医療機関にいる重度障害者の学びのニーズからの必要な学習内容の調査・分析、それに基づく教材等

今後の展開 各地域の自治体・市民グループに市民と障がい者が学びあう企画・運営・実施のノウハウ、コンテンツを提供し展開・定着を目指す。

■2020 年度実施事業全体図

一般財団法人福祉教育支援協会(埼玉県)における学校から社会への移行期の生涯学習に関する取組



これらの成果を今後も全国で展開・拡充させながらさらなるノウハウを積み上げ、全国で

障がい者が学べ、幸せを感じられるような社会づくりに寄与していきたい。

参考資料

本事業に関するインターネット上で掲載されたコラムは以下である。「メールマガジン まぐまぐ」「ニュース屋台村」が主な掲載サイトであるが、ほかの掲載サイトに転載しているケースも見られた。執筆は引地達也である。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来----2020年6月24日 第344号

多岐に渡る共生社会に向けての議論を絶やさず行うこと

今年2月14日に文部科学省との主催、東京大学との共催で行われた「共生社会コンファレンス」のダイジェスト動画がようやく公開された。

「文部科学省主催『共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 関東甲信越ブロック～障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、生涯にわたる学びの場の拡充に向けて～』」ダイジェスト <https://youtu.be/tJpNYL3DLQw>

新型コロナウイルスの影響に怯えつつ、集合型で開催にこぎつけたコンファレンスだが、その後のコロナ禍により、学んだこと共有したことのアフターフォローが出来ないまま時間が過ぎた。始まった議論の熱が冷めないうちに次の一手を、という思いは、いつしか出された論点を深く熟考する時間となって、2月の直後よりも熟成された見解も湧き出てきている。この熟慮した「障がい者の学び」を今年度の取組に活かしていきたいと考えている。

今年のコンファレンスの開催前、メインのシンポジウムのタイトル設定で議論になったことはすでにこのコラムで記した通りだが、コーディネーターの津田英二・神戸大教授、発言者の牧野篤・東京大教授、星加良司・東京大准教授、そして私の中でそれぞれの立場からの言葉と見解が示され、文科省の意向を抑えつつ、結果的に「障害者発・新しい学びの提起—『健常者』中心の学びを超えて」となった。このコンファレンスの参加呼びかけのために、私は関東甲信越ブロックのすべての都県教育委員会の担当者を訪問し、直接開催の意義とシンポジウムに込められた思いを伝え、そこから始まった各自治体の担当者との議論はどれも興味深いものになった。ここに言葉を交わすことの大切さを実感し、今年度事業ではコンファレンスのアフターケアとして「研究会」を実施しようとの発想にいたった。

健常者を超えるところに新しい「学び」の世界がある—。今年度のコンファレンスはそんな思いで締めくくったものの、社会は放っておくと障がい者を分断化した世界に閉じ込め、こちらとあちらを分けようとする。テレワークが推奨される中では、関連の機器の使用が苦

手であったり、その機器が手に入らない「情報弱者」になる可能性のある方はおいてけぼりだ。コンファレンスの分科会では「社会教育が取り組む生涯学習支援」「『高等』教育におけるインクルージョン」「カフェを介した『共生の学び』の実践」「エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ」「当事者研究がもたらす学び」が議論されたが、各項目は社会の中でメジャーではなく周縁に置かれた存在だから、ここで生まれた声を今につなぎ社会の真ん中に近づける絶対に必要なことで、それは社会保障を充実させる社会資源になるはずだ。

宇沢弘文氏の「社会的共通資本」（岩波新書）は「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置」を意味しているが、分科会のテーマが「すぐれた文化」「人間的に魅力」に必須の項目であるとの認識に立つと、なおさらに、始まったそれぞれの議論を止めてはならない、と思う。まずは来年予定されるコンファレンスを前に2月実施のコンファレンスを受けての「研究会」を、首都圏を発信元として、全国とをつなげ実施したい。昨年、オープンキャンパスを開催した長野県佐久市と静岡県伊東市の関係者とも実践の継続をお願いしながら、この研究の中でもつながり続けたい。実践と議論を共有し言葉を交わし続け、声を言葉にしながら、今年度のコンファレンスには成長した言葉と障がい者の学びの形を示したいと考えている。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来----2020年9月30日 第358号

コロナ禍で促進する「オープンキャンパス」で障がい者の学びの足跡をつくる

文部科学省の委託研究事業である市民と障がい者が学び合うオープンキャンパスは今春から新型コロナ禍の影響とにらみ合いをしながら、どのように「オープン」して混ざり合うかを考えてきたが、コロナ禍はおさまりそうもなく、結局は小さく集まり、ウェブで広くつながる、を基本方針に企画することになった。秋から始まるそれらオープンキャンパスを開催するにあたり、昨年までは障がい者施設の支援者に向けて、入所もしくは通所する障がい者が「新しいコミュニティに参加すること」を呼び掛け、生涯を通じた「学び」でつながる可能性を意気揚々と語っていたのだが、今年はその掛け声も封印されてしまった。ここで不利益を被るのは、集まる事が出来なくなった障がい者たちである。ウェブ上でのつながりにすぐには変換できない障がい者の現実に対し、何とか克服できないか、を考えながら、今年の「集合と「リモート」のハイブリットな企画は始まる予定だ。

事業の正式名称は「特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」で、分かりやすく「障がい者と市民が学びあうオー

「オープンキャンパス」と呼び掛けている。文部科学省の障害者生涯学習推進室主管で3か年事業中、今年が3年目。「市民と障がい者」の学び合いの集大成として、埼玉、長野、山梨各地の教育機関や事業所・団体と連携して実施予定の企画には「学び合い」を推進したいという地域の熱い思いも込められている。今年最初に行われるオープンキャンパスは、東京五輪の射撃種目の会場となっている埼玉県和光市での「五輪を知って楽しもう」（10月17日午後2時—4時、和光市中央公民館）だ。昨年度も五輪前年で開催した企画だが、五輪で訪れる外国人を快く迎え入れようと活動する「和光おもてなし隊」が来年開催を信じての活動の一環として五輪に関するゲームとクイズを楽しむ体感プログラムを予定している。

長野県松本市は障がい者の学びの機会を作っている「ふろじょくとギフト実行委員会」と協力し『『生きる』ってなんだろう。あなたの『生きる』をみんなで探そう』（10月25日午前10時—午後2時半）をテーマに、松本市中央公民館Mウイングをメイン会場にウェブでの参加を広く募っている。内容はリトミック体操を松本市立病院の方々からレクチャーを受け、歌手の強力翔さん出演でサインシング『世界に一つだけの花』をつながった方々と身振りと共に一緒に歌う予定だ。山梨県笛吹市では、市民と障がい者の学びの場「オープンキャンパス+WEB in やまなし2020」（11月28日午前10時—午後2時半）として、福祉型事業専攻科ユニバやまなしとともに、同事業所（山梨県笛吹市石和町駅前12-3）をメイン会場に実施。「チャレンジド・ヨガ」やピアノコーラスグループ、サームがナビゲーターを務める「声を出してメディアコミュニケーション」を行う。

さらにリモートで福祉事業所がチームとなって身近なものを使ってのゲームでランキングを競い合う企画は、浦和大学をメイン会場に、レクレーションが専門の片山昭義・浦和大学教授をナビゲーターに予定している。「チャレンジランキング！リモート参加でゲーム大会」（11月7日午前10時—午後2時）で用意しているゲームは「紙コップ積み」「ニチレクボール」「ペットボトルダーツ」等10種目。ゲームにはちょっとした道具が必要だが、順位付けを行うために、使用する道具は規格の統一が重要なため、主催者側から道具一式は送ることになっているため、参加チーム数は限定している。当初は福祉事業所を対象にしていたが、公民館や他大学のゼミ室からの参加表明、支援者からの見学申込がある。リモートでの学びの手法への関心からだと思われるが、そのつながりも大事にしたい。社会の変化に障がい者の学びが取り残されないためにも、オープンキャンパスの営みを今年度後半に多くの方の参加の上に成り立ち、来年度以降の「学び」につなげるための足跡を残したい。是非、この学びにご賛同・ご参加ください。

チャレンジランキングで自覚するインクルーシブ関わり

障がい者と市民が学び合う場を「オープンキャンパス」と称した文部科学省の委託研究は、3か年事業の最後の今年、いよいよ残り2回となった。コロナ禍の中、リモート融合型の模索や集合型でのリスク回避など、事業開催の入口に気を取られ、肝心のカリキュラムに集中できないもどかしさもあつたが、11月7日に浦和大学をメイン会場にしたウェブ型のチャレンジランキングは、体を使ったゲームの持つ場をコミュニティ化する力を感じた内容であつた。ゲームの内容は知的障がいでも出来るシンプルなものばかりで、そのシンプルさが面白い。「ランキング」だから順位付けするのが基本だが、結果的に競い合うことになるから、その戦いが殺伐とした雰囲気にならないようにするのは、周囲の人の力量が必要。ゲームとしては、誰もが楽しめる工夫にはなっているが、それで錯覚してはいけない。誰もが、理想ではなるが、ランク付けが嫌いな人もいるし、苦手な手作業もあるかもしれない、だから誰もが、を緩やかに考えながら運営には工夫がいる。

今回、出場したチームは就労移行支援事業所シャローム和光、みんなの大学校、浦和大学、新潟青陵大学の4チーム。ズーム会議システムを使っての交流は、参加者が増えるほどすべてを共有しながらの運営は困難になるからちょうどよいチーム数だ。種目は「3人制サイコロ同じ目出し」「豆30粒つまみ」「コップ積み」「紙ちぎりのぼし」「ピンポンカップ」「カウンターチャレンジ」「サイコロ1出し」「閉眼片足立ち」「ターゲットボール」。どの種目を名前だけ聞けば何をやるかがわかるようなものばかりだが、重要なのは、ゲームで使われる道具が統一化されていること、ファシリテーターのルール説明を共有することである。「紙ちぎりのぼし」はA4の紙を細く手で切って3人が交代で1枚の紙を「最も長くする」というもの。3人の個性が出るから笑い声も響く。これらのゲームの道具は紙コップや大きめのサイコロ、ピンポンボールやカウンターなどで、現在では100円均一のショップで購入できるものばかり。それでも規格の統一化が必要なので、参加チームには道具一式を各会場に送付した。

同じ道具で同じルールで、ファシリテーターの説明の上でスタートするゲームには、自然と緊張感が高まり、そして歓声が上がる。楽しむ、は適度の緊張があつて、それに瞬間的に没頭することは、面白いことなのだ。ゲームはその枠組みを整えることで、誰が、というよりも誰もが公平に楽しめる素地が出来ることになる。しかし、説明に対しての理解のスピードは人それぞれだから、この対応への福祉事業所のスタッフの動きには刮目させられる。知的障がい者には、一度やって見せる、そしてやってもらう、それが合理的な説明である。福祉事業所で身に着けた職務上の所作は、サポート役として事業所を訪れた学生にとっても大きな学びになっただろう。当事者が理解する時間に、周囲の利用者は待つことになるが、周囲は練習したり戦略を練ればよいのだが、これらのゲームはシンプルなので戦略がなか

なか練りにくい。そのために「知的の障がい」はあまり勝敗を左右しないし、戦略的にならないことは、小賢しくならないことでもあるから、それがいい。

そんな要素でチャレンジランキングが、障がい者と市民が学び合うのに適した内容であること、それがリモートでもある程度出来ることは分かったのだが、課題もある。やはり勝負をするには、審判が必要だが、その審判の基準があいまいだと、すっきりしない人も出てくる。障がい特性によっては、公平であることにこだわる人もいるだろう。障がい特性とは別にジャッジで「すっきりしない」ことが1つでもあれば、全体を受け入れられなくなるのは障がいとは関係ない。ゲームを遂行するにあたり、チーム内のコミュニケーションでもゲームへのモチベーションが違えば、意見の食い違いも出てくるだろう。それを調整する支援者やファシリテーターの力量も試される。今回はみんなの大学校が始めた「今、ここで」という同時間性の重要さを学ぶ、よい機会ではあるが、その本当の意味を知るまでには、まだまだチャレンジランキングを積み重ねていかなければならないと思う。次回の企画では、いろいろな事業所と交流していきたい。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来---2020年11月18日 第365号

重度障がい者の生涯学習に打ち震えるコミュニケーション

2020年11月13日、「第一回重度障がい児者の生涯学習フォーラム」が東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年センターで行われた。センターをメイン会場にして入場者は50人に制限し、そのほか参加者はズーム会議を通じてのオンラインでの参加となったが、それがかえって全国規模の大会になった感がある。フォーラムは文部科学省の障害者の生涯学習を推進する委託研究事業の一環で、昨年の計画段階では通常のホールで大人数を集めての初めての全国規模の集会を目指そうとしたが、やはり重度障がい当事者が遠くまで移動するには困難があり、集合は限定的になってしまう悩みがあった。それがコロナ禍によるリモート開催で、北海道札幌市の医療法人稲生会、松山市の愛媛大学での取組が遠隔からスムーズに発表され、参加者も広がりを見せ、重度障がい者への「学び」の全国的なネットワークが構築できる可能性を確認ができたと思う。

フォーラムでは、これまで地道に活動してきた飯野順子・NPO法人地域ケアさぼーと研究所理事長が挨拶に立ち、文部科学省 総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課の小林美保・障害者学習支援推進室長が政策の説明をし重度障がい者の生涯学習への取組にも対応していく姿勢を示した。「訪問型の医療的ケア児者の生涯学習の実践と課題」と題しての各地からの報告では「訪問大学おおきなき」の相澤純一・NPO法人訪問大学おおきなき

理事長、「訪問カレッジ Enjoy かながわ」の成田裕子・NPO 法人フュージョンコムかながわ・
県肢体不自由児協会理事長、「みらいつくり大学校」の土畠智幸・医療法人稲生会理事長、
「訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学」の荻田知則・愛媛大学教育学部特別支援教
育講座教授、「ひまわり Home College」の藤原千里・NPO 法人ひまわり Project Team 理事長
が登壇した。当事者のニーズに保護者や特別支援学校の教員らの思いが活動につながって
いる活動は、やはり資金面での持続性が課題であることも指摘された。

私が長々と省略をせずに参加者のフルネームを書くのは、これら市民の集まりから始ま
った取組が一人でも多くの必要な方に知ってもらいたいとの思いからで、保護者がインタ
ーネット検索で藁をもすがる思いで、教育の場を探してインターネットで探しに探した、と
いう話はよく聞くし、結果的に私の名前が引っかかって、そこからつながった例もある。特
にNPOで運営している3法人の活動は多くの人に届いてほしい。また、この分野で「医療」
「高等教育」の立場からアプローチしているのが札幌市から発表した稲生会の土畠智幸理
事長と愛媛大学の荻田教授である。土畠理事長が主宰する「みらいつくり大学校」は学問の
面白さを伝えようとの情熱が「楽しそう」な雰囲気となって伝わってくる。ハイデガー哲学
をテーマにしている点も「素敵じゃないか」と思ってしまう。愛媛大学では「大学」という
枠組みを利用しての学びの場の拡充にも自信をのぞかせたし、ここで学ぶ学生の「インクル
ーシブ度」が上がるのは間違いないだろう。

これら各地の取組をそれぞれの地位特性やつながる仲間によって形態はさまざまであり、
何よりも障がい当事者のニーズを考えて形作られるのがこの分野の最大の特徴だから、画
一的にはならない。そのならないそれぞれの「いいね」をつなぎ合わせることで、お互いが
支えあいながら、時には補完しあいながら、重度障がい者の学びは作られるのだと思う。そ
の中にあって、みんなの大学校は福祉サービスではなく、ウェブでどこでもつながれる点を生
かして、あらゆる重度障がい者の学びに対応していきたいと思う。ちょうど今日は私が西宮
にいて学生が埼玉県にいてウェブを使つての遠隔で講義を行ったが、ほぼ口をかすかに動
かして反応する学生は、私の講義で多用する4択質問に答えの選択肢を私が口にすると、彼
は該当する答えに口を動かすしぐさで意思を示してくれる。それは、間違ったり、正解だつ
たりするのだが、そのやりとりは、とても面白いし、教える側にとっても心が打ち震えるコ
ミュニケーションである。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来---2020年12月2日 第367号

「表情」で分かる成長の軌跡—山梨の安心できる「学び」の場から

新型コロナウイルスにより集合型のイベント開催が難しい中で行ってきた本年度のオープンキャンパスは 11 月 28 日に山梨県笛吹市の福祉事業型の学びの場「ユニバやまなし」での開催が最後の日程となった。当初はみんなの大学校の学生やスタッフが山梨入りし交流を楽しみながらオープンキャンパスを盛り上げる予定だったが、再度のコロナ患者増加の中で、実際に山梨入りしたのは、ファシリテーターの私と音楽でコミュニケーションを学ぶカリキュラムを担当する河辺朋久さんのみとなった。東京から移動する予定だった講師のピアノコーラスグループのサームの 2 人とみんなの大学校の学生はリモート参加。インターネット環境が原因でやりとりがスムーズにいかない場面もあったが、山梨の学生らは「新しい様式のリモートができてよかった」という反応を見せた。新しい生活様式に合わせる、というモチベーションが奮い立ったようでもあるが、私はその発言の中に「学び」での成長を感じている。

ユニバやまなしは、みんなの大学校の前身であるシャローム大学校と同じ昨年開校した新しい学びの場で、少人数をじっくりと、スタッフともに学ぶスタイル。そこには 3 つの「場」であることがテーマとして記されている。それが「仲間といっしょに青春を楽しみ、自分を見つける場」「自立した社会人になるための学びに挑戦する場」「自分に自信をもつ場」である。この取組が確実な成果を出していることは、ユニバやまなしが外部のディレクターに依頼して制作したプロモーションビデオ (PV) であらためて実感できた。これは「PV」だと言いながら 20 分もあるから、ショートフィルムかドキュメンタリーの類であり、そのメッセージ性もまたイメージの PV というよりは、文脈で語るフィルムの印象である。そこには支援が必要な方にとって「学び」場の有効性を語るのには雄弁な場面、言葉、表情を提示していた。聞くと、東京キー局の報道番組を担当したこともあるディレクターによる作品で、短時間の間柄では得られない言葉が家族と本人から発せられ、そのエッセンスを的確に表現している、その技術に敬意を表しつつも、やはり通常では出てこない当事者や家族の本音が示されている点で社会はそこに刮目すべきだ、と叫びたくなる「PV」だった。

そこには 2 人のユニバやまなし学生が描かれている。神社が好きな学生 A さんは神社の本を読み、神社を訪れ、神事に関する知識は豊富で自宅に神棚を設けて、祝詞をあげ、静かに手を合わせる姿は、その思いの強さを証明するような佇まいとなって、立ち現れる。就労継続支援 B 型事業所からユニバやまなしへ通所したことで、母親は「自宅と事業所の行きかえり」の生活パターンからの転換は、結果として将来が明るくなったとの見解を示す。その 1 つが A さんの「神主になる」という明確な目標だ。自分の夢を口にするのは置かれた環境の「安心さ」があってこそ言えるものだから、A さんは安心して青春の中において、将来に向けて確実な一歩を踏み出した後の夢の途中にいるのかもしれない。さらに学生 B さんは最近、普通自動車運転免許証をとるために自動車学校に通い始めた。山梨県郊外の交通不便な山間地に住む B さんにとっては、通学も通所も駅までの送り迎えが必要であり、頼みは家族

で唯一運転免許証を持つ祖父の運転だった。やがては自分が一家の大黒柱として、運転もしなければいけない。自動車学校入学に「試験があると思った」という B さんが支援者から「試験はない」と告げられると安心した様子で、新たな一歩に進む表情が画面から伝わってくる。

ユニバやまなしでは「模擬デート」として、男女のつきあいに関するレクチャーを実施し、そのレクチャーが実際に役立ったのが B さんのケースだ。鉄道好きの B さんは、インターネットで鉄道好きの同世代の女性と知り合い意気投合し、オフ会で会うことに。模擬デートでの「学び」を生かし、鉄道好きの共通の趣味も手伝って、B さんは女性と交際を続けている。そんな PV の中で、彼らとオープンキャンパスで会う彼らは私にとって眩しいほどの未来があふれている。昨年見た彼らと今の彼らは確実に印章が違って、その変化は学びという魔法の効力を示している。神社好きも鉄道好きも、その嗜好を「許される」のではなく「歓迎された」ことで、前述の気持ちに「安心」が生まれたことは大きいのではないだろうか。その「安心」を作るための確実な方法を知り、実践するために何をしていけばよいらう。今後もユニバやまなしと関わりながら学生の今後を見させてもらいながら、その「安心」に向けたプロセスを構築していきたい。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来----2020年12月16日 第369号

「共生社会コンファレンス」で伝えたい学生の学びへの想い

今年度が2回目となる文部科学省との主催事業「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」は2021年1月17日(日)開催で、ほぼ概要が固まった。昨年度は東京大学を会場にコロナ禍が深刻化する直前に集合型でメインのシンポジウムやワークショップ、分科会を全面的に展開し、共生社会の学びの観点で、精神障がいや知的障がい、身体障がい者の各種障がいはもちろん、重度障がい等の程度や特性等多岐にわたって対応する内容のプログラムとなった。これは、障害者権利条約の批准を受けた障がい者の生涯学習の保証に向けた取組を模索する上で重要な一歩となったが、今回はコロナ禍の中、行政や地域が継続して実施できる生涯学習に焦点を当ててプログラムを構成することになった。さらに、集合型の予定がハイブリット型に変更し、最終的には講演者と分科会のコーディネーターのみが「メイン会場」である東京都国分寺市の本多公民館から発信する「ほぼオンライン化」で開催することとなった。

今回の共生社会コンファレンスの副題は「地域で共生の生涯学習を展開するために」。目

標は昨年と同様に「障害理解の促進」「障害者の学びの場の担い手の育成」「障害者の生涯にわたる学びの場の拡大」の3点とした。今回は、「生涯学習」との文言を明確に入れたところに特色がある。対象者は、障害者本人はもちろん、学びの支援者・関係者、関心のある人、都道府県・市町村職員、社会教育主事、公民館・図書館・博物館職員、特別支援学校等教職員、大学関係者等。「担い手」と「場」を確保するために、対象に直接呼びかけたい思いもにじむ。午前10時から午後4時のプログラムで、午前の全大会では、小林繁・明治大教授が「君と同じ街に生きてーインクルーシヴな学びへ」と題し基調講演する。さらに「レクチャー」として、私が「コロナ禍におけるオンラインの学びの可能性-コロナ禍での障がい者のリモートの「学び」の実践と工夫」をテーマに、4月からリモートで行っている「みんなの大学校」でのカリキュラムをはじめとする新しい学びの実践を報告することになった。

午後からの分科会は4つに分かれ、「障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～」では、昭和30年代後半から続く青年学級の歴史を振り返りながら、渋谷区と目黒区の事例報告をもとに今後の取組を考える。「知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割」（コーディネーター：平井威・明星大客員教授）は大学での生涯学習支援がテーマで淑徳大や東京学芸大、静岡大からの報告が予定されている。「カフェを介した『共生社会の学び』の実践」（コーディネーター：兼松忠雄・全国喫茶コーナー交流会事務局長）は「めだかふぁみりい」（埼玉県川口市）、東京都立志村学園の「Café de NOVICE」からの事例報告をもとに地域の中で障がい者もほかの人も心地よい社会の在り方を考える企画である。そして、私がコーディネーターを務める分科会は「当事者の言葉からデザインする新しい『学び』ー『学ぶ』を体感する学生シンポジウム」とした。

この「学生シンポジウム」は、これまで学びを先導する側が登壇するケースばかりが目立ってきたところから大きく考え方を变えて、学生・当事者自身が自らの学びを語り、学生どうしが意見や考えを交わす内容にすることになった。「支援者側は出ないほうがいい」。こんな話になるのも、関東地方で先駆的に障がい者の学びを展開している、茨城県つくば市の福祉事業型専攻科「シャンティつくば」の船橋秀彦先生、東京都練馬区の「iLDK」、大森梓さん、同じく練馬区の「モアタイムねりま」、永田三枝子さんの柔らかい発想と学生が中心の考え方を基本としようとする「当たり前のような信念」があつてこそで、その太い幹から派生したそれぞれの学びの場の「面白い」活動の数々は常に私の目標ともなっている。各学校からの学生からどんな言葉が飛び出してくるのだろうか、とても楽しみな反面、人前で話すとなると、普段のおしゃべりが発揮できない懸念もあり、各地からのリモート参加であるにせよ、その場をリラックスできるものにしなければならない、と考えている。これは、支援者側が試されている事案である。

共生社会コンファレンスの「学生」の声は切なく、突き刺さる

1月17日に2020年度の共生社会コンファレンス in 関東甲信越が開催された。文部科学省との主催で昨年に引き続きの2回目で、昨年東京大学を会場に集合型で行ったコンファレンスとは様変わりし、講演者や登壇者は東京都国分寺市の本多公民館から発信するオンライン開催となった。会場は静かだが、コロナ禍においてこそ、障がい者の生涯の学びを置き去りにしないよう、力強く伝える機会になったのではないかと思う。私自身、社会が困難にある時こそ、「弱者になる可能性」に対応する役割を担おうと動いてきたことを全体会のレクチャー「遠隔の学びの可能性」として切実に訴えた。障がい者の生涯学習というテーマも社会では整理されていない中で、遠隔の可能性をさらに求めるのは「大変」かもしれないが、それが自然にできるようになってこそ、共生社会が成り立つのだと思う。

午前中の全体会では、文部科学省の小林美保・総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室長が政策の説明に立ち、基調講演として小林繁・明治大教授が「君と同じ街に生きてーインクルーシヴな学びへ」と題し、社会教育を中心とした障がい者の学びについての報告を行った。コロナ禍における学びの可能性を話した私のテーマは「コロナ禍におけるオンラインの学びの可能性ーコロナ禍での障がい者のリモートの「学び」実践と工夫」。コロナ禍の前から取り組んできた名古屋の見晴台学園大学と新潟市のKINGOカレッジとの遠隔講義の様態を伝え、ウェブでつながるみんなの大学校として大事にしている「同時性」「双方向性」を強調して、その実践を解説した。新しい生活様式の中で確実に進む情報ツールの発展に、「使えない」ことで弱者になるのではなく、「使う」環境を整えながら、障がい者の生涯学習は充実させる責務が社会にあるのだと強調したのは、誰もが「リモート化」という新しい流れに乗っていける保証のない不安な中にあるからこそ、響いてほしいと思うからである。

午後の分科会は4つに分かれ、主に地域の公民館等を舞台にした学びの場を考えていく「障害者青年学級の学び～東京都特別区の事例から～」。大学をはじめとする高等教育機関との連携を考える「知的制約のある人々の生涯学習支援に果たす大学の役割」。就労継続支援B型事業所などが行う地域のカフェ等を舞台に学びを展開する「カフェを介した『共生の学び』の実践」。そして、私がコーディネーターとなった実際に学んでいる方々が登壇者として思いを語ってもらう「当事者の言葉からデザインする新しい学びー『学ぶ』を体感する学生シンポジウム」である。支援者がわき役となり、学びの紹介や自分が今やっていること、なぜ学びに至ったのか、面白いプログラムは何か、学びで自分が変わったことなどを、

それぞれに語ってもらったが、画像を見せながらの発表や作文の発表方式、インタビュー形式など様々な表明の形にも、やはり新しい風を感じつつ、楽しそうな学びの数々が紹介された。

コンファレンス全体はズーム会議を使って行われたが、この分科会だけは学生が主役、との基本方針のもと、それぞれの生の声を届けようとの企画がズーム会議だけではなく、気軽に見られるようにと、ユーチューブでの視聴も可能とした。登壇したのは東京都練馬区の「モアタイムねりま」から3人、同練馬区の「i-LDK」の2人、茨城県つくば市の「シャンティつくば」の1人とみんなの大学校の1人。それぞれの生き生きした学びの様子が行き交い、生の声が心に響き、そして考えさせられもした。やはり、声から学ぶのが最も深く心に突き刺さる。この言葉の数々は生き生きとして、そして切なくて、分科会だけにとどめておくのはもったいないと思い、一部は全体会のクロージングセッションで発表した。そのキーワードは「学ぶことにより、自分の人生を生きようと思えるようになりました」だった。この分科会の詳細は後日報告したいが、限定的にユーチューブで公開する予定だ。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来----2021年1月27日 第375号

インクルーシブ教育は交わなければわからない

インクルーシブという言葉が頻繁に使われるようになって、私も学びの実践の中で重要なキーワードであるとの認識のもと、みんなの大学校で学びを実践しているが、社会にその言葉が広がれば広がるほど、インクルーシブって何？という疑問を突き付けられることがある。誰もが一緒に学ぶ場のことをイメージしながらも、その定義を分かりやすく示すのは難しい。その中で、1月17日に行われた共生社会コンファレンス in 関東甲信越の分科会で行われた学生シンポジウムを見た大学生から、登壇した方々と一緒に授業をしてみたいという申し出があった。学生らいわく「わからない、知らない、だから、やってみたい」とのこと。インクルーシブの種はこうやって蒔かれていく。今後どんな果実が収穫できるのだろうか。こんな期待を抱きながら思うのは、やはりインクルーシブ教育は、やってみなければ、交わらなければ、わからな、である。

コンファレンスの分科会は「当事者の言葉からデザインする新しい学び—『学ぶ』を体感する学生シンポジウム」と題して、実際に学びの中にいる方が登壇し、発表し、自分の意見を言い合った。登壇したのは東京都練馬区の「モアタイムねりま」から3人、同練馬区の「i-LDK」の2人、茨城県つくば市の「シャンティつくば」の1人と東京都国分寺の「みんなの大学校」の1人。各地の学びの紹介や自分が今やっていること、なぜ学びに至ったのか、

面白いプログラムは何か、学びで自分が変わったことなどを、それぞれに語ってもらった。当日はいろいろ障がい者の生涯学習に関するいくつかの分科会のうち、この分科会だけは学生が主役、との基本方針のもと、それぞれの生の声を多くの当事者にも届けようとズーム会議だけではなく、ユーチューブでの視聴も可能とした。それぞれの学びの場の個性が発揮され、学ぶ彼・彼女らの生き生きとした様子が伝えられたと思う。その結果が先ほどの大学生の反応なのだと思う。

この登壇した方々の学びの場で共通して言えることは、どの場も、どんどん外に出ていくことを志向し、各地で自然とインクルーシブな学びを作っていることである。モアタイムねりま、i-LDK では上智大や静岡大の学生との交流を行い、シャンティつくばでは韓国まで行き、韓国の学生との交流を行っている。みんなの大学校も今期の授業の中では新潟青陵大学、浦和大学との交流授業やレクレーションを行った。分科会の報告の中で i-LDK の登壇者が上智大の学生に問いかけたのが「履歴書に学歴を書くことがなくなっても、大学に行くと思いますか？」だったという。なかなか本質を突いた質問だが、大学生がどんな応答をしたのだろうか、気になるが、ここからまた新たな議論や価値が共有できることが、インクルーシブな学びの面白さでもある。

障害者権利条約に明記されたインクルーシブ教育システムという言葉をどのように実践するかの議論も文部科学省の中で展開され、それも勿論大切ではあるが、当事者が自然と垣根のない交流の中で学びを実践することが、地域での共生社会の学びの望ましい形ではないだろうか、とも思う。今回の大学生からの申し出も大学生が絡み合い、その違いをお互いにカバーし、ケアし合える関係性を作れることが、できればお互いにとってかけがえのない学びになる。エクスクルーシブに別々になってしまい、分断化されてしまった側面もある特別支援教育を卒業した彼・彼女らが 18 歳以降に集う共生社会の中で真のインクルーシブな状態にするには、やはり大学生をはじめとする若い人の「交わろう」という自然な力が必要だ。この分科会は限定的にユーチューブで公開予定である。是非、見ていただきインクルーシブな学びを一緒に作っていきたいと思う。

メルマガ ジャーナリスティックなやさしい未来---2021年2月3日 第376号

押し込められた感情から「自分の人生を生きる」学びの告白

先般の本稿で紹介した共生社会コンファレンスでの分科会「当事者の言葉からデザインする新しい学び—『学ぶ』を体感する学生シンポジウム」の動画が登壇者の了解を得て、公開することになった。1か月の限定だが、この機会に是非見てほしいと思う。精神障がいや

発達障がい、知的障がいなど、それぞれ社会とのかかわりの中で、支援が必要な方ではあるが、それは誰もが一緒に学び合うことで楽しい人生がイメージできる、幸せな気分になれる動画でもある。ただ、この1か月という限定も非常に現実的な課題があるからで、やはりネット上で拡散されてしまい、将来的に知らない間に何かしらの被害の可能性を考えてしまうからである。その中で、みんなの大学校から登壇した水越真哉さんは、自分と同じ境遇の方にも希望を伝えたい、と決意し自分が変わった「学ぶこと」について、自身の想いを赤裸々に語ってくれた。動画でも確認できるが、ここで紹介し、その文面から「学び」の可能性を考えてほしいと思う。

水越さんは、40代からみんなの大学校の基礎課程の学生となり、今年度で基礎課程修了予定で、卒業論文を提出したばかり。今回の分科会では、学びに来る前の自分の心の状態を「障がい者」に押し込めようとしていた、と告白する。「私は一時期、障がい者としてただ、細々と生きて行こうと思っていました。落胆して、ある意味では決意さえしていた時期もあります。障がい者として、型に押し込められる、自分自身でもはめ込んでいく感覚に襲われていたのです。それが、学ぶことにより、自分の人生を生きようと思えるようになりました。学びから、ものごとを見る視点が客観的、多角的になり、新しい生き方が見えて来たのです。それは、将来に対する開けた視界であり、この世界を生きていきたいと思える感情なのです」。水越さんが開いた学びの扉は自分の人生につながったという感想は、私にとっては頼もしく、希望の言葉である。

その学びについて水越さんのこう述べている。「わがままに夢を追う自由という学びではなく、現実を見据えるための、生きていくための学びとしてなのです。学ぶほど現実には厳しく時に残酷であることを気づかされますが、それらを乗り越える力、希望もまた、学びから得られるのだと考えています。私のこれからの一歩として、社会にどう受け入れてもらうかという課題があります。これまで私は、自身に足りないことを知識で克服しようと背伸びをしてきました。もちろん、知識から得られるものは大きいですが、しかし、経験をつみ重ねたものには及ばないと思います」。もちろん学びは座学だけではないし、多くの人と交わることも大事なポイント。集合して体験するスクーリングが出来ない状況下でも、ウェブ上で出来ることも工夫しながら、その体験は広がっている。水越さんは基礎課程を終えた後は、その後2年が予定されている専門課程に進学する予定だ。

「大学校の残りの時間、これまでの知識を体系的に学問として学ぶことで、表面よりももう少し深いところまでの気づきに変え、社会に入っていくときの緩和剤としたいと思います。そして、経験のない私が少しでも周りに溶け込むには、何を経験すればよいか、注目していけばよいかの足掛かりとできればよいと願っています」。そして最後に「学びに関する思い」として、こう結んでいる。「大切なのは自己実現だと思っています。『自己実現への道』

とは『社会』の中で責任を持って生きるための力をつける過程だと考えています。自己完結な自己実現に終わらないためにも、その途上にいる時こそ、『社会』と関係を持ち続けることが大切であり、自己実現に向かうことだと思います。この『自己実現への道』とつながることイコール、『社会』とつながることであり、それは、特に障がい者にとっては、どの時点からでも始められる、生きられる人生がある社会であって欲しいと心から願っております」。

水越さんのお話も含めた分科会の動画はこちらから視聴できます。

【前半】共生社会コンファレンス☆分科会 4

https://youtu.be/t_gcnUm1WMM

【後半】共生社会コンファレンス☆分科会 4

<https://youtu.be/uTVpPdhvTck>

以上

本報告書は、文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課の事業委託費による委託事業として、一般財団法人福祉教育支援協会が実施した令和2年度「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」の成果をとりまとめたものです。

**令和2年度文部科学省
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業
特別支援学校高等部卒業生及び学びを必要とする障害者を中心に対象とした
若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業**

発行元：一般財団法人福祉教育支援協会

発行日：2021年2月